
鬼いさんが鍛えすぎたそうです

ていすと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼いさんが鍛えすぎたそうです

【Nコード】

N7224U

【作者名】

ていすと

【あらすじ】

憑依とか転生だとかをしたと思ったら、される方の肉体の方が強かっただけの話。

プロローグ（前書き）

刃牙の世界でオリ主が大暴れする…そんな風に考えていた時期が、俺にもありました

格闘もののなのに、まだ格闘しないだなんて

プロローグ

空想の話。大人が転生して赤子の時から意識がある状態から始まる描写を見たことがあるか。

そこに本来あるべき幼い魂を押しつけ、摩れた魂が入って第二の人生を…という話。

誰しも「もう一度やり直したい」とか「別の人間なら」だとか「来世に期待」だとか考えた事はあるか。

どうしても叶わないが、叶ってしまった場合の話が、創作上だが結構ある。

大人の知識と経験を得た子供が、その成長性を持ってより高みを目指すという話。

前世……大人だった頃に得られなかったものを手に入れる為に努力したりする。

教授レベルの頭脳、オリンピック選手を凌駕する力強さ、或いは恋を得る為に。

異世界で現代科学の粋を扱い、魔法を科学で助長、或いは否定したりする話。

こちらの話においては、経験というアドバンテージというのはとてもズルイ。

その世界において全てが予想外の知識。手札全てがジョーカーみたいなもの。

木に生った知恵の実を全て平らげるようなものである。

結局何が言いたいのかというと、だ。

現代における大人知識と経験というものは、空想の魔法に匹敵するモノである。

それぐらい卑怯であり、ズルくもあり、欲しがられる物である。

話が逸れた。

現代科学を信じる者にとって魂が別の肉体に宿るという事はナンセンスだ。実にナンセンスである。

だが、仮に宿ったとしよう。

大人の魂から知識と経験を得た子供がめでたく誕生し、その才を持つて活躍し、もてはやされたとして。

赤子の脳は正常で居られるのだろうか？

脳とは、大まかに言えば人の体験、記憶、感情……思考を司る器官である。

その日あった出来事、得た知識、覚えた感情を少しずつ刻み、成長する器官である。

しかし、成長した脳でも知識の欠損、いわゆるド忘れを起こしてしまう事がある。

レベルが高くとも、失敗する事はあるのだ。

では、真っ白な状態、創りたての脳がそんなモノをいきなり宿したらどうなるか。

皺の無い脳を電気信号が駆け巡り、瞬く間に皺をつけて大人同様の形になる。

そして脳細胞自体は赤子のままなので、大量に欠損を起こすだろう。その状態から第二の人生、前世の記憶すら残らない状態のまま、始まる。これが普通の転生である。

だが、何事にも例外は存在するッ！

仮に赤子の脳が、その脳細胞が普通で無い場合を想像してみるとする。

魂から大量の情報が送られ、脳が知恵熱を起こしてもせめぎ立てる。大量の皺が刻まれると同時に死滅する脳細胞。

その脳細胞が回復しようと分裂を繰り返し、単純な電気信号に耐えうる状態になる。

知識と記憶をつぎ込み、再び負荷が掛かって傷がつく脳細胞。

傷ついた状態を無視し魂からは知っているべき体験、感情が流れ込む。

それが10年、20年、30年、あるいはもっと多い……

しかし、それでもそこまで。

……魂が前世からだけ？

いや実は前世の時に覚えてないだけで、そのまた前世の分もあるのかも？

100、1000、10000……たくさんの、たくさんの魂があるのではないか？

それら全てを受けきるには、とてもとても、ただの例外には不可能。脳は耐え切れずに、大量の知識、思考に流されてあたかも白紙であるかのようになってしまう。

それらを受け止め、そしてなお回復しては成長しようと、進化しようとする脳に対して。

大量の思考を含んだ魂が、赤子にしようと傷つける輪廻の輪のサイクルが矛を向ける。

原初の、最初の戦い。

それは魂と脳の、根競べ。

成長とは、既にあるモノを鍛え、育てることである。

真つ白な状態から、0から0・00000000000001に成長させるには一種の神秘が必要だ。

この根競べは、その神秘の為の儀式。

それをどれくらい続ける事ができるかによって、赤子の経験……初期の脳の強さが決まる。

すまない……

長々と続けてすまなかつたツツ

結論から、言おう。

転生とは誰もが通る道で、命の始まりの儀式である。

ただ、その儀式、争いが熾烈で永い故に、普通は前世など無いと錯覚してしまうのだッ

前世を少し覚えている者は、普通を超えた異常である！

そんな異常でも永い争いの果てに、記憶の欠損などを僅かに起こしてしまっただろう……

だが、それでも辿り着けない境地がある……

魂と死滅する脳細胞の争いの果てッ 異常すら凌駕する例外の存在。

1日に1年分の体験を得るという矛盾のみを条件に存在する脳。

それに適応しようと日に日に成長し続け、軋みを上げる肉体ッ！！

那由他の時、その拷問に耐え

彼は今 魂達を超えた！！！！

「正直に言おう、ジョン」

私の夢、その為の玩具箱の中身が全て散らかされていた。

へし曲がったバーベル。中身が零れたサンドバッグ。両手でも持てないようなダンベル。

擦り切れた縄跳び用のロープ。動体視力を養うピッチングマシン。激流のプール。

撒き散らされているのは、夥しい量の、緑色の液体。

私が作ったステロイドは、確かに素晴らしい肉体を与えた。

勿論その分の副作用は予想していた、予想していたのだ。だが…

「全然足りん」

私の作品は、彼の潜在能力の前には無力だった。

僅か1年で、私の25年の夢…ステロイドを使い尽くすその消費力。ステロイドを溜め込み、溜め込み、溜め込み、それら全てが筋肉を与え尽くしたならば余分を吐き出す。

そうやって彼の贅肉は切り捨てられ、筋であるかのように高密度に圧縮された。

これを3回、彼は既に経験している。

今回は、それを実行する前後でなんら変化が見えなかった。

「そう、か…」

果たして、私は彼に力を与えることが出来たのだろうか。
そもそもこれはもう、必要なかったのではないのかと思う。

私の求めた強さとは、素手の人間が地球で最強の生物である事。
あの日1tをも超える大型猛獣を倒した人間を見た時に抱いた夢だ。
君が求めた強さとは、そんな私の夢をも凌駕する存在になる事。
私の夢を叶える肉体は完成したのだが、君は私を楽しませてくれない。

神に、喧嘩を売っても君なら勝てる気がしたよ。

「やはり相手が必要だな。肉体だけでなく、実戦が欲しい」

「……ッ、一言だけ言わせて貰いたいッ」

「……？」

「ステロイドはプロテインじゃないんだぞッ、ジャック」

クスクスクス、とフランケンシュタインの晒う声が響く。

プロローグ（後書き）

小ネタ短編に書こうと思ったが、いつの間にか長編に。
誤字脱字というより、文章としておかしいかもしれない。

そんな処女作だがッ、貴方に捧げたいッ！

ジャックさんの原作との差異

- ・ 憑依されたと思ったら鬼パワーで喰らっていた
- ・ 色々と思惑と嗜好が混ざり、ちよつと大人しい
- ・ 転生者の知識から、親と原始人に勝てるように幼少からトレーニングを始める

・ オーバーワークを起こし、死に掛ける

・ 5年ほど早くジョン博士と出会い、ステロイドを服用

・ 半年でマツクシング、メロンソーダを撒き散らす

・ 次の日、そこには懲りずに服用し元気に走り回るジャックの姿が

・ 1年でとうとう効かなくなり、しかたなく白熊と遊び始める

・ 貌を見て脅えた白熊に逃げられ、追いかけの繰り返しに飽きる

・ 闘いてエ

今ココ

番外 必殺技（前書き）

小ネタみたいなものです

番外 必殺技

カナダでの鬼いちゃんの日

ジャックの一日はトレーニングに始まり、トレーニングに終わる。

吸収率の良い薬を使い、肉体を酷使。

オーバーワークという言葉のを忘れてしまった肉体は、いつしか疲労という言葉すら忘れてしまったかのように。

本を片手にバーベルを片手で上下させる余裕すらできていた。

最初ソレを見たジョン博士 ジャックにとってステロイド提供者兼、トレーニング器具の持ち主 はその光景に絶句した。

「剛体術、鞭打、握撃、音速拳、当てない拳、紐切、打震、合気、バックマン、鬼の貌」

最初は何を言っているのか解らなかった。

だが、言葉の節々からそれが今必要なモノの単語らしい事が解った。

「俺だけの必殺技が欲しい、コレはその為の参考書、漫画だ」

読んでいる本の事が気になった博士に、ジャックは自分の読物を答えた。

「ま、漫画ア……？」

「既存の技術ではなく、新しい発想を持ってして産み出す技、それが欲しい」

「本気で、言っているのかッ!？」

「今ならかめはめ波ぐらい出せそうな気がする」

そついうと再び漫画を読み始める。

かめはめ波とは、中国武術で言う所の気を飛ばす技らしく、気の密度が強すぎるので目に見えるのだとか。

今までのイメージが塗り替えられて困惑する博士だった。

「さっぱり、解らんッ」

いつだったかジャックが言っていた科学者には辿り着けない境地、それが少し解った気が……やっぱりしなかった。

リアルシャドー上級者

闘う相手がいない。

自分の力を、極めた技を試す相手がいない。

相手の力を、極めた技をどう対処するか考える事ができない。

オーバーワークとは違った、自分の肉体を傷つける痛みというものに慣れる事ができない

相手を屠り、そして屠られる生死の境目、それに対する精神の強さを得られない。

戯れる相手は居る。

1tもの大型の白熊の攻撃を全て弾き、脅えて逃げ出そうとするのを回り込むという簡単な遊びだ。

何の反応も返さなくなったら頬に一撃を食らわすという行為もあったが、子白熊の前でやるのも気が引ける。

仕方ないので白熊を雪だるまへと変えていたが、そんな事を3日もやれば飽きてしまう。

格闘家にとっての死活問題にジャックは直面していた。

そんなジャックを助けたのがリアルシャドー。

自分が想像した相手と闘い、その際のダメージは実際に負うという

バキご用達の訓練法だ。

一番闘った……基、遊んだ白熊の、凶暴性が増したようなのをイメージし、ソレを叩きのめす事1週間。

ダメージすら負わなくなり、とりあえずバキでもイメージしてみるかと考えた時の事だった。

「イメージできねえ」

本の中での行動しかイメージできなかったのだ。

それでも十分なのだが、それを少しでも破り、倒せばイメージが終わってしまうのだった。

イメージは所詮イメージ、オーガのいう事は正しかった。

「というか屋内で暴れるのはやめてくれないかジャック」

そんなジャックに水を差すのはジョン博士。

ステロイドと破損した器具の代金に頭を悩ませる科学者である。

彼からすればジャックが一人で暴れて勝手に血を噴出しているように見えるのだが、説明を受けてからとりあえずは納得していた。

もっとも科学者に辿り着けない境地が多すぎる事に納得はしていなかったが。

今回は、影との戦いでボロボロになった床、壁の修復の代金を考えたが、施設の一部を廃棄する事も考えた。

「寒いから断る」

「掃除は自分でするんだぞッ!」

「……むっ」

ジャックとしても場所を借りている身、流石にそんな恩人の懇願命令を断る程の外道ではなかった。

出来た亀裂に散らばった塵とセメントを流し込み、とりあえず歪んだ床、壁を作るだけの簡単なお仕事です。

そんな時給0の仕事をやっている最中に、有る事に気が付く。

出来上がった亀裂にセメントを流し込もうと思ったが、一向に穴に流れていかなかったのだ。

蟲嫌いの子供が壁の黒染みを見て虫だと思うように、ジャックは黒染みや影が全て破損の後に見えていたのだ。

指を突っ込もうとしてもぶつかるばかりで、ジャックの目は錯覚をよく起こすようになっていたのだろうか。

自分の踏み込みでひび割れた床、白熊に叩きつけられ人の形をした壁、そして至る所に出来た、攻撃の回避の痕。

拳の振り下ろしで穴が、叩き付けて歪んだ痕が、回避の犠牲になってついた爪跡が、撒き散らされた血の痕が。

削れた爪跡を触る、その跡を指は確かに感じ取る。

塵をそこに撒き、指で跡をなぞると塵は流れる。

セメントで固め、平らになった床を撫でる。

指に、引っかかりを覚えた。

対戦士用必殺技

ボクシング、合気道、ムエタイ、空道、カポエラ、柔術、空手、中国拳法、プロレス……
そのどれもが対人間用の技で、どれもが素晴らしい歴史を汲んできた。

「バキは……」

それに対し、10と数年しかない歴史を持つこの技は、そのどれにも対抗できる。
相手が闘おうとする意志を持つ、それが強い程この技は恐ろしいモノへと成った。

「他人の目にも映させるほどのリアルシャドーを見せた」

「その表現力は、やせいのピクルをも怯ませた」

『他者の目にまで、イメージを見せてしまう』

それがバキのレベルであり、ジャックが思いついたのはソレを上回る事だった。

その日、博士はジャックの新しい技とやらを見て心底困惑した。
ジャックと白熊が対峙し、襲いかかろうとする白熊に対してジャックは拳を振るい吹き飛ばした、そこまでは良い。

問題は白熊とジャックの距離が3メートル、明らかなリーチ外の距離にいた事だった。

当てない拳？ フォース？ 遠当？ 衝撃波？

目に見えない何かが白熊にぶつかり、ダメージを負わせて吹き飛ばしていった。

バックステップをとったにしては吹き飛びすぎて、しかも胴体に掌の跡が浮かび上がっていた。

明らかな、だが不明瞭な攻撃の痕。

「ジョン、白熊がどうなったか見えたか」

「あ、ああッ」

「感想を、聞かせてもらいたい」

狼狽する博士。

自分の夢を通り越し、暴走していくジャックの夢が更に加速し、地球を2、3週してきてまた追い抜かれたような。

最強の生物を作るところか、もっととんでもないものを作ってしまったかのような気分だった。

そんな博士の、感想。

「君はいつから魔法使いになったんだッ!？」

ダメージを喰らうほどに想像したリアルシャドーを、相手にも見せる。

もつとも、相手がそこまでの想像力の持ち主の場合に限るが、そこは自分の想像力で補える。

そのリアルシャドーの相手を、ジャックではなく相手にさせる。すると、どうなるか。

相手が、勝手にダメージを受けるのだ。

バキが子供相手にレモンをイメージさせ、唾液を分泌させたのと同じように、相手にリアルシャドーをイメージさせる。

それが、どういった攻撃を放つかはイメージ次第だ。

相手のガードを崩すパンチ？

皮膚を切り裂くナックル？

体勢を崩す為のキック？

もし、それらを自在に操れるとしたら、とても応用が利く。

バキが、その類稀なる想像力で自身を強化するのを思いついたのに
対して。

ジャックは、それでも足りない想像力に相手の想像力を加える事で
攻撃を加える事を思いついた。

何も判らない一般人からは、いきなり相手が吹き飛んだかのように
見えるだろう。

それなりのレベルの格闘家には、第三者が割り込み攻撃を加えたか
のように見えるだろう。

もちろん実際に壁に穴が空く訳も無く、遠くにある蠟燭を消す事は
できない、出来ないが

「人間の脳には壁に穴が空き、蠟燭の火どころか根元を吹き飛
ばすように見える、というわけだ」

「……分野こそ違うが、もはや脳医学者の領域だぞソレは」

博士はこうは言うが、実際に脳医学者でも匙を投げるような話だっ

た。

その投げた匙をスウェイで回避し、ソバットをかますぐらいの発想。

「科学者では、理解できん領域というやつだ」

「……ッ、またかッ!」

「相手が打撃を喰らったように感じ、吹き飛んだと思い込んだだけのこと」

「だが、相手が仕組みに気付いてしまえば使えないぞ?」

「ジョン、必殺技つてのは必ず仕留めるから、必殺なんだ」

こうして実際に壁や物を壊すことはできず、ただイメージによって格闘家のみ傷つく環境に優しい技が、出来た。

自分自身と殴りあうイメージをし、その向きを反転。

そのまま前進させる事で連撃を相手に与える、一種のスタンド。

そのうち炎をイメージし、そのままアイアンクローを極める事ができるかも知れない事を想像し、晒うジャック。

「やっぱり、君が解らんッ!」

物の破損が減る事は望ましい事だったが、胃薬の量が増える博士だった。

この事が原因で、博士は自殺を考えるがそれはまた別の話

番外 必殺技（後書き）

リアルシャドーで相手を攻撃させる、この発想はあった。
ついでに言うならシャドーと重なって攻撃する事でより高度なフェイントを……

うん、もうドリアンさんの技だねコレは。催眠術じゃないけど。

以下、ジャックさんのボツネタ

- ・目の前に光る鏡が現れたのでステロイドを入れた 病弱姉超回復ルート
- ・冬木市で痴女にステロイド入りの血を吸われたと思ったら相手は痙攣していた
- ・本気で鬼を探して幻想入りし、鬼の角を押し折って泣かれた
四天王ルート
- ・飛び級で大学卒業し、麻帆良じゃなくてバキの高校で教鞭をとっていた
- ・モンハン世界でリオレウスとかをその場で捕食していた
- ・リアルシャドーで麻雀の牌を全て白に変えていた 闇に舞い降りるルート
- ・海鳴で真剣相手に対親父用カウンターの練習をしていた
- ・そもそもパスポートを持っていなくて牢屋行き アンチエインルート
- ・龍玉でインフレについていけるよう頼んで、伝説の野菜人と殴りあった
- ・エフツエフツ？でブリッツボール選手としてシンに挑んだ

・度重なる食事による金欠でボディガード
僕ルート

ツンデレ系お嬢下

・三国時代でいつの間にか王になっていた
に跪くルート

全ての女は鬼の血

な、長続きしそうにねエ…

飛驒の猿回し（前書き）

試しに闘いの様子を書こうと思ったたら実力が違いすぎて濃い描写は無理だ。

しかし、親子の実力の差が激しくても闘うのが、バキ。

時系列としては、バキ幼年編の話

飛驒の猿回し

飛驒山系にて

「天下取るなら飛驒行つてこ、か」

食料を詰めた鞆片手に山中をのんびりと歩く青年。

荷物の量だけを見るなら嚴重な装備をした登山家、と言ったところだが本人はピクニック気分。

その辺で落ちていた木の枝を振りながら、物珍しげに景色を堪能していた。

「カナダとは、やはり違う」

ブリザードの中、白熊と戯れるのも飽きたという事で第二の故郷、日本を散策する外人の男。

彼の提案に、理解者とも言えるジョンは溜息を吐いてこう告げた。

研究が進むまで遊んで来い、と。

ジャック15歳。何の因果か前世に得た知識を参考に、闘争の地を探して日本を巡っていた。

この地には、夜叉猿という大猿が棲むという。

古の武芸者の多くがこの大猿に挑み、そして無名のまま敗れて食われていったという童謡がある。

もちろん童謡や伝説という訳もなく、実在するからこそジャックはこの地を訪れたのだが。

当初は夜叉猿を監視するという大男の家を目指そうとは思っていたものの、ジャックはその場所を知らない。

なので風潰しに山中を歩き、鹿や猪、熊等を捕食しつつ、1週間が過ぎようとしていた処、不自然な円の岩を見つけた。

夜叉岩である。

「ふむ……まだバキはやり合っていないようだな」

ジャックは周囲を見渡して木々が折れていないかを確認し、先約がない事を確信する。

「獲物を横取りするのは性に合わんしな」

バキの対戦相手はどれもバキが成長するのに重要なファクターだ。だが地下闘技場で有名になるのも癪だし、常に2位のチャンプにしてやる訳にもいかない。

予定通り戦わせたいのは山々だが、自分も戦いたいというのも事実。

現在自身のレベルが把握できないというのもあり、手加減も判らない。

そこで有名でなく、実力もそれなりにあり、ドーピングの効果を確かめるのに相応しい相手を探した結果、夜叉猿。

万が一が発生しても逮捕されない相手、というのも良い

「動物愛護団体が怖いが、まあ仕方ない」

グラップラーの世界に来てから、そういった倫理を忘れてしまったかのような自分に少し苛立ち、

そんな男に目をつけられた夜叉猿に少し、同情してしまうジャックだった。

「何度も死んだ身、ならば闘争すら楽しんでこそ」

「ホキヤアツ！」

「闘るぜ、飛騨の大将」

パシン

大きく振るわれた拳を、蠅を叩くかのように男は逸らす。

そんな軽い動作で逸らされるとは予想しなかったのか、つんのめる夜叉猿。

（まだまだア）

奇妙な光景だった。

人は銃を持ってして始めて野生の猛獣と闘うラインに立てるとは聞く。

だが、目の前の大猿は猛獣よりも強く、喰らう為に闘うのではなく倒す為に拳を、爪を、牙を振るう、知性ある存在。

その有様は、自分の大切なモノを奪われて、それを取り返そうと暴力を振るっているかのようにも見えた。

『獣の爪ってやつア、よくしたもんでよオ……………雑菌の固まりみてエなものなんだ…………』

パシンッ

その巨体から振るわれる爪は木々を軽々と引き裂くだろう。

そんな豪腕の手首を掴み、弾いて距離をとる。

掴んで投げるなり、引き寄せて殴るなりする事もできたがジャックはそれをしなかった。

（俺はオーガやバキとは違う……………一切の傷も、負わんッ）

下手に雑菌が入り、ステロイドと化学反応を起こしてスパークしても困る。

良い方向に反応するのなら良いが、自分の運はそこまで良くないと知っていたジャックは、傷を避けていた。

「ガアアッ！！」

そんな様子を見て相手が劣勢と感じたのか、夜叉猿の牙が光る。

噛み付きこそジャックの専売特許だが、それに頼れば失敗するという事は知っているので使わない。

広げた口に対し、閉じさせるかのような左のアッパーカットを。

顎を開くという事は、脳への衝撃を加えるチャンスを相手に与えるようなもの。

ならばこそ、戦闘に使えるとしたら骨格の優れたピクル、身体の造りの違う夜叉猿、そして何でもありのオーガ。

ガチン！

脳へのダメージは考慮していないが、それでも仰け反らせて体勢を崩す事は可能ッ！

だが、ここで両者に予想外の事態が発生する。

ジャックはこれまでその脅威の肉体を、相手の打撃を弾いたり、受け止めたりと全て防御、回避の為に使っていた。

それを、口を閉じさせる為とはいえ、自分から豪腕を振った。

自分の意志で、振るったのだ。

ブオンッ

巨体が、舞い上がった。

手加減の範疇が未だに解らぬジャックの豪腕、その鉄槌の追撃。

その一撃は凡人でも、少々の強者だろうと一瞬で意識を刈り取って
いただろう。

知る人ぞ知る、見よ、あれこそはセルジオシルバ状態。

骨格が少々強い造りの夜叉猿は、上空に飛ばされながらも意識を朦
朧とさせるだけで済んでいた。

自身の見る景色が目まぐるしく動き、コンマ0・5の混乱に陥る。

大地が離れていく？

顎に衝撃を受けた？

頭に血が昇…

くっッ、殴られたのか、己はッ！

「シャアアアッ！！」

だが夜叉猿もさる者、乱れた体勢、朦朧とした意識ですぐに攻撃に
転じようと無我夢中で蹴りを放つ。

夜叉猿自身、それが通用する攻撃とは思わない。

しかし、このまま地に落ちて敗北を待つ事だけは認めぬ、認めない
ッ、認めてなるものかッ！

そんな念が、浮き上がった巨体に奇跡を見せた。

ビュオンッ！！！！

自身の全力の蹴りより速い風斬り音。

が大気を切り裂く冷たい感触に続き、重たい打撃の感触。

「ぬウッ！」

ゴシャッ！

人間が、吹き飛ばされていく。

そして、先程まで一切怯まなかった強敵の、驚愕の声。
自分でも驚くほどの、衝撃。

カウンターと呼ばれるそれは、ジャックに確かなダメージを与えていた。

これは使えるッ、この雄に通用するッ！

人間で言うところの、武に近いものを夜叉猿は本能で使ったのだ。その戦士としてのセンスは、おそらく野生動物の中でも頂点と言ってもよいだろう。

「ホキヤアアッ！」

夜叉猿が、跳ねた。

その野生の脚力にて宙へと跳び、巨体から成る体重、それをフルに使っての空襲。

それでも足りないのか、更に自身の身体に回転をかける。

野生の戦士としての本能在、それが今一番強い打撃を与えるのに必要な要素なのだと夜叉猿に教えていた。

遠心力。

鉄球を持ち上げて投げるより、紐をつけて振り回し投げる方がより少ない力で遠くに飛ばせる。

枯れ木を砕くのに張り手でなく、拳を握り締めて振り下ろす方が強く碎けるように。

原初の技術で、腕を振り回すのが一番効果的だと判断した人の祖先

のように。

それを意図的に利用するなど、他の獣にできる筈も無い技だったが、この夜叉猿は野生の中でも別格だった。

フォンツ

人体で、打撃に使うのに一番有効な部位、踵。

当然、人に近い夜叉猿にもそれは当てはまる事で、それを武器にジャックへと襲い掛かった。

ブンツ！

落下速度、体重、遠心力、高硬度の部位。

それら全てをフル活用するセンスは、野生動物ながら見事としかいえないだろう。

その巨腕から繰り出される攻撃は人を容易く吹き飛ばし、たちまち戦意を奪ってしまうだろう。

そんな猛獣が、本能から遠心力をも十二分に利用した攻撃を人間に振るおうというのだ。

ガシンツ！

確かな感触、それに伴いジャックの足元が沈む。

目の前の相手に、かつて己の家族を奪った男の面影を視たのか一切の躊躇無き打撃。

野生の獅子とて、食べる為に獲物の原型を留める程度には手を抜くが、今の夜叉猿においてそれは無かった。

だが…

「良い子だ…」

そんな攻撃を異様に発達させた肉体で、両の手を交差させて受け止められるのは、はたして人間と呼べるのだろうか。
ニタアツと、ジャックが晒う。

勝敗問わず、彼にとってこれは初の実戦とも呼べる戦い。

幼少の頃よりのオーバーク、前世からの魂すら飲み込む、忍耐の精神。

そこより得た知識と経験、祝福を貰った母からも、オーガの子と呼ばれる程の、強さへの渴望。

それでも彼は弱い、なぜならバキともオーガとも違い相手に恵まれないからだ。

ガイアも、花山も、愚地も、海王も、渋川も、本部も、鬼もカナダにはいない。

必然と、戦いと呼べるモノは無く、トレーニング重点の生活を送ってきた。

その事が彼を、早過ぎるフランケンシュタインの契約へと踏み切らせてしまった。

だが、引き継がれた理性だけは、彼をジャック・ハンマーへと育て

なかった。

相手を傷つけるという行為と、それによって生じるリスク、法律という忌諱が彼をケンカ屋へと導かなかった。

ただの、ジャック。

母ジーン改め、ダイアン・ニールの子供、ジャック・ニールの戦い。

だがそんな理性に対し、劣性といえど、あの鬼の血が我慢できるだろうか。

「邪アツ!!」

フラストレーション。

脳のリミッターを外すのは脳内麻薬やステロイドだけではない。

親が子を守る時、親を喜ばせようとする時、大切な者を守る時等に生じる、色を知った時の感情。

この感情は、人に想定外のパワーを引き出す手助けをしてくれる。

今回ジャックのリミッターを外したのは、そういった暖かい感情とは真逆のモノ。

抑圧された殺傷本能のリバウンド、ストレスの爆発だった。

一撃必殺、それは言葉としては良く聞くものだが、ただの暴力がその領域に入る事はまずない。

剛体術、音速拳、菩薩の拳、そのどれもが使い手の理に基づいた攻撃。

だが単純な暴力が、一撃で相手を倒してしまつてよいのだろうか。

そんな不条理を許してしまう、それこそ格闘家。
強さこそが法、強きことは美しい、それに惚れこんだ男ならば、誰にでも許されてしまうのだ。

強靱な肉体が繰り出す、ただの暴力。

ジャック・ハンマーは簡単に振るおうにも振るえないそんな感触に、KOされていた。

堪能、していたのだろう。

そして一度爆発した本能はすぐに冷め、すぐに理性が活動し始める。
腹に赤手形を貰い、グツタリと倒れる夜叉猿。

そんな彼に慌てて駆け寄り、その様子を診るジャック。

「……掌ならば、まあ大丈夫か」

衝撃に驚いたのか、それとも肺に圧力がかかったのか、息を乱れさせてはいたが今後に支障はなさそうだった。

（脈もある、呼吸も……時期に正常になる、か）

結局吹っ飛ばしてしまったがバキとの戦闘頃には問題ないだろうと思ひ、その場を去る事にしたジャック。

「す、すっげエ……」

その足を止めたのは、少年の声。

ジャックの額には戦闘の汗に混じり、どう誤魔化そうかという冷や汗が流れ始めた。

飛驒の猿回し（後書き）

と、トーナメントの実況がないとここまで寂しいとはッ

パンチとかより雑菌の方が怖いジャックさん。

バキと夜叉猿の戦いでは、引っかきと噛み付きの連続攻撃、コンビネーションを使ってきましたので、今回はその一撃特化版。
この夜叉猿の首とか顎は人よりちよつと強い。

常にマツクシング状態の筋肉ですが、脳のタガが外れていない時は普通の打撃です。

憧れ（前書き）

よくある勘違いものです。

懂れ

夜叉猿と、戦う。

それぐらいしなくては、強くなれない。

そう思つて夜叉岩でキャンプを張ろうとし、鍛錬器具の一式を置いた時にソレを聞いた。

打撃音の音、獣の雄叫び、自分の第六感が告げる闘いの空気。戦士としての本能が、それらに釣られて足を動かしていた。

夜叉岩奥での戦闘を見て、二人のレベルが自分より上だと気がついた。

しかしこの二人に勝てないようではオーガと、親父とやりあうなど、夢のまた夢。

無茶でも無謀でもいい、ただ我武者羅に挑んで、挑んで、挑みまくつて強くなりてエ。

そう思つた時、夜叉猿が宙を跳んだ。

「~~~~ッ、ただの獣じゃ、ない……ッ!!」

そこから回転を加えた攻撃、それは幼い頃に見た親父の攻撃をイメージさせるものだつた。

（アレを喰らつたら不味いッ!）

夜叉猿の体重は、ヘヴィボクサーの体重を軽く超えるだろう。

そんな体重を全てかけ、さらに遠心力を加えた打撃を喰らえば拉げ潰れるか、地に臥すだろう。

ガシンッ！

（う、受け止めたッ?!）

ガードをしていたとはいえ、アレをまともに受け止めた。

だが、あの男は無事なのか。

ここからでは表情こそよく見えないが、その衝撃たるやそれも歪まざるを得ないだろう。

「良イ子ダ」

ゾワ、と自分の背筋が固まる。

その瞬間脳裏に過ぎるモノは、鬼のイメージ。

（……ッッ！親父以外にもッ、ここまで凄い奴がッ！）

邪 ア ッ ！

男が一撃で、怪物を吹き飛ばす、そんな御伽の国の入り口を少年は見失ってしまった。

「す、すっげえ……」

すっげえ闘りてエ〜ッ！

一種の、憧れ。

自分の父なら、その暴力を振るって目の前の大猿を絶命させていた
だろう。

だが、この男はそれに近い能力を持ちながらも、相手を気遣う素振りを見せていた。

まるで相手に敬意を払っているかのよう。

自分の父親が、こうあつて欲しいような。

どこかそんな憧憬が、浮かんた。

そこから、どうやって会話の切欠を作ったのかはよく覚えていない。ただ無我夢中にどう話せばこの外人の男と戦えるのだろうか、どうすれば闘えるのかだけを考えていた。

自分は戦いたい、そう示そうと握りこぶしを突き出し、男に向けた。

英語やジェスチャーには詳しくないが、それでもグラップラーなら通じるハズだッ！

言葉が伝わらずとも、文化が違ってても格闘家ならば解ってくれるハズだッ！

そんな思いを籠めて、拳を外人の男に示した。

「日本語デOK」

「え」

結構簡単に通じた。

自分が闘おうとしていた夜叉猿、それを一撃で倒した男。
ジャックと名乗った男と、闘いたいと頼んでみたが、どうにも相手は乗り気では無いようだった。

「君ガアノ猿、夜叉猿ヨリ劣ルト思ウナラバ、マズハソツチト闘ウトイイ」

「ッッッ！」

「順序ト言ウモノガアル」

目の前の男からして、確かに自分は弱いだろう。
だが自分で、夜叉猿より弱い事を示せというのかッ！
そう言いたげなジャックの言葉に、刃牙は怒りを覚えた。

自分が、相手にされていないようだった。

自分という雄が、まるで子供を見守るような慈悲の眼で見られているような気がした。

ソレが無性に悔しく、自分は弱くない、闘えるのだと思い、拳を打ち込んだ。

放とうと思った瞬間、自分の時間が引き延ばされたような感覚を覚える。

（なんだコレは？）

自分の拳を握り締める。

相手を打ち抜くよう、手首を空に、甲を地に向ける。

（何が起きている？）

相手の喉へぶつけようと腕を伸ばし始める。

ジャックと、視線が合った。

（この感覚を、俺は知っているッ）

ニヤリと晒い、その表情が一瞬歪んで見える。
見エ見エダゼ、とでも言いたげな表情だ。

（確か、親父が言っていた、……走馬燈）

急遽喉へのストレートから、顎へのアッパーに切り替える。
普段ならばできない軌道変更だが、引き伸ばされた時間がそれを可能にした。

『死に際の集中力、こいつをモノにしろ!!!』

それは、憎き相手からの教え。

それが今、自分を認めさせたい相手へと届かせようとしていた。

（だが、何故動かない？）

目の前の男は、自分の攻撃を明らかに見切っているハズだ。
このままだとモロに当たっちまうぞ？

いいのかよ。

目の前の餓鬼に、簡単に攻撃貰っちゃっていいのかよッ！？

「シャオラアッ!!!」

空気を切り裂き、顎先に感触を覚える。

だが相手は動じていない、喰らってもなんともないとでも言いたいかッ？

フッ

だったら、その間違いを修正してやるぜッ！！
このまま振りぬき、眼にモノを見せ……

「遅イ」

さっきまで視界に入らなかった掌が、俺の拳を止めている？
一体いつから、いや、触れる瞬間割り込んだ、のか？

「辿り着クマデニ、眠ッチマウトコロダッタ」

「……ッ！」

ギユウツツ、と拳を握られる。

拳が、まったく動かない、いや動かせないッ！

（なんて、力だッ）

この力に捕まったまま、まともに殴られてしまえば戦いどころか、
一瞬で終わり。

回避も出来ぬ状態を避けるべく急いで拳を離そうとするが、そんな
バキを制するジャック。

「一ツ、条件付キデ相手ヲシヨウ」

「……え？」

殴られるかと思いきや、相手は意外にも俺の頼みを飲んだ。
後になって思えば、これがバキとジャックの戦いの始まりだったの

だろうか。

「日本二八忍者や、天狗、鬼ガ居ルト八聞イテイタ」

「一度、会ッテミタイト思ッテイタンダガ…」

「何力知ッテイタラ教エル、ソレガ条件ダ」

忍者とは、その主の勝利の為にはどんな物を使っても勝利へと導く、影の者。

その諜報活動力と、証拠隠滅能力、その徹底性は目に余るモノといえよう。

拷問を受けたり、自白剤で情報を吐かされる前に舌を噛み切つても喋らないという精神。

仲間の情報を敢て知らせない事で情報漏洩を防ぐという制度。また単独での行動が主で、単騎で集団に対峙する戦闘能力をも持っている。

一般人に扮し、大衆の心理を容易く動かす為に培われた話術、情報を引き出す交渉術。

今でこそ科学文明が優れ、平和な国となった日本。

その政治的交渉力は先進国においても最弱レベルともいえるが、それこそ過去に忍者に交渉を任せていたという証拠ではないか。

日本各国の有名所の大名達、そのどれもが重宝していたという話は、各歴史的史書よりその存在を証明している。

もはや忍者は、国を動かす存在へとなっていた。

そんな恐るべき忍者は文明開化を境に姿を消していった。

余りにも有名になりすぎて、隠密という意義を忘れ始めるのを恐れたのであるとか、歴史から姿を消した。

それからは諸君も知つての通りの日本という国が出来上がった。

故に、現代の日本において忍者はいないとされている。

そう大衆に思わせる事こそが、忍者の狙いだっただ。

日本の技術程、素晴らしい金となる木を各国のエージェント達が狙わぬ道理は無い。

だがその技術が流出した例は無く、あるとすればそれは撒き餌、凶悪な代物ではないものばかり。

だが世間は忍者という存在を正しく認識していない。

それは、忍者と関わりのある者達がそうなるように情報を操作しているからだ。

漫画等にはその存在こそ載ってはいるが、そのどれもが実態を掴ま

せぬよう不可思議な存在として描かれている。

火を吐く火遁、水面を歩く水蜘蛛、飛行機も無い時代に空を往く風、その姿を増やす分身の術。

いつしか忍者は、架空の存在となっていた。

では、実在する忍者はそれに対してどう思うだろうか。

任務を遂行するのに丁度良い目晦まし、そう考えるだろう。

忍者は、世を忍ぶ者。

架空へと姿を変えられどもその存在は日本を動かしているだろう。

だが、もちろんその関係者は一般人同様架空のものだと言い張る事は聡明な諸兄に言うまでもない。

民明書房刊

『各国から見る日本の低政治力の理由』より

だが、そんな四方山話を信じる者がこの日本にいるだろうか？

いるとすれば、それは…

「オレノ知ッテイル知識ハココマデ、ダガ情報ガマダ足りナイ」

「……」

「ソレニツイテ、情報ガ欲シイ」

「いや……え？」

「マア、簡単ニ見ツカルトモ思ッテイナイ、イナイガ、日本ニ来タナラ見テオキタカツタ」

日本の文化をよく知らず、真に受けている外人ぐらいだろう。それを屈強な男が真顔で語るのだ、想像もしたくない。

「他ニ有名ナモノハ、SUMOダナ」

「ああ、それなら……」

「手カラ衝撃波ヲ出ストUPPARIヤ、地震ヲ引き起コスYAGURA」

「は？」

「TUNAMIヤ、日本ガ地震大国ト呼バレル由来ハ全テSUMO

「Uニ在ルトモ聞イタ、ダガ……」

やはり、国家機密級ノ存在ニハ出会エナカタナ、と。
犯罪を犯してでも会おうとは思わない辺りに、男の謙虚さが窺えた。

「マア、イザトナツタラ議事堂ニ乗り込ムツモリダ」

得意げに、しかも流暢な日本語で話す男相手に、頭を痛ませるバキだった。

「コノ辺リニSHINOBIノ集落ガ在ルト聞イタガ、猿シカ居ナカタ」

実ニ残念ダ赤影、とうな垂れるジャック。

とても残念そうなその様子は、極上の料理を逃し、野菜スティックに蜂蜜をかける親父くらい残念だった。

「あ、あの……忍びつて、忍者の事ツスよね？」

「ウム、一度ハ才目ニカカリタイモノダ」

「……」

念の為、聞き間違いかとも思い聞いたが、いよいよ持ってマジに言っているらしい。

複雑な心境だった。

冗談じゃ、ねえ。

目の前の男は、そんな架空の存在を探してこの山に来ていたのか？
あの夜叉猿と闘っていたのではなく、ただ追い払っていただけなのか？

格闘家でなく、ただの観光客に自分は戦慄を覚えていたのかアツ！！

そう考えると、自然と拳に力が入っていた。

冗談じゃ、ねエツ！！

「ジャックさ……ジャック」

理性が敬語を口にに使わせようとしていた。

一応は、初対面で年上、そして強者であり、敬意を払った。

だが、その強者のありようが、どこか気に入らなかったツ！

それを示すかのように呼び捨てるが、その本人は気にしてはいないようだった。

それが、更に苛立たせる。

「馬鹿かテメエツ！！」

何を持ってして馬鹿と呼んだのだろうか。

日本を間違って認識している外国人にか。

ありもしない存在に対し、闘いを求めている男にか。

そんなガタイで格闘ではなく観光しにこの山へ来た事にか。

一瞬でも懂れてしまった、自分にか。

「…ナンドトオ？」

「そんな存在が居るわけねエ、そんな事ぐらい、ガキでも判っている事だろっがッ！！」

「ジャパニーズジョークハ、笑イドコロが難シイナ」

「冗談に、見えるかい？」

「……クスッ」

クスクスクスと、男が晒う。

心底バキの言っている事を可笑しそうに、ジャックは笑った。

「認メロ……ッテイウノカヨ？」

格闘家の、貌。

憧れ（後書き）

架空の存在であるNINJA、SUMOU。

では、鬼が実在するこの世界、彼等は架空の存在なのだろうか。

それを知る事は誰にもできない。

ジャックさんの日本イメージ

・一般人の1割がSHINOBIの末裔で、普段の体たらくは力モフラージュ

・あえてその事に誰も突っ込まないのは暗黙の了解である

・毒をもって毒を制すとあるように、生の魚を食する事で耐性を高めている

・軍隊がないとされているのは、機械の兵隊で補えるから

・MANGAとは、そういった技術を我慢できずに伝えてしまう

者の書物

弱い奴、強い奴（前書き）

この小説は不定期です。そしてたまに修正されたりします。

大丈夫、誰も食べられたりしません。

弱い奴、強い奴

「やっぱりアンタ、ソッチの方が似合っているぜ」

格闘家の、怒ったような形相を一瞬、そして一転して無表情に。
無防備に見える大人とファイティングポーズをとる子供。

静かに相手を見据えるジャックと、すぐに飛び掛れるように構える
バキ。

「オラアアアツツ!!」

それでも二人の実力は、釣り合わなかった。

胃にパンチを、脇腹に蹴りを、脛に回し蹴りを、米神にジャンプしてエルボー、顎に全身のバネを使ったアッパーを、喉に貫手を。そのどれもが大人を蹲らせる一撃で、そのどれもがまともに命中していた。

拳がめり込んだと思ったら腹筋に弾かれ、脚に良い衝撃音を感じても相手の姿勢は崩れず。

脛を踵で強打しても相手の表情は変わらず、ヒットさせた肘は逆にこっちが痺れて使えなくなる。

「チイツ」

ならばと思い、距離をとってから最大加速に乗った拳を顎に撃ちつけるが見下ろす角度が少々上がっただけに留まる。

かくなる上は、鍛えようが無い喉に抜き手を放つが、苦しむ素振りも見せない。

「つ、通じないッ、のかッ！」

一切動じないジャックに焦りを覚えたバキは、躊躇なく次の手を打つ。

振りかぶった脚でサッカーボールキックを、金的に。

まともに喰らえば親父でもッ……いや、親父は無理だからそれ以外ならば大体怯むような一撃を打つ。

そしてそれは確かに直撃し、ジャックを反応させた。

「ソレハ、痛恨ノ一撃ダゼ」

瞬間、バキは脚を掴まれて布の如く振られる。

殴られもせずにただ振るだけだったので、ジェットコースターを一瞬体験した、それだけで済んだのは幸運と言える。

意識を飛ばしかけ、その視界に移ったのは逆さまのジャックの姿。

「コ・ツ・カ・ケ、琉球カラテノ技デ鞆丸ヲ隠ス技ダ。

野生ニ挑ム前ニマズ自分ノ国ノ技術全テヲ学ンデオクベキダツタナ」

「……ッ」

「軌道、状況、共ニ読ミヤスク、通ジナイ時、隙ダラケニナルカラ狙ッテ打ツノハオススメシナイ。

少シダケダガ、タメニナツタロウ」

大柄の大人に宙ぶらりに吊るされ、子供に言い聞かせるように喋るジャックに憤り、次の手を放つ。

油断している最中に目潰し。

少々姑息だったが、それぐらいやってこそ自分はこの雄と対等に闘えないとバキ自身思ったのだろう。

「シャオラアアッ！」

まともに当たれば脳にもダメージを与えられる。

そんな一撃をジャックは許す訳もなく、パシッとその指を捕らえる。

（今ッ！）

バキは、この瞬間を待っていた。

相手の片手は、足首を掴み、もう片方は自分の左貫手、目潰しを食い止めている。

制空権どころか懐に入り込んだ、比べて小柄なバキの方が有利なのは明白。

そして相手の両手を封じ、こっちは片手がフリー、しかも相手は目潰しを捕らえ安堵しているだろう。

しかし、地に足をつけていない状態、まともな攻撃は通じないと見て良い。

相手に与えれば通じてかつ、相手がもうしてこないと思いがちな目潰しを二連。

「シャアッ」

ガツン、と。

不安定な体勢で今のバキが出し得る最大の貫手、それがジャックの額に破られる。

予想だにしない時の突き指の痛み、それが接触音より送れてバキの

脳に伝わる。

声を上げて痛みを紛らわせたかったが、悔しいからかそれはしない。

「やっぱ、駄目かッ」

薄々、この男には何をやっても通じないような、そんな奇妙な信頼感があつた。

それもあり、普段は使わないような金的、目潰しの多様だったが効果はなかった。

「目潰シハ視界ノ妨害、動揺コソ誘エルガ、逆ニ言エバー番見ツカリヤスイ攻撃。

シカモ的ハ小サク周囲ノ骨ハ頑強、俺相手ニ使ウベキ技デハナカツタナ」

「他に、通じる技が、ねエからな」

「コレハ自論ダガ、武術家ニトツテ禁ジ手トハ、読ミ易ク弱者ガ好ンデ使ウカラ禁ジ手ト呼バレル。

マア、次ハ普通ノ打撃ガ通ジル程度ノ筋肉ト技ヲ身ニツケテカラカカツテコイ」

イツデモ受ケテヤル、そんな言葉と同時に浮遊感と落下する感覚に包まれるバキ。

（負け、か？）

自分の脚を掴んでいた右手が、既に地を擦るようなアップーの体勢を整えているのが見えた。

（ああ… コレは顔に当たったら死ぬな）

先程自分が垣間見た、死に際の集中力。
それによりさらに強烈なスローモーションをバキは体感していた。

（親父なら、コイツにも楽に勝てるんだろうな）

誰よりも憎いが、その強さは誰よりも信頼（オフクロには負けるが）
でき、勝利する姿が思い浮かぶ。
振り上がる拳の軌道が、頭からやや上、逆さまの胴体へと向かうの
が見えた。

（メシ、食えなくなっかな…）

コレを喰らったら、しばらくモノが喰えなくなるのはキツイ。
自分も沢山喰って、肉着けて、夜叉猿と闘って、ユリーと闘って、
そして…

（……親父に、勝ちたいッ）

相手の拳が、自分の腹に触れようとする。

（コイツ、にもッ、負けられねエッ！）

集中力が高まったのか、夜叉猿に使ったものよりもどこか遅く見え
た。

いや、コレは忌避しているのだ、バキでは貫かれてしまうのではな
いか、というもしもの想像。

そんな感情からか、ジャックの拳は無意識に減速していた。

（この期に及んでッ、手を抜くなッ！！）

腹部を襲うと思ったドギツイ衝撃はなく、ただ単純に押され、圧力をかけられるだけの感触。

痛覚は無い、ただその押される速度によって腕、脚の血液が指先に偏るというイヤな感じが一つ。

固定されない頭部が、胴体の急な移動でくの字に曲がり、その速さで顎を首の根元にぶつける感触が一つ。

パンチの風圧、それと軽く触れただけ、まだその程度で済んでいた。その両方とも、自分を動けなくさせるようなものではない。

（本当に、通じないのか？）

バキの精神は、敗北から既にどう闘うか、どうやって勝つか考えるまでに回復していた。

臓器が押される感触は、我慢すれば良い。

吹き飛ばされて、地面に頭を打ったら、打った時に考えるッ

今は、攻撃を、コイツに通じる一撃をッッ！！

（死力を）

遅くなった時間、その中でも普通に襲い掛かってきた拳に対して。バキのフリーになった両手はその3割、それくらいのスピードでその拳を無意識に止めようとしていた。

（死力をッ）

勿論、それで追いつくはずも、止められるはずも無く、まともに命中するだろう。

痛みを覚悟した瞬間、バキの脳は腹部への衝撃を和らげようとエンドルフィンを分泌する。

エンドルフィン、脳内麻薬の一種であるソレは極限状態の肉体から苦痛を取り除く。

それによって筋肉は、脳によってセーブされていた本来の力を発揮する事を可能とする。

（死力をオオツツ！）

何十もの錘をつけたかのように動いていた両手は、溜めていたものを解放されたかのように動きだす。

痛みを和らげる脳内麻薬は、バキを一流の戦士の領域へとシフトさせた。

バシッ

食い止めようと拳を挟もうとした両手は、そのシフトに適應できず、己の指同士を絡めとり合ってしまう

グンッ

拳の軌道を逸らそうと引き寄せるが、相手の拳は動かず、自分の身体が再び浮かび上がるのを感じた。

重力に引き寄せられるのに反抗し、ジャックの攻撃を逆にまともに受けてしまう。

ここまでが、なんとか『防御』をしようとしていたバキの動作。

それと同時にバキは、自分が信頼し得意とするとび蹴りを不安定なまま放とうとしていた。

この無意識の『攻撃』が、バキに最高の選択を選ばせた。

「死力を尽くせよッ！ジャックッハンマアアッッ！！！」

ジャックの、振りかぶり^{ハンマー}は。

力任せに振り回す凶器は、本来ならバキの目に映る事も無かった。

振りがぶつた拳を腹に打ちつけ、相手の身体を浮かせる事コンマ2。地球という支えを失った、精々が50キロに満たない肉の袋を拳で押す事コンマ7。

めり込ませた拳をソレごと振りかぶり、身体を半回転させること1秒。

衝撃を受け、拳から離れようとする身体を更に追いかけて、もう半回転させる事1秒と半分。

その急な体重移動に血液が、臓器が、脳が揺さぶられる。

方角を決めて、その向きを決定し動きを止める事2秒近く、この時点でバキの意識は先に吹き飛んでおり。

吹き飛ばされる身体に対し、閉じた拳から全ての指を弾き当てて更に加速させるまで計2秒。

これがジャックがやろうとしていた事、だが。

（コレハ）

対してバキの動作は、意識朦朧とし脱力しきつたバキの動作は、ジャックの腕を視点とし、とび蹴りを放とうと脚を額にめがけて放とうとして。

斜めになった胴体を、ジャックが死なない程度に押ししまい。

（コレデハ、マルデ）

逆さまに起き上がる手助けをしてしまう。

鉄棒に脚をかけて宙ぶらりになったとして、その身体を押せばどうなるか。

勿論、落ちる、が、それは引つかかった脚が外れた時に落ちる。もし、その脚が絶対に外れない時、身体を押しても落ちることはない。

むしろ加速をつけて容易く起き上がるだろう。

ここでの引つ掛ける支点は、バキの両手。

この両手はエンドルフィンで限界を超えた力でつかみ合い、直接攻撃されない限り解けることはない。

解けたとしても、結構なラグがあった。

鉄棒のように回転をかけさせる為の体重移動は、その両手の引き寄せと、とび蹴り。

回転するには弱い、バキの身体能力がそれを可能にする最低ラインに達していた。

成人した男性より赤子の方が高所から落下しても無事な確率が高い。

この、年齢による柔軟性がジャックの攻撃を流してしまった。
ただの子供ではなく、その重要性を知りつくしているバキならば尚
更に。

そして、ジャックの攻撃が、弾く殴打ではなく、押し出す拳、この
手加減がバキを救った。

バキの身体は、ジャックの腕を支点に、変則的な逆立ちをするよう
な姿勢へと変わり。

その途中にジャックの拳を受けて姿勢が崩れ、高速回転させられる。

そして放とうとしていたとび蹴りは宙を切る。

全ての偶然が重なった反動は、バキの身体を更に上へと持ち上げて
いき、

ジャックの拳の速さを加えて、踵落しが頭部へと吸い込まれようと
していた。

（消力ッ！？）
シャオリー

元々は、防御の奥義。

振り子に衝撃を加えてもまたもとの場所に帰ろうとするような力の
ように。

どんなに強くプロペラを殴打しても速度を上げて回転するように。
相手の攻撃を完全に流す、最高峰の防御技。

そして、流した威力を最高のタイミングで相手にぶつける、攻めの
シャオリー
消力。

その威力たるや、オーガの全力に匹敵しかねない一撃にも変わり得
るだろう。

それがバキ本来の身体能力に加わってくるのだ。

それは、偶然だろう。

同じ事をやろうと思っても二度とはできないぐらいの、偶然。

地下闘技場ではなく、山奥で出会ってしまい、そして闘うぐらいの偶然。

圧倒的な実力の差を、決着の瞬間にエンドルフィンをで覚醒するほどの、偶然。

（偶然デハナイッ）

これは幼いバキの戦闘センスが、感情が、鬼の血が、存在全てが導き出した最大の攻撃。

ここまでの攻撃は、他に出せるとしたらオーガが自分ッ！

避けれない、避けられない、避けてはいけけないッ、コレほどの技をッ、他でもないお前がアッ！！

（受ケキルッ！）

両手は間に合うわけがない。

既にバキの踵が毛髪に触れようとしているのだ。
ならばどうするか。

（自分ノ知ル、技術デッ！）

全身の筋肉と間接による重心移動をフルに使って回転を掛け、ダメージを減らそうとする。

つま先、踵、膝、腿、腰、背骨、首、頭部。

それらを使ってスリップダウンに近い状態を生み、頭頂の旋毛から側頭部へと打点をスラし、左肩で受け止めた。

ゴッ

自分の、絶対的自信のある筋肉の壁を、衝撃が突きぬける。

そんな一撃をはなったバキも、当然無事ではすまずに、受身もとれず頭から崩れ落ちる。

弱者の為の、武。

強者からの攻撃に対して、無謀にも挑んだ弱者の武は、確かに暴力という矛を止めた。

中国拳法の長をもつてして完成させた技術を未完成ながら放ったバキは。

「腹部二擦過傷、エンドルフィンニヨル急ナ筋肉活動デ明日ハ筋肉痛、ソシテ落下ノ際ノタンコブ」

それに対して、ジャックは。

「頭部二刺傷、肩二青痣」

ドクドクと血が流れ始め顔を横断する。

受け止めた肩はジクジクと痛み、しばらくは忘れる事はできないだろう。

いや、一生忘れる事はないだろう。

「決着時ニ、高イ場所ニ立ッテイタ奴ガ勝ちトハ言ウガ」

致命傷も無く倒れ臥すバキと、血を垂れ流すジャック。

もし、バキが自分と同年代で、あのトーナメント時点でこれを極めていたら間違いなく負けている。

いや、自分は負けた、のだろう。

「黒星カラ、スタートカ」

自嘲しつつも、バキの戦闘センスに喜びと悔しさを感じる。

グラ、と巨体が揺れるが地に崩れるような真似は、意地でもしなかった。

「兄ッテノハ、イツモ弟ノ壁、デナクチャナ」

持ってきた荷物の中からガーゼと包帯を取り出し、軽く止血。

念の為病院に行ってきた方が良さそうだ。

そう考え、足早にバキを抱えて草木を掻き分ける音へと放り投げた。そこから現れた大男はバキをキャッチし、放り投げた見慣れぬ男に警戒する。

「ソイツヲ、頼ンダ」

さっさと宿をとって、今日は寝よう。

少なくとも今までで一番良い眠りにつけそうだ。

「頭、痛ッテエ……」

弱い奴、強い奴（後書き）

流石に頭蓋骨陥没は避ける。

これがバキでなく妖怪爺なら遠慮なく鬼の貌まで出せたかも知れませんが。

最初はバキが山小屋までハンマー投げをされるだけでしたが、主人公補正で少し濃い戦いに。

ちよっとトンデモ理論が入ったが、スルーしてくれると有難いッ！

今回使おうとした技

五点着地の衝撃を分散させるの 大人にも通じる踵 三重の極み
消力

コツカケ スリップダウン カウンター

暇人（前書き）

加藤オツツ！

暇人

神心会空手。

愚地独歩を長とし、その下に100万人の弟子を持つ大規模な武道団体。

フルコンタクト系の空手の頂点であり、それを知らぬ空手家はいない。

館長の虎殺しは有名で、神心會館本部にもそれが描かれている程。

人の身で、猛獣を倒せる。

このネームに惹かれ、それぞれがその領域に辿り着こうと強さを磨き、会員同士互いに高めあう。

そうして己を高めていった先には、木片、土管、コンクリートブロックを容易く粉砕できるようになり、いつしか武器も必要としなくなる。

もちろん物ではなく、対戦相手を倒すという事が原型である。

だがどちらも己を鍛える、という意味ではどういった目的でも正しい、といえるだろう。

一心不乱に鍛え続けるその姿は、一種の神々しさすら感じる。

故に、館長は『武神』とまで呼ばれる程に、強い。

そんな存在を目指す為の、実践的空手。

それに憧れた健全な青年達が集い、入会を希望しにくる。

その日も一人、受付に男が来ていた。

「入会希望ですか」

「殴りコミ希望だ」

いたって健全な青年、ジャックである。

「道場破りが現れたア？」

「ウス、今高木さんが止めに行ったとそうですが」

神心会第一練成道場にて、来訪者の知らせを問う声。

日々の訓練に対し、自分の実力に余り伸びを感じなくなってきた青年、加藤はその報に眉を上げる。

その腕前は、神心会の若手だが上から数えたほうが早く、敢て有名どころを上げるならば愚地親子ぐらいだろう。

並みの柔術家、空手家、レスラー、ムエタイ程度では歯が立たず、同期で彼と闘えるものは居なかった。

末堂という男こそ同等に闘えるが、この二人は血気が盛んで殺し合いに発展しそうなので、館長が居ない時は禁じられている。

そんな加藤の元に、凶報とも吉報とも言える知らせが届く。
道場破りに遠慮する必要が無く、自身の腕前を自由に発揮できるからだ。

同門相手に出来ない目潰し等、死ななければ臓器や四肢の一つぐらの破壊は問題ない。

また、本部の医務室には最近噂のスーパードクター程では無いが優秀な者がそろっており、万が一の事態を阻止する。

だから、闘争に飢えた加藤にとってコレは吉報と呼べるのだろう。

「よりにもよって、ウチに来るとはよっぽどイカれてやがんなソイツはア」

「はあ……ですが高木さんが」

「アイツは、臆病者だ。^{チキン}相手が強そうなら今頃雪隠隠れでもしているだろうよ」

神心会といえど、ピンからキリ。

未だ闘争に対して臆病な者もいるし、逆に加藤のように好戦的な者もいる。

そついった者の精神を鍛える、という意味では空手は加藤にとって合った武術だが、如何せんその気が強すぎた。

「どちらにせよアイツじゃ無理だ、俺が行こう」

パキ、パキツと指を慣らし、道場破りとやらの面を拝みに行く。
神心会に来る者は大抵腕に自信がある者なので、もしかしたら楽しめる相手に出会えるかと加藤は期待していた。

（空手の怖さ、覚え込ましてやろうじゃねエかッ！！）

場面は一転して。

正面玄関にて、道場破りの報を聞きつけた者がその男を止めようと掴みかかり、軽くあしらわれていた。

力任せの揺さぶり。

合気にも似たような、手首を掴んで相手の体勢を崩し、脇腹に手を当てて持ち上げる。

持ち上がった足を掴み、相手を宙吊りになるようにしてから、最初と同じように脇腹を持ち上げる。

それを、目にも留まらぬ速さで繰り返すだけの事。

闘技場を踊る舞踏家が、宙を舞わされていた。

ある意味、タダで遊園地のアトラクションを体験できたようなものだから幸運といえよう。

「ソウイエバ、愚地独歩ガ今居ルノカ聞キ忘レテイタナ……」

ピタリ、と回転を止められて相手の脳がその状態に適応できず、遠い世界へと旅立たせる。

廻りの連中はそんな怪力を見せ付けた青年に対し、一步引いてしまっていた。

勝てるイメージが、誰も湧かないのだ。

そんな連中を見て、館長と戦うまでの暇つぶしを期待していたジャックは呆れる。

「アー……館内ノ連中二道場破リガ現レタ。

相手八手加減シテクレルカラ闘リタイ奴ハ、ヤレ、ト伝エテ欲シイ」

「は、ハイッ」

引つ込む連中に溜息を吐き、受付に館内放送を頼む。

敵対する相手のお願いを聞く、そんな格闘団体の姿は、恐らくこの日ぐらいしか見れないだろう。

そんな連中を尻目に神心会本部を悠々と歩くジャック。

モーゼ、というわけではないが警戒した門下生がそれぞれ構えを取り、間合いを計る。

闘う気になったのかと思い視線を向けると、相手は強張り、その場に制止する。

「神心会ルールト力関係ナク、全員デ来イ」

「ッッ！！」

圧倒的自信。

傲慢な挑発に乗って相手が来るかと期待したが、ジャックの体格と傷跡を見て、叶わないと判断したのか誰も動かない。

仕方なし、と判断し、一階一階のんびり調べようと思い、階段へと脚をかけた。

段差、その重心が乱れやすい状態を狙った門下生がその背中にとび蹴りを放つ。

「シャアラアッ」

ガッ、とともに命中するが、動じないジャック。

「ウム、ソレデイイ」

ガシッ、と頭を鷲掴み揺さぶる。

それだけで襲い掛かった門下生の意識は飛んでいた。

「ダガ階段デ闘イ、勝手ニ転ガリ落ちテ怪我ヲシテモ知ランゾ」

上の階層、その手摺を跳び越えていざ踵落しを当てようとした男はその言葉に止まる。

奇襲、それもやむを得まいと判断した者はその言葉を受けて一瞬の躊躇いを覚え……

「御免ッ！」

すぐさま襲い掛かる。

鷹が急降下して獲物を捕らえるが如く、その蹴りはジャックの頭頂部へと鋭く放たれた。

「阿呆ウガッ」

だが、その脚をあつさりと掴まれる。

それを機と見たのか、助けようとしたのか、先程まで一步引いていた者達がジャックに攻撃を仕掛けようと駆け寄る。

相手が人という武器を持っているにも関わらずの行動に、若干の経験不足が窺えた。

「随分トデカイピンダッ」

捕まった男が投げ飛ばされて将棋倒しを引き起こした。

勿論、その内の何人かはそれを横に、あるいは上に跳躍し回避して追撃を掛ける。

高木もその一人であり、数人がかりならばこの男は何とかなると思っていた。

館長のように相手の正中線を、連撃する事はできないが、他の門下生と分ければそれに近い状態を出せる、と。

ならばこそまずは牽制、隙を作らなくてはッ！

「ストライクハ逃シタカ、ダガ……」

「ハアッ!!」

「スぺア、ガアルカ」

上空から眼球へと貫手。

素人の刃牙と違い、正しく学んだそのキレは確かに眼球を捕らえていた、が。

（バキと比べても、遅すぎる）

パシ、と軽く絡めとられ、脅威の力で斜めの床に叩きつけられ、そして再び上へと持ち上げられる。

階段の角と、ジャックの叩きつけは石抱きを軽く超えるような痛みを与え、声にならない叫びを上げる高木。

「て、てかげ……」

「カカッテコイトハ言ツタガ、オイタハイケナイ」

ズン、と掌底を打ち込み、吹き飛ばされて残りの数人を巻き込み、人の雪崩を引き起こした。

「一片ノ曇リノナサ、負目ノナサガ勝利ヲ呼ブ、トハ言ウガ」

「ソイツには到底無理だな」

アレではとてもとても……そう思っていた矢先だった。
上の階から、自信有り気な声かけられる。

その男は鋭い眼光でジャックを見下ろしていた。

「ホウ……同門ヲ貶スノガ、神心会流力」

「いんやそいつア俺だけだ、館長まで一緒にしないでくれ。それより……」

男がクイ、と親指を背後に向ける。

「道場が一つ、空いてるんだ」

「イイダロウ」

神心会ルール、一対一での戦い。

階段を昇り、その男の顔を見て驚愕するジャック。

この男、誰だったか、と。

凄く見覚えがある、だが強いファイターではなかった気がする。たしか、神心会のデンジャラス……何とか。

並んで歩き、部屋へ案内される。

先程まで争っていたのが嘘であるかのように会話をしていた。

ファイターとて、日常会話ぐらいはのんびりとするものなのだ。

日常会話でも殺伐とするとしたら、恐らく……

「此処だ」

気がつけば、道場入り口。

中には門下生の姿は無く、確かに加藤が一对一を望んでいるのが解った。

道中の手荷物を床へと放り、靴紐を解く。

「そうそう、土足は厳禁だから脱いで……って判ってるじゃねえか」

「郷二八郷、正々堂々ト挑マレタラ、ソチラノルールニ従ウノモ道理」

「ッ、クウッッ、こういう相手を待っていたんだッ！」

来ていたトレーナーを脱ぎ、戦闘用の服装に着替える。

単純に服を脱ぎ、掴まれる箇所を減らしたただけだがそれでも十分だった。

道場中央を境に対峙する二人。

「ルールは何でもありで、乱入時は中断……でいいか」

「ソレデイイ、ソレト忠告ダ」

「ん？」

「目潰シハ、嚙ミ切ル」

ガチン、と牙を鳴らすジャック。

噛み付き、その発想は無かったわ、と戦慄する加藤。

「怖えエなオイ」

両手を正中線上の、首と、鳩尾に並べて構える。

もう一方は両腕を広げ、相手を叩き落す事だけを考えたような構え。開始の合図こそ無いが、二人が構えた時点でゴングが鳴っているような幻聴が聞こえた。

（喰らえば、一瞬）

ジリ、ジリと加藤が間合いを詰める。

自分の制空圏は、相手より少し小さい故の慎重な行動。

（出方を、見るッ）

自分と相手のおおよその制空圏の端が重なり、相手の動きを見る。

この時点で相手が放つとすれば、蹴りか、踏み込みでの拳。

（初動には、脚が動く筈ッ）

集中。

他の全てを考えず、ただ相手の脚が動くのを見る。

その瞬間に自分はカウンターで蹴り落とし、まずはそこから連撃を仕掛ける。

ジリ、ジリ、と距離を詰めていく。

完全に、リーチ内だが両方ともに動かない。

（……動かないッ、奴の狙いは蹴りではなく、広げた拳から出される技かッ！）

そう思い視線を脚ではなく腕へと変えようとした瞬間、視界の隅で相手の脚が動いたように見えた。

（いや、やはり来たかッ、下段ッ！）

先制を、相手が完全に攻撃動作に移るまえに先制を仕掛ける。そこからは、体勢を取り戻させないように、コンビネーションを。

「だオラッ！」

先程闘っていた門下生より、一步も二歩も先を進んだ蹴り。速攻、とはまさにこのことだった。

「……」

それに対して。

ジャックが放ったのは蹴りの類ではなくただのビンタ。

鞭打のように皮膚を打つのではなく、そのままの勢いで相手を吹き飛ばすもの。

トップアスリートすら容易く場外へ飛ばされるであろうソレを放った。

加藤の前蹴りが弾かれる。

（そうッこれぐらいは予想済みだッ！）

正拳を放つが弾かれる。

（それでもッ）

場所を狙わず後ろ回し蹴りを放つが弾かれる。

（逃げるわけにヤあ）

弾かれた反動を利用して、相手の腕を踏み台にしての、とび蹴り。

（いかねエんだよオッ！！）

それすら弾かれ、脚が宙に浮く。

その脚に自分の掌底を放って無茶な体勢での踵落しを放つ。

「キャオラアッ！！」

バンッ、と音速を破る音が道場に響く。

瞬間、加藤の口から歯が吹き飛び、首元からピチ、と血管が嫌な音を立てて切れる。

「マ、ソリヤコウナルダロウナ」

頬の皮膚は破れ、顎の骨が外れ、鼓膜が破れたのか耳からも出血。そして、ものすごい勢いで道場の床に紅い円を描いて滑り、壁に激

突。

「ナァンカ……駄目ナンドヨナァ」

「あ……ガハッ」

強敵、加藤が思ったのは自分よりも圧倒的に強い者の存在。

館長とあの人が空手家で、自分も空手をやれば強くなれると思っていた。

だが、空手家の他に強いのがいるという現実を見て、強さに空手は関係ない、という事を実感していた。

（いつそ、ストリートファイト喧嘩で鍛えてみつかあ……？）

空手家、加藤清澄が一時退会を考えたのは、ただの暴力が繰り出すパンチ。

型などを一切考えない、ただの強さ。それを堪能し、意識を失った。

「ヤハリ、人食い愚地力？」

自分のしたい闘いは、こういうのではない。

ちよっとやる気をだして闘おうと思えば、相手を一撃で倒し。かといってバキ相手のように手加減してやるのも面白くない。

もっと、骨を折り、折られ、血が流れるような闘いが欲しい。

海王の筋肉を打ち抜き、胸骨にヒビを入れるほどの正拳。

パンチや火炎放射をものともしない、廻し受け。

オーガのラッシュを見切る散眼と、それに適応できる反射神経。それ程の相手ならば、今の自分の実力が解るのではないか。

だからこそ、この相手との闘争に自身の頬が歪むのを感じた。

「人食い愚地が、どうしたってエ？」

「喰ウゼ」

暇人（後書き）

ちよつとノリで日に30時間の執筆とかいう矛盾に挑んだら倒れていた。

この小説は不定期更新で出来ております。

それでも私は一向に構わんツとか言つて欲しかったりする作者です。

バキが不良100人組手ならこっちは空手家100万人組み手とかどうよ。

ドリアンさんがやってましたね。

日本人から聞いた時のジャックの日本語は、カタカナ表記。しんどいです。

話のコンセプト

- ・人間ボーリング
- ・綺麗な加藤

悪鬼（前書き）

武神は言っている

ココで死ぬ運命ではないと

悪鬼

地下闘技場と呼ばれる場所だ。

ある時は空手、ある時はボクサー、またある時はムエタイ。

力士、レスラー、カポエラ、拳道家、柔術使い、キックボクサー。

ありとあらゆるジャンルが集い、そしてその全てを喰らってきた男がいる。

己の信ずる空手のみを使って、圧倒し続けてきた男がいた。

そんな男が、今日対峙したのはそのどれにも当て嵌まらないような男。

強いて言うなら、猛獣。

「けエイッ！」

ただの前蹴り。

されどその前蹴りは日に何十、何百、何千、或いはそれ以上積んできた練磨の証。

こと対人ならば刃物よりも鋭いその蹴りは、神心会道場の異物、無法者の腹へと突き刺さる。

「フンッ!!」

無法者がそれを掴み、体勢を崩そうとするがそこは経験の差か。それを見切った男はその掴もうとする手を軸に跳躍。

逆の脚で水月を鳴らし、左の貫手を肋骨の下に打ち込み、右の拳で胸を撃ち抜き。

そのまま飛び膝蹴りを無法者の顎へと打ち込んだ。

「ッッッ！」

そして体勢が崩れた相手を仕留めるかのような、肘打ちを相手の顔面にかけて打ち下ろした。

ガゴンッ、という打撃音の後に道場の床を無法者の頭骨が突き破る音が響く。

確かに、崩れ落ちたッ！

「シィッ」

己の勝利の鐘を鳴らすかのように正拳を、構えた。

『人食い』『100万人の長』『虎殺し』『武神』『ただ一人だけのスーパーマン』

男の名は、愚地独歩。

その両眼の眼光は、未だ現役であるかのようにだった。

「無事かッ、加藤オツ!!」

静かになった道場にて、不出来ながら一番慕われている門下生の呼吸音だけが聞こえる。

遠目で見ても、余り宜しい状態とは言い難く、早い所医務室へ連れて行かなくてはと思う独歩。

しかし、自分のカンが、今まで数多の強敵と戦ってきた第六感がそれを許さなかった。

（全てともにキマったッ、相手の骨も何本かイカれた感触はあったッ、だが…）

闘いが、こんなに簡単に終わるわけが無い。

ましてや、天下の神心会相手に大暴れするような奴だ。

（コレで終わるような、奴じゃねエッ！）

「しィイツ!!」

死人に、鞭を打つ。

相手の喉目掛けての、蹴り。

無法者の頭は半ば埋もれており、剥き出しになった喉へと振り下ろす。

もちろん、決まれば終わりだがこの無法者はそれを許さなかった。

ガシッ

手首で、腕で、肘で挟み込んだの威力半減。

喉に致命的と呼べるような打撃にならず、その脚を掴まれる。それを予測していたのか独歩は第二撃を胴体に放とうとした。

バツ

その、1と2の狭間、独歩が放とうと思考した瞬間に無法者の脚が独歩の脚を絡めとった。

そのまま捻り、独歩を床へと倒しこみ、挫十字に似た形をとる。

（迅いッ）

メキ、ピキ、パキッ、と力任せの固め技を受けて骨に痺が入ったかのような音。

それに対し、それ以上は許さんとばかりに不完全ながらの拳を脛に打ち込み、ホールドが緩む。

それを隙と見て、すかさず無法者を踏み台とし、距離をとる独歩。

無法者は追撃を仕掛けようとハンドスプリングですかさず起き上がり、飛び込んでローを放つ。

それを足裏でガードしようとするが、先程の挫で力が上手く入らず、思ったようには防げず吹き飛ばされる。

それでもなお、武神は健全。

宙を後転し、すぐさま相手の攻撃に対して天地上下の構えを取る。後退のネジを外した男を見て、無法者……ジャックの貌が晒った。

「ビューティフル」

腹部裂傷3、肋骨2本、奥歯を数本、それだけ。

ただそれだけの怪我がジャックには新鮮に感じられた。
その怪我のどれもが、未体験感覚であり、そのどれもが。

（ステロイドの苦痛に劣る）

鍛え抜かれた肉体からすれば、そんなもの、程度の傷。
その痛みが、ジャックの不安定な精神を固め始めていた。

パンツ、と道場の床が踏み抜かれ、その音と同時にジャックの拳が
独歩を襲う。

それは拳の冷嵐、フリザード北極熊を屠るような連撃。

その一発一発を、独歩の技は正確に弾き、弾いて、自身の手感覚
がなくなり始めた時。

ビタリ、と自分の身体の動きが固まる。

それと同時に、連撃は止まり、相手の前で深呼吸を始めるジャック。

（なんだッ、何故動かねエッ！！）

何故、相手は撃ち込んでこない？ 俺が動かない、動けない事を知
っているから。

何をされた？ 顔面と胴体を狙った連撃は全て捌いた。

では、どこから？ 俺の死角から？ 視界外？

「……ツツ、足かッ！」

胴体こそ動かないが、首と下半身は不思議と動かせた。
その時独歩は、自分の脚に相手の爪先が当てられているのを見た。

（骨子術?!）

神経のツボを押すことで、滋養効果を図る技術がある。

それを攻撃、武術といった方向性に進化させたのが骨子術。

相手の動きを封じたり、感覚を奪ったりする、恐るべき技術である。

足こそ動くが、ジャックの驚異的パワーがそれを許さず、それどころか逆に食い込んでいった。

一息整え、晒うジャックが身体を捻って、拳を大きく、大きく振りかぶる。

誰の目からも、次にどうくるのかが解る素振り。

動かぬ状態で一番力を籠めれて、一番動かしやすく、一番遠い地点で。

ギリギリギリと拳が軋んでいるような、それ程までに握り締めた拳を。

それが胴体に穴を開けようと唸りを上げ、見えなくなった。

ジャックの、狂異的な筋力に物を言わせ、薬品で加速した脳の電気信号が全身の間接を固めた。

ドーピングによる加速と、擬似的な剛体術。

瞬間、足が離れて金縛りが解かれた独歩は次の攻撃を防御不可と見るや否や、その拳の軌道上に

バシッ

武神の最強の防御技を、回避の為に使って逸らした。

カシユッ

そして拳は独歩の脇腹を鋭利に挟み取り、回避に成功した事を確信した独歩がニッ、と笑う。

対してジャックは自分の全力を回避された事に気づき、その高名な技の名を思い出した。

（マ・ワ・シ・受ケ……見事ナ…ハッ！）

今の自分における、全力の一撃を逸らされると同時に、その防御の見事さに思わず見惚れてしまっていた。

武神がそんな隙を逃す訳も無く、ガラ空きになった胴体へと拳を打ち込む。

一発、二発、三発、四発、五発、そのどれもが致命的で、胴体を乱打。

その一つ一つを堪能し、ジャックは膝をついた。

その表情は、笑う鬼。

相手が静止し、隙だらけになったのを見て気絶したのか、戦意を失ったのか。

休息の間隔が出来上がり、先程までの闘いの最中忘れていた呼吸を再開する独歩。

「まさか、廻し受けの上からオシヤカにされるとは」

ブラブラと力を失った手を揺らし、拳を作ろうと試みるが一向に動かないのを見て眉を顰める。

その手が握るのは空ではなく手首。

独歩は自分の手首の間接が外れていた事に気が付かず、そのまま殴っていたのだ。

貫手の訓練の際は指が、手がなければ思う存分殴れるとは思っていたものの、いざ手首だけで殴ってみたものの、どこか物足りない気

がする。

「パンチを弾いただけで、コレかい」

方向の変わった自分の手を、本来在るべき向きへと治し、一息ついて構えを解く。

やはり、自分の拳があつた方が良い。

そう思いつつ拳の握りを確かめ、自分と相対した男を見据える。

（ここまで緊迫したのは、いつ以来だったかな…）

膝を、両手を力無く地に下ろし、表情が窺えずに佇む様はまさに幽鬼。

自分の武を持つてしても、その攻撃を完全に防ぐ事は出来なかった。まるで自然災害か、あるいはもっと別の……

「そうだ、加藤ッ！」

慌てて駆け寄り、意識があるか軽く揺する。

瞼を開き、瞳孔からそこまでの怪我ではない事を安堵し、不出来ながら素晴らしい弟子を起こす。

「か、館長……」

「オウ、しばらくメシが食い辛いがそこは我慢だ」

あの男相手によくこの怪我で済んだもんだ、と頭を撫でてやる。その拍子に首の破れた血管から血が流れたす。

それを見て慌てて撫でるのを止めて、加藤を支える独歩。

「ツ、痛エ」

「悪い、立てるか？」

クスクス……

「ああ、大丈夫、だ、ぜ……」

「フラフラじゃねエか、どれ、肩を……」

クスクスクスクス……

「実二、見事ダ」

膝を折っていた男が立ち上がる。

胴体には五つの痣が出来ていたが、その奥で折れてあるべき肋骨は全てその筋肉に守られていた。

痛めた内臓の影響で口端から僅かながら血液が流れていたがそれすら意に介さない。

「連撃カラノ肘鉄打ち下ロシニ続ク、容赦無キ追撃。

痛ンダ脚デノガードニ、俺ノパンチヲ止メタマワシ受ケ。

ドレヲトツテモ武神ノ名ニ恥ジヌ動キダ」

喋って、プツ、と口に溜まった血を吐き出す。

神聖な道場を汚すな、というような叱咤をする気も起きず、目の前のナニかを見据える二人。

（今まで闘った奴に当て嵌まらないような男？）

そんな中独歩は加藤を放し、男へと向き直った。

武神の本能が言っている

まだ終わっていない、終わっていないのだ、と。

支えを失って顔を床にぶつける加藤を心配する余裕もなく、相手を
見据えた。

無意識の内に選んだ構えは、前羽。

「武神相手ニ己ヲ偽ルトイウ愚ヲ、コレ以上スルノハ無理ノヨウダ」

ヤレヤレ、と呆れたように首を振る。

その表情は、残念とも、歓喜とも、躊躇とも、数多の感情が混ざったかのようで窺えない。

（俺は、なんて勘違いをしていたんだッ）

「ココからハ」

（いつも、俺の中でコイツは燻っていただろうがッ！）

落ち着き始めた感情は、やがて一つの、本来あるべき姿へと方向を変えた。

ジャックの周りの空気が、歪み、歪んで、一つの空間を創った。

「本気で、やらせて貰うぜ」

ソレは、鬼。^{オーガ}

愚地独歩の眼には因縁の鬼の姿が幻視された。

その鬼の拳が防御体勢の独歩の両手に触れたと思った瞬間、

ジャックの振りあげが武神の水月に刺さっていた。

「二階で、良かったな」

そんな、男の声が、聞こえた。

悪鬼（後書き）

克己「床を拭かんかアアツツ！！」

今になって気がついた。

独歩さん倒しちゃったら次は誰とやればいいんだよ、と。

鬼か？

ジャックの代表技…バイティング、ハンマースイング
かつこよく書いては見たが、噛みつきと豪腕振りかぶりです。

余りにも寂しすぎるので、必殺技を増やしてみた。

拳の冷嵐

なんか凄いラッシュ

強盗（前書き）

多分、誰もが憧れるでしょう。
圧倒的パワーで銀行強盗をやっつけるのって。

強盗

ステーキ ファーストクラスホテル 血で汚れた衣服
食事、旅費、宿代、クリーニング代、生活用品の代金。
節制してはいたものの、増えるものがなくては減るばかり。
残高の0が一つ減っているのを見て、焦る強面が一人。

（ファイトマネー…いや、ステロイドは禁止だったか。
年齢的にできるのは学生のバイト程度、圧倒的に金が足りねえ）

銀行の待合ベンチで唸る強面。

他の客はそこに近寄り難く、銀行員も明らかに堅気でない男に声をかけ難い。

法律を恐れずに拳銃を所持していそうなサングラスの男も視界に入れないように努力していた。

（暴力団からカツアゲ、これが一番手っ取り早いかな）

もちろん藤木組以外で。

そろそろバキは花山薫と殴り合っているし、二代目不在の間に抗争があつて潰滅、とかは結構洒落にならない。

なのでその敵対組織、源王会の8代目辺りは襲っても余り心が痛まなくていい。

「潰すか」

日本の機動隊は優秀である。

政治的交渉はともかくとし、その装備、現場指揮、戦闘技術は眼を見張るものがある。

惜しむべくは、それに対しての国民の視点。

一切のミスをも許されない、国民性。

仮に、20人の武装集団が建物を占拠、100人の人質が居たとして。

機動隊は最新鋭の装備を駆使し、一人も逃がさずに鎮圧。悪人を全て確保したとしよう。

だが一人でも死者が出た場合、それは任務失敗となる。

武装集団もそれがわかってるので、100人の内荷物となる何十人かは解放、あるいは処理。

一人でもいれば、人質として成り立つのだ。

その人質に人質としての価値があれば、だが。

人質は、要人程価値が高い。

ましてや武の神とまで呼ばれた男を打ち倒した、男の価値は計り知れないだろう。

100万人の長を二階から突き落とし怪我をさせ、器物破損にしては規模が大きな損壊を起こし、職務質問を無視する。

100人の荷物の内、価値どころか札束をつけて返品させたいような男。

銀行を襲った武装集団達の良心や罪悪感から見ても、100の内、1を処理するなら誰もがこの男を選んだだろう。

そんな、深刻な顔をした強面が、物騒な言葉を吐いて急に立ち上がったかどうか。

100人の内、一際目立った男が、一番危ない男が自分達に敵意を向けた、そう感じた時どうするか。
全員が男に銃を向けた。

とつさに男がとつた行動は、構え。

それがどんな型なのが判明する前に無数の銃声が銀行内に反響した。

幸運な人物が居たとして、そのお零れを周りが拾おうとするのが必然であるかのように。

この場にいた者全てに幸運があつた。

一つは、他の99人がその一人の周囲に居なかった事。

流れ弾の類が当たる事が無く、一切心配する事が無いという事。

一つは、武装集団が誰一人、人を殺すという罪を背負わない事。

目の前の人、と呼ぶには異様な筋肉、疵痕が非現実的であつた事。

一つは、自身の仮説が本当か、体験できた事。

この銃弾の嵐は、自分を殺すには足りない、という事。

武装集団の全員が全員射撃の名人という訳ではなく、20、40、60、80という弾丸の内、半分にも満たない量。

そのうち、男が少し体勢を変えるだけで半分か素通りしていき。

もう半分の儚い弾丸は、頼りなくもその男の命を奪おうとして。

円を描く手刀に全て弾かれていった。

「矢デモ鉄砲デモ持つテ来イ、力。

比喩等デハナク、コウシテヤツテミレバ……言イ得テ妙ナモノダ」

弾丸が葉っぱ一枚に軌道を変えられてしまうように。

男が弾道を読みきつてその弾丸の横っ腹に指を当ててしまえば、それはもはや幸運ではなく必然。

二回目、三回目の引き金の用意が整うより早く男の構えは元に戻り、再び回転。

弾丸が窓ガラスを撃ち貫き、外界との境界線が割れる。

その音こそ、確かに銃弾が込められていた事を証明していた。

だが、銃弾は血を流す事はなかった。

全員が、固まった。

確かに引き金を引き、確かに銃声が鳴り、確かに弾は男の座つていたベンチを貫いた。

男は無傷、そんな現実離れた場面に出くわし、全員が幻想から眼を逸らす事ができなかった。

内部の状況変化を隙と見たのか、機動隊が割れたガラスから銀行内に閃光手榴弾を投げ込む。

カラン、という音に誰もが気付き、誰もが知らぬフリをした。
当然、何の対処もしないままにその光は人質もろとも全員に襲い掛かる。

「確保オオオオッッ！」

銀行内部に居た無法者達に取り押さえられ、その手に枷が掛けられる。

今日この時を持って、この場に巢食っていた悪党共は捕らえられたのだ。

ここに、悪は滅びた。

数日後に首相官邸に呼び出され圧倒的敗北を見に染み込ませられるかもしれない。

だが、悪を許さぬ正義の心と、血を流させまいとする高尚な精神は世界一と言っても良いだろう。

頑張り機動隊、負けるな機動隊ッ！！

この世の悪を、政府が許しても彼等は許さない、許してはならないのだッ！

「隊長、サイズが小さすぎて駄目ですッ！..」

「俺達の学んだ武術を何だと思っているッ、お前自身が手錠だッ！
！」

「ッッッ、了解ッ！」

人の技を盗む事に躊躇いを覚えない強面、ジャックもその例外ではなかった。

一週間後

メシもある 暖かい空気も あるけどなあ
ただ不満なのは メシの量だけ

とある死刑囚の感想である。

「本当にすまなかったッ、てっきり奴等の仲間かとッ」

「オカワリ」

「だからッ、そこに居座るのはやめてくれッ」

「俺八罪人ダカラナ、オカワリ」

「余った分は全て持って来させようッ、だからッ」

「ニホンゴ ハ ムズカシイ」

「~~~~ッッ、さっさと出て行けッ！」

ムスッ、とした様子で牢屋に居座る男、釈放の旨を伝える警視正園田。

そもそも何故こんな状況になったのかというと、騒ぎを鎮圧した切欠を作ったジャックを誤認逮捕。

一度檻に入れてからは、感謝状を渡そうにも動く気配を見せなかった。

そして執拗に飯の量を増やすように交渉しつつ、3日が過ぎようとしていた。

二晩、それは極悪極まりない体格の男がヒーローだったという事が発覚するのにかかった時間。

そこには神心会門下生のささやかなプレゼントの影響が水面下にあったが、割愛。

甘んじてのんびりと留置所を経験し、その誤認が発覚してからも居座り続けていた。

最初は無碍にも扱えず、一日は容認していた。

二日目も謝罪をし、出て行って欲しいと頼んでも馬耳東風。

心が痛むが、強制退去させようと屈強な男達を呼んでは見た。

「ジュードノ練習力？

オレモ暇ダシ手伝オウ」

そう言うて全員が投げ飛ばされ、留置所内が沈黙する。

運動して汗をかいたのか、シャワー室を借りに行き、ようやくと思った矢先。

次の日寝間着を持参して檻の中で熟睡しているのが見つかった。

直線に、平行に並ぶ鉄格子が歪んでおり、どうやって入ってきたのかが窺えた。

「宿代ガ浮クノハイイコトダ」

開いた口が塞がらなかった。

またまた次の日、今度はどこからか持ってきたダンベル等の運動器具とラジオ。

その悪魔の所業に、他の囚人達は警察が今後どうするかを賭博まで

行っていた。

そんな自由っぷりに腹が煮えたのか、警視正である園田が直々に来ても、この有様である。

「公務執行妨害になるぞッ！」

「マダ居テイイノカ？」

一度捕まってからは法律など知らん、とばかりに堂々と寛ぐジャツク。

神心会を襲撃して、愚地独歩の廻し受けに次いで、後退のネジを外す事も覚えてきたようだった。

本人が聞いたら激怒しそうなものだが。

そしてそんなジャツクの様子に頭を抱える園田は、もはや自分ではどうにもならない事を悟っていた。
傍らの人物へと声をかける。

「……先生、見ての通りです」

「カッカッカッ」

「警視庁ノ逮捕術指南、ジャナイカ」

その声を聞いて、急に興味が湧いてきたのか向き直るジャツク。
その顔は、とても面白い玩具を見つけた子供のようだった。
実際、15歳で警察をあしらう子供だが。

「オヌシ、本当はワシが来るの待ったじゃろ」

「序二会エナイカ期待シテイタ」

誤認逮捕ノナ、と加えると園田の顔が苦虫を潰したように歪む。
蹴りをいれても容易く止められるのは、今までの報告からも明白だった。

「ソレジャア、一丁ヤルカ」

「そう焦んなさんな、まずは身体でも清めてこんか」

言われてみれば、ここ数日は汗を流すだけでまともに洗っていない。
その事を聞いてから、ジャックは無性に風呂に入りたくなった。

「日本ノ、武士^{モリノ}ハ戦ノ前ニ清メルトハ聞くガ……一理有ル。

コウイウノヲ……ソウ、郷ニ入りテハ郷ニ従エ、ダツタカ」

「オウ、ソレじゃソレ、さっさといってこんかい」

「ウム、ゴ忠告感謝スル」

「それじゃ、牢から出したし、ワシヤ帰る」

「え」

「いや、実は立つとるのが限界でな…なんか、門とか地割れとか津波が見えるんじゃないよ」

強盗（後書き）

護身開眼ッ

スマンッ、最近バトルばかりだったからこついった馬鹿げた事が書きたかった〜ッ！

最近になってマニュアルを真剣に読み始め、感想の返信という存在に気がついた。

こ、これは、返さなくちゃ不味い、のか？

道化（前書き）

最強モノ、か。

強いだけではつまらん、くだらんぞ

道化

片平恒夫巡查（30）は、その時の様子の事をこう語っている。

「……エエ、傷の大男ですか。

時間？

いえ、もうホント2、3分かそこいらで戻って……ええ」

「ですからそのあとに首に掛けたタオル、片手に持っていた桶とアヒルの玩具も……ええ。

2、3分で調達して入浴してきた、という事になります」

「そう、あの事件が切欠です」

「私は如何せん賛成できませんが」

「例外的にという条件付ですが、留置所の滞在期間延長と食事量の変更を認めるべきです」

「ハイ、次の日から規則がひっくり返りました」

「いえ……一気食いの所為です」

「うう……一気に5、6杯で感じて」

「しかし、見ると聞くとではねエ……」

「警視庁に危機迫るっていうか」

合気の達人、渋川剛氣が真の護身を完成させてから数週間後。

或いは件の騒ぎが収まってきた頃合の話。

おっかなびつくりその地に近づき、その玄関に一人の老人が立っていた。

外界の気温をシャットするかのようなドアを通り過ぎ、暑さの所為で、流れていた汗を拭き取る。

いつも通りの光景、顔を出している練成場にて、いつも通りに自分の技術の一端を見せて社会貢献。

達人とて、仕事はするのだ。

「園田ア……」

「あー…皆知っていると思うので、自己紹介は省く」

「お、おどりゃあ…」

柔術の指導をしていると、新人を呼んでくるといつて園田が男を連れてきた。
その男を見た瞬間に渋谷は、自分が猛獣の檻に閉じ込められていた事に気がつく。

「ご指導、願おうか」

（か、帰りにエ〜）

仕事も仕事、大仕事である。

史上最強最年少の警察官。

給料は食堂のご飯と嗜好品^{ステーキ}、あとは貯金に。

相変わらず牢の一角を占領しており、近くの囚人は服従を対価にそ

の恩恵を受けていた。

留置場内での暴動が、その日を境に0になった。

不定期に来る渋谷をただ待つのもアレなので、公務員のバイトを始めたジャック。

主に鎮圧部隊だが、フラストレーションが溜まらないように八つ当た……運動できるというのが大きい。

次に逮捕術指南。ステロイドでドーピングすれば捕まえられるよ、と力説し、反論を食らう。

「己の明日を犠牲にしても、市民の今日を守りたいとは思わないのかい」

何人かはその言葉に道を外しかけるのを園田に止められた。

オリンピック級の実力者達は、公式試合に出る事はないから構わないだろう、と言っていたが。

「アレ一人でも大変だというのにッ、俺を過労死させる気かッ!？」

ステロイド、ダメ、ゼツタイ。

全員が道を外さなかったのは、園田の人徳によるものと言っても過言ではなかった。

そんな事もあり、警視庁単独の戦力が国家の戦力に並ぶ程に跳ね上がった原因を作ったジャック。

最初こそ荒れていたが、当分の資金調達源が確保でき、結果オーライという事で国家の狗になっていた。

つける首輪も無く、牙や爪を外す事ができないというのが現実だったが。

渋谷と闘ってしまえば、すぐにでも辞めるのではないか、という園田の不安に対して。

辞めた後も呼んでくれれば駆けつける、という何とも善意に満ち溢れたありがたい意思を園田は受け取った。

もちろん、お金はかかります。

「フム……何か語弊があったのかもしれないが、殺し合いをするという訳じゃない。

日本に伝わるミステリアス・パワー、合気を一度は味わってみたいだけだ」

「……ナルホド、のう」

開眼した渋谷が、迂闊に警視庁に入っても数週間前のような幻影が顕れなかった理由が、そこにあった。

これは単純な試し合いで、別に殺し合いをするわけじゃないから安心しろ、と。

手加減してやる、と言っているのだ。

（生まれ落ちてからずっと人間を倒すことだけ考えてきたが…）

そんな事をされて、武道家が。

達人とまで呼ばれるほどに、闘い続けてきた男が。

渋谷剛気という、一人の雄が、ここまで虚仮にされて黙っていられようか。

渴ッ！

達人が手を突き出し、相手の手首を掴もうとする。

それを許さぬとばかりに、ジャックの腕がその手を弾こうとして。

「舐めてンじゃねエぞッ、小僧ッッ！！」

弾かれる瞬間に手を180度回転させ、袖口に指を引っ掛ける。

余りに頼りない摘みだが、この達人にはそれだけで十分。

「ほりゃあッ！」

自分の手を囫に相手の重心のズレを誘い、袖口を高く引き上げる。

当然、一流どころか悪魔の反射神経を持つジャックは、自然とそれに反応して重心を戻そうと下に警戒。

その力に、渋川老の力を加える事によって相手はつんのめった。

（白かるうが、ピンクだろうが同じッ！）

いかな筋肉とて、いかな反射神経だろうと、いかに大きかろうと。

渋川剛気という男から見て、技をかける相手を構成する要素は、重量のみ。

筋肉も、脂肪も一緒なのだ。

（ここじゃあッッ！）

踏み止まろうとする相手の脚に向かってタックル。

その細枝とも間違えような肉体は、躓かせるには十分な力強さを持つて、相手の脚を攫った。

その突進は、圧倒的合理を持った突進は、ジャックを重力から放った。

世界が、ぐるりと、廻っている。

ダアン、と豪快な音を立てて巨体が畳にぶつけられて。

そして弾んだ体を、金魚掬いでもやるかのように達人が再び技を仕掛ける。

フワツ、と、巨体が宙に浮くのをその場に居た全員が確認した。

柔術の、コンビネーション。

姿勢を崩し、それに対して戻ろうとする人間の反応を更に崩し、踏み止まろうとする相手を更に崩す。

宙に浮いた相手を地面に叩きつけ、動きを封じるのが柔術だとして、渋川老の合気は、相手を叩きつけた瞬間に、それとは逆の力をかけて相手を弾ませる事を可能にしていた。

公園の土の上ならまだしも使い慣れている畳という事も加えて、そのタイミングはズレる事無く続けられるのだ。

動きの流れを知り尽くしている渋川剛気ならではの、連続技。

「ちょいさッ」

弾み浮かび上がった巨体を逆回転させ、顎を強打するようにタイミングを合わせて、蹴り。

首裏に当たった足刀は傷こそ与えられないが、ジャックの重力を取

り戻させるには十分な勢い。

「ダメ押しイッ！！」

次に浮いた足首を掴み取り、相手の首に脚払いをかけて横方向への回転に切り替える。

先程同様に畳にぶつかり、重力から解放されたがった肉体を再び宙へ。

前後不覚、それに耐えようとするジャックの脳が、今度は左右に揺さぶられるのを感じた。

ぶつけては、方向転換。

叩きつけては、方向転換。

渋川老が、こっちの方が良いかと思った方向へと方向転換。

気紛れな風に捲かされるまま、ジャックは畳に叩きつけられていた。そして一際弾んだ一撃を貰い、浮かんだ所を渋川老が仕掛けた。

「ハイイヤッツ！！」

後頭部を、強かにぶつける様に足刀を水月に放ち、巨星を墮としにかかった。

ジャックの筋肉、骨格、忍耐力を持つてすれば、五体満足でいられる程度の連続技である。

だが……

「ドロドロ、じゃろっ」

肩で息をする渋谷。

達人が呼吸を乱す程の、連続技は怪物に通じたのだろうか。
すぐさま呼吸を整え、再び相手に対峙する。

常人の脳ならば一撃目で揺れに揺れて、視界がドロドロになっていくだろうその技は。
乱回転を続け、続け、続け捲くつた為にジャックから平衡感覚までも奪おうとしていた。
それは、ジャックの視界を前後不覚だけでは許さず、四面楚歌にまで追い込んでいた。

（前が見えねエ）

左の眼と、右の眼が合わさる事で獲物との正確な距離を脳が理解できるように。

左の映像と右の映像が別々に映る事で、距離感どころか、獲物の数さえも解らなくなっていた。

頭頂部から脳が二つに別れようとすれば、このような状態にもなるのだろうか。

（左右に二人……歪んで……リアルシャドー、いや……）

揺らされて、いるのか……？

この男の強さは知っていたので、警戒はしていた。
それのおかげで骨も折ることはなく、軽くはないが脳震盪だけで済んだ。

これが、合気

まさしく、達人ッ

これぞ渋川ッ、剛気ッ！

揺れる脳が、エンドルフィンを大量分泌。

ドクンッ、と心臓が高鳴り、全身の血液を循環させる。

痛んだ細胞に栄養素が送られ、普段以上の活動を許そうとしていた。
その寛容な心が、打撃筋が爆ぜるのを許した。

「嘘オ……」

眠ったままの姿勢で、跳躍。

叩きつけてもいないのに、巨体が宙に弾んだのを見て、一瞬の驚愕。その光景は達人の0.5秒を奪い取り、本来あるべき体勢を、ジャックは取り戻していた。

足取りは一切揺らぐず、一つに揃い、猛禽類を思わすかのような構えを。

両の拳は胴体のバランスをずらさぬよう腰横に降ろされていた。揺れ動いているべき眼光は、しっかりと獲物との距離も捕らえている。

御殿手にも似た体制は、ジャックの意識が健在である事を明らかにしていた。

（やッベえな……）

さっきので倒れてくれるかと思っていたが、目の前の男はそんなことはなく。

かといって同じようにやって倒せる程甘い存在ではない。

そんな洪川に、ジャックは話しかける。

「速度、タイミング、理……どれをとっても既に術の頂にいますといつても過言ではない」

「……ッッ！」

再び、やるかッ!?

周囲の皆が固唾を呑んだ、その時ジャックが次の行動に移った。

「礼を言う」

スッ

差し出されたのは、手。

寂海王張りの善意の表れが、そこにはあった。

(~~~~ッッ、コイツは、まだッ……)

虚仮に、しているのかと思い、その手首を外してやろうかと思って。

「ここまでのモノを喰らったのは、初めてだ」

次の言葉に、機会を逃された。

「は？」

「指導、感謝する」

ジャックの行動、それはただの握手。

相手への礼儀を、親交の印を、最大級の賛辞を示す為の、ただの握

手だった。

一方的に投げられ、叩きつけられていた男の貌は、怒りを見せるどころか悦びを感じているようだった。

『ご指導、願おうか』

死闘や、試合ではなく、あくまで指導。

渋川剛気という武道家が、そう感じ取っていただけでジャックは指導、と言っていた。

（そう、か）

最初から、これは闘いではなかったのだ。

「……カッカッカ、コレはワシの負け、か」

武術家としてではなく、精神的に。

護身の幻影も見えず、相手は自分を害する気が無いというのに。

勝手に勝負をしていたのは、ただ一人。

自分自身が勝手に思い込んだ敵と闘い、そして勝ちを収めた気になっている。

傍目からみれば、なんと滑稽だったろうか。

ガシッ

両手で握り返し、同様に最大級の贅辞を返す。

闘いとは、最大のコミュニケーション。

互いに相手の技を、相手の耐久力タフネスを賞賛していた。
闘いを通して生まれる、絆。

それがまた一つ、バキとは別の場所にて生まれようとしていた。

「一発目は、まったく反応できなかった、俺はアンタを尊敬するよ」

「お主程の人間じゃなけりや、あそこまでやらんよ」

クスクスクス、と晒うジャック。

数週間前の荒れていた頃など、今の様子からは欠片も想像がつかなかった。

本人が聞けば、もともとコンナモノダ、と言うところだが。

「できればもう少し続けたいと思うんだが……」

時間が、なあ、と。

ジャックの視線が渋川老から外れ、道場の壁の方を向く。

壁にかかった時計を見ると、かなりの時間が経過しようとしていた。

稽古の、お開きの時間である。

残念がるジャックの様子に、仕方ない、とばかりに息を吐く渋川。その表情は、元の好々爺の顔に戻っていた。

「……まあ、いつでも来いや、何回でも指導してやる」

「いやいや、流石にこれ以上は喰らいたいとは思わないさ」

首を横に振るジャックを見て、カッカカ、と笑う老人。爽快な気分を誘う笑みに、周りの人間も思わず頬が緩む。

パチ、パチパチ、と。

誰かがそんな様子に思わず拍手の出鼻を切り。

それに皆が続くこうとするかのような盛大な拍手。

かつて、見事という言葉が、これほど相応しい場面があっただろうか。

合気の奥義を魅せつける達人と、それを受けきる男。

両方を賛辞する音が、道場に響いていた。

思えば、ジャックにとってコレは初めての経験だった。

闘いの後に、賛辞の拍手を送られる、という事は無かったからだ。

カナダでジムで暴れたとしても、ステロイドだから仕方がない。

白熊相手に闘ったとして、拍手する相手もない。

夜叉猿も、バキも、神心会も、加藤オツも、独歩も、そのどれもが敵だった。

今までにはなかった、未知の感動。

その所為なのか、はたまた合気を体験できたからなのか、ジャツクは震えていた。

本当に、長い間得られなかった機会を得ることが出来た、そんな子供の、晒う貌。

そんな童の顔を見て、洪川も嬉しくなったのか笑い返す。

長生きは、するものだ。

時代の境目という奴は、毎回恐ろしい程に素晴らしい相手を用意してくれる。

久しぶりに良い勝負……いや、良い好敵手が現れた。

今度は指導ではなく、試合を……と思う洪川剛気であった。

「もう、覚えたしナ」

道化（後書き）

「ん~~~~」

「やっぱり貴方達はワカっていない」

「ジャック・ハンマーという人物を」

「そりゃアンタ、あんなうちまうと普通は起承転結だわ」

「ふつうのSSはね」

「だけどこれは、徹底的で、執拗な、完全主義者のハナシでしょ」

「握手した渋川老を、合気で崩したんですよ、もうムチャクチャですわ」

「仕返しですわ」

「そう、子供の悪戯みたいに」

はこう語る　というのは人物の名前を考えるのがしんどの
で少なめになるかと。

あと指摘の通り、ジャックのしんどいカタカナを少なめに……

って悪い点ッ、それだけかよオッ!?

実は改行数がばらばらとか文章の区切りが変だとか、展開の長さが
おかしいとか……

そんな事を予想してただけに、予想外。

鬼対峙（前書き）

この小説は板垣恵介様が描く、バキシリーズの二次創作です。

鬼対峙

『今から一時間後、首相をブチ殺しにいくぜ』

謎の男からの犯行声明を聞き、警視庁はすぐさま部隊を出動させた。戦闘経験が多く、逮捕術指導役の渋川老がいれば、敵戦力を分析することもできたのだろうが、諸事情につきそれもできず。

最初に向かった20〜30人、それで首相を守れば問題は無かったのだが。

マイシャルアーツ

格闘術に長けた、ただ一人の男を食い止める事は出来なかった。隊長があっさり倒され、それに続いた者達も一撃で重傷を負わされる。

救援を要請する事ができたのは幸運と言ってもいいだろう。

そのままの勢いで部隊を潰滅させる事も可能だった筈だが、幸運にもそれは免れた。

謎の男がタバコで一服しながらのんびりと何かを待つ、という時間潰しのお陰だが。

こうして、警視庁は救援を派遣する猶予が与えられた。

この報せはあの事件に携わった園田にも届いていた。

「100人だ」

園田から、皆に伝えられた言葉は、要請されて必要な人数。雑兵……というのは失礼だが、それが100ではなく自分達のような金メダルに届くような実力者、100。

その場に居た全員が、その理不尽な救援要請に対しては動じず、それを聞いた俵木が言葉を返す。

「一人の男に、ですか」

「一人の男に、だ」

屈強で、20対1を物ともしない謎の男とは、いったい……。その場に居た全員が、そんな謎の男の図を思い浮かべる。

「……………」

「…さっそくで済まないが、各自装備を整えるッ！」

苦々しい、顔の一同。

園田は、考えるより行動と判断して全員に湯を入れた。

そういった事態に慣れつつある事に少々頭が痛んだが、気にして
てはこのチームはやっていけない。

そう思う事にした。

敵は、総理大臣官邸前にあり。

さて、そんな報せをあの男が逃すと思うだろうか。

達人を保護するという暗黙の了解を崩し、しばらく謹慎を喰らって
いる、あの男だ。

目には目を。

歯には歯を。

暴力には、暴力を。

こういつた事態にこそ、一番力を発揮する男だったが、その詳細は園田と他数名により伝えられる事はなかった。

曰く、『化学反応が起きそうだった』らしい。

もちろん、本人はそんな事を気にもせずに牢をブチ破ってその闘争の場に向かっていた。

闘争の匂いを嗅ぎつけたのである。

もしもを考えて辞表を書き残していたので何の憂いも無く、闘える。

鬼が籠から跳び立った。

さて、場面が一転して総理大臣官邸前。

一人の男がタバコを吸い終え、それを踏み消す。

自分こそ最強、と考える男の辞書に、ポイ捨て厳禁という言葉は無かった。

この時代はポイ捨てぐらいよくある事であり、法律になったら男は律儀に守ったのかもしれないが。

男は目の前に群がる雑魚共の数が増えるのをのんびりと待っていた。

「いい頃合だな」

男の周囲に3メートルの空間、そしてその周りを機動隊が100人どころか200人。

色合いを持ってして、それは黒蟻の大群。

その蟻の大群は、象よりも恐竜よりも強い男に果たして勝てるだろうか。

肉片の一部一部に噛み付き、ほんの僅かずつダメージを与え、勝利を収める事ができるのだろうか。

塵も積もれば、という言葉があるが、本当にそれは正しい言葉といえるのだろうか。

100人いても、一度に襲いかかれる人数が限られている中、闘いと呼べる段階にまで持ってこれるだろうか。

限りなく、0に近い。

隕石が降ろうと、地割れが起きようと、0に近いままなのだ。

「こッ、こいつッ」

そんな、那由他の可能性を求めて。

機動隊は襲い掛かってきた暴力の突進に、対抗しようとしていた。

子供が親と相撲をとったとしても勝負にならないように、それは対抗すら許さない暴力の濁流。

「ウワア押してきたぞオオオッ！」

仮に蟻が100、1000、10000といた所で象に押し勝つ事ができるだろうか。

見事な組体操をして同じ身長になった所で崩れるのは明白。一人の暴力に、機動隊が敗れようとしていた。

「ウオオオッ」

まるで、重機。

人がどんなに押そうが、その馬力の前にあえなく流されてしまうかのような。

突進のスピードが弱まっててもその力強さは健在で、ジワリジワリと押し流されていく。

「く、苦ッッッー!!」

いや、重機とは比べ物にならない。

重機といえど、200という人の大群には運ばれて然るべきだろう。人の手によって作られた重機は、人の手でどうにかできるものだ。

「お、押し勝ってる……」

だが人の身で、目の前のコレをどうにかできるだろうか。

人の土石流が、ビデオテープを巻き戻したかのように。たった一人の男がその大群を食い止めるどころか、勝っているというのだ。

本来流れてあるべき激流は、闘争という渦を起こして、逆流。そうなれば後は、氾濫を起こすのみ。

「ヌウウツツ!!」

車体の上の部隊長がそう思った矢先に、急に男の突進が止まった。状況を確認してみると、男と接している部隊は満足に立つ事も出来ずに、前線の部隊に押し付けられ。

前線の部隊は押そうと堪えているが将棋倒しを防ごうと地に脚が覚束ない。

そして、中間の部隊は、それを食い止めようとする後方の部隊に押され、潰されていた。

後方の部隊が全てを支え、押し、男の突進を食い止めたのかと思いきやその表情は苦悶。

それは、押すというより押されているかのように体勢が崩されていた。

更に最後方、正面からでは窥えないが車体の上方から、男の突進を食い止めている原因が見えた。

警視正お抱えの問題児、ジャック・ハンマーが、部隊の背中を押していた。

「や、やめろジャックッ、部隊の仲間が何人死ぬと思ってるッッ!

！」

「俺以外の、全員、かなッ」

「ッッッ、押すな馬鹿ッ！！」

前線と違って後ろの方は気楽で良いなあ、と隊長が思った。

そんな前線の状況を再び見ようとし、その顔面に誰かの靴裏が移り、そのまま隊長の目の前が真っ暗になった。

男は部隊が押せないと判断するや否や、すぐさま数を減らそうとしていたのだ。

色々と犠牲があつたが成り立っていた対等の競り合い、それを破り空中へと飛び上がり、部隊の体勢を崩す。

そこからは猛烈なストンピングで、肘鉄で、型とも呼べない暴力で次々と倒していく。

崩れた前線に対して、最後方からズリズリと押されて次の部隊が接敵、それすらも踏み台にして男は宙で暴れる。

上空からの攻撃に対して横から押されるだけの部隊はただただ数を減らされるばかり。

因幡の白兎は、数多の鯨、或いは鰐を踏んで海を渡ったが、これもはやそれを凌駕している。

鯨が、兎の行列を蹴散らして陸を泳いでいる、そんな光景だった。

そんな男が、一際強く行列を踏み切り跳ぶ。

200人近い部隊はあっさりと飛び越えられ、凄まじい速度で逃走。

「いや、コレは逃走というよりは……」

誰かがその事実に気がついてしまった時にはもう遅い。
男の、官邸への襲撃を許してしまったのだ。

「チッ」

それに対して舌打ちし、追撃を仕掛ける為に同等の速度で走り出す。
ここでの舌打ちは襲撃を許したからではなく、闘うつもりがスルー
されてしまった、その怒りであった。

動き難い装備を脱ぎ捨てて身軽になったジャックは、襲撃を仕掛け
にいった男と同等であるかのような速度。
数多の傷は、まだ経験が少ないながらも歴戦の戦士の姿を思い浮か
べる。

ことこの世界において、世界記録程たいした事の無い例えは使いた
くないがあえて言おう。

毎回が新記録であるジャックの瞬発力は、その場にいた部隊を置き
去りにして官邸へと向かった。

その力強さは……言葉にするまでもなく、強い。

「と、とまれエッ」

官邸に居た者に、襲撃犯と勘違いされる程に。

パンッ

銃撃音が官邸に響くが、それに当たる者はその場におらず。それに対して場所こそ違えど男達は無意識に反撃、その持ち手を粉碎していた。

一人は、守るべき市民、その暴力にあっさりと敗れ。もう一人は部署こそ違えど、仲間だったかもしれない。

男は目的の部屋に到達し、ジャックはその目的の人物へと迫っていた。

「……ッ」

分厚い扉が乱暴に蹴り破られる。

中に居た総理は男を見て、犯行予告の人物が銃器の類を用いずにこの場まで来た事に絶句。

その心中には様々な思いが駆け巡っていた。

外の部隊は？

あんなものが在っていいのか？

逃げてきたのか？ 他に誰も来ていない？

全員倒してきたというのか？

法を恐れていないのか？

この国の総理である私を、殺すのか？！

なんと、羨ましい、強さ

「警備体制がなっちゃいねエなア総理……」

意識を飛ばしていた総理に、声がかかる。

男の言葉に総理の頭は真っ白になり、咄嗟に返した言葉は。

「……ご忠告アリガトウ……」

虚勢を張る、それぐらいしかできなかった。

決して友好とはいえない難しい握手の為の手を差し出し、それが交わされた。

その時、男の左足が姿を消した。

「え……ッ」

何故、と疑問に思い始める前にソレは意識の外から、姿を現した。
容易く命を奪ってしまえるであろう踵^{ネリチャギ}落し。

その一撃によって空気が切られた衝撃、ソレが頭部を掠めた。
踵はそのまま、机を挟り取った

「……ッ」

咄嗟に頭を抱えるが陥没も無く、血の感触もない。

ただ、己の冷や汗が流れる感触だけを総理は実感していた。

「警備がマヌケだと、首相も気が休まらねえな」

そう言うと、男は晒いながら窓から飛び出し、庭木の枝を伝ってその場を去っていった。

暴力の足音が去っていくのが解った総理は脱力し、椅子にしなだれた。

もう一つの暴力の足音が聞こえてきたが、そんな事はもはやどうでもよかった。

無性に、楽になりたかった。

「今ココにオーガが来なかったかッッ!!」

鬼気迫る男に辛うじて先程の男が出て行った窓に視線を向ける、それが精一杯。

男にとってはそれで十分だったらしく、そのまま先程の男同様に枝木を伝っていった。

「いつから官邸^{コウ}は、アスレチックになったんだろうな……」

その独白を聞かせたかった男達は、既に居ない。

何か、新しく来た者達が騒いでいるが、もはやどうでもよかった。

「君たち、私はもう死んでるのだよ」

たった一人の暴力が国家に対抗し得るといふ、確かな事実。

それはマスコミに漏れることなく時の警視総官以下数十名に及ぶ役職の首がすげ替わったと言われる。

その真実が明かされる事は、終に無かった。

ショートケーキを食べた事はあるか。

ふわふわのスポンジ、そそられるクリーム、白の絨毯に一際目立つた赤い苺。

この苺という奴が曲者で、最初に食べてしまえば彩りを無くし、価値が失われる。

かといって最後まで残せば、思うまま食べたいのに、と脳が苛立ちを覚える。

その分、美味さは格別かもしれないが、それがハズレだった時の喪失感を考えると、両方とも選ぶ難しい。

さて、貴方ならば、どうする？

とある夜の公園にて。

武道家が二人、立ち会ってしまえば、その後にやる事はただひとつ。

「こういうのを、棚から牡丹餅って言うんだっただか」

今対峙している男達は、そんなケーキなんぞ一口で喰らうような男達だった。

「つまみ食いしようとする寸前、とんでもない料理が出された、そんな気分だぜ」

クスクスクス…と哂う鬼。

ただ、喰らう。何も考えずに、喰らう。二つあったら二つとも喰らう。

ただし、誰にも邪魔されず、一人で喰らえる場所で。猛獣が怒る時は、食事の邪魔をされた時。

逆に、誰にも邪魔されずに食事が出来るという事は、とても喜ばしい事だ。

だからこそ眼に映った瞬間に喰らいたい欲求を抑え、この場まで残しておいたのだ。

範馬勇次郎の本能が、己の鬼が、自分に対峙している目の前の男が、^{イチゴ}決してハズレでは無いと見抜いていた。

「鬼ごっこは、終わりだ」

鬼の相手は、鬼。

鬼一人が出会い、闘い合うのは決して偶然ではない。
必然なのだ。

鬼対峙（後書き）

ギャグってのは、麻薬だ。

小説感想における、恐らくは最高にして最凶の悪魔

一次二次問わず、一体幾人のライターたちがこの毒牙に掛かったことか。

コメントという美蜜と引き換えに求められる、スランプという高すぎる代償

書きたい物も書けなくなるといふ……破滅

スマナイツ、俺が書きたいのは、やっぱり闘いだっただッ！

護身開眼という脅威の腹筋破壊力に、自分でも闘争を忘れていたッ！

サンタさんには、解説王本部とか実況の人の、言葉のレパートリーを頼んでみる。

奥の牙（前書き）

ところで気がついたでしょうか。

今までの話のテーマは、受身。

全てカウンターとか防御とか、そういう要素が盛りだくさんです。

深い意味は無いけど。

奥の牙

双方とも純粋な、パンチ。

小手調べで放たれたそれは常人を一撃で仕留められる。

両者共に、ほぼ同時に胴体突き刺さった。

まともに喰らってしまえば、肋骨を押し折っていただろうそれは、
どちらも折る事は無かった。

筋肉を瞬間的に固める事で威力を緩和、加えて自分の攻撃が相手を
押し出し、拳が深く沈みこむ事はなかった。

「ほう」

それでも、ダメージはある。

晒う鬼の貌が、無表情になった。
少しは効果があったと見て良い。

二撃目、顔面目掛けてのブローと、ストレート。
互いに受け合い、互いに仰け反らぬ。

頬に打ち込んだ拳を避けることを、双方とも拒んだ。

蹴りを水月。

どちらも打点をずらし、腹筋で弾く。

互いに蹴り飛ばしあい、二人とも間合いをとった。

「ガアッッ!!」

そこからは狙いを考えない、ラッシュ連撃。

四肢を、腹を、胸に、首へ、顔面への打撃の応酬。

偶然なのか、両者のスピードも、パワーも互角だった。

それゆえに、いまだ続けられる闘争。

しかし、決め手を放つことができない。

隙を見せたその瞬間、打撃の嵐に撃ちつけられるだろう事は両者と
も判っていた。

そうなってしまう後は体勢をずっと崩されたまま、均衡が崩され
たままの闘いに発展するだろう。

だからこそその持久戦へと入りかけていたが、片方はそれを善しとし
なかった。

スタミナ
(撃たれ強さが、違うッ)

こればかりはドーピングをしても、エンドルフィンで痛覚を無くし
ても埋まらない差だった。

痩せ我慢で攻撃を続けるジャックと、攻撃を受けるのを楽しむ勇次
郎。

故に、ジャックはここで手札を一つ切った。

「シィッッ!!」

相手の連撃を弾く、廻し受け。

防御を許さない勇次郎の攻撃、それを同等の筋力で弾き出す。

勇次郎もそれがどういうものかは知っており、流される腕を戻して
すぐに次の攻撃態勢を整えようとする。

そこを、奇襲の洪川流で追撃。

引っ込もうとする手を、廻し受けに使った手で回転させ、勇次郎を僅かに宙へ浮かせた。

流石の勇次郎も、目の前の男がそんな技が使えるとは思っていないかったのか、顔の動きが一瞬止まる。

加えて、ジャックのパンチが勇次郎へと襲い掛かる。

しっかりと地に足がついていない状態で受けた場合、腹に拳が沈む。それを許せば闘いの流れが変わるだろうが、それを許すほど勇次郎は甘くない。

両腕のガードで、人体の骨を容易く折ることが出来る拳を受け止めた。

それで輝一つ入らないところは流石であるが、地面に足がついていない場合、どうなるか。

「ムウツツ!!」

数メートル後方へと飛ばされ、公園の土に線路が描かれる。

その描かれた線路を真直ぐ走るように、クラウチングスタートの姿勢をジャックは瞬時に構えた。

ソレを形容すると、ブレーキの壊れた列車。

ジャックの動きは正にそれだった。

だがその脳は、司令塔はシグナルを鳴らし続ける。

地上最強の生物に、範馬勇次郎に勝つ事は不可能である。

打倒の為に一步二歩と進んだ所で、勇次郎は同等以上の速度で成長していくからだ。

常に、成長期。

だからこそ、同年かそれ以上で且つ、勇次郎以上に闘いの中に身を置いてなければ勝つ事は不可能。

戦場で戦い、闘い、闘いつくして彼以上の能力を得なくてはならない。

それを破るとされる例外があるとしたら、一つは彼以上の成長性を持つ男。

彼の動きとその構成を学び、地上最強である男を目指し、一步や二歩でなく、十歩なら或いは。

もちろん、そんな事ができるような人間は一握りであり、それでも勇次郎と同等になれるか、といった所。

もう一つの例外は、成長ではなく進化。

勇次郎のいる場所へと一気に跳躍して辿り着いている場合。

ズルをしてでも追いつこうとすれば、辿り着く事は可能なのだ。

ジャックは、今の勇次郎の居る地点から五歩も十歩も奥を目指して跳躍していた。

「ステロイドか」

かなりの、高純度。

それを使い、重ね、重ねがけて、それが臨界点を超えて破綻させて残った金剛に再び投与し続ける事で、戦場で鍛えるより早く、速く肉体が作り上げられていった。

それは今、勇次郎を更に後方へと吹き飛ばす事を可能にする。

ステロイド
科学の結晶が、グラップル格闘の結晶に挑み、追い抜こうとしていた。

だからこそその、違和感。

壊れたブレーキに対して、人が素手で列車を止めるが如く。
追撃の拳を、ジャックは無理矢理止めた。

「何故止めた」

「なぜ避けぬ」

双方の疑問。

その拳を当てるだけならできたろうと勇次郎。
この拳ぐらいなら避けられるだろうとジャック。

「全てが偽り」

瞬間、ジャックのパンチが勇次郎の顔面へと放たれる。
これを、偽りと呼ぶのか、そんな怒りを込めたパンチ。

それを勇次郎の手は、円月を描いた動きで弾く。

「数多の強敵と闘い、己を高めてこの俺の前に立った、それは褒め
よう」

弾かれた拳をすかさず開き、勇次郎の手首を掴む。

合気。

一流の男にとって、それだけで技を仕掛けるのは容易かった。
その瞬間崩れ落ちたのは、ジャック。

「そのどれもが一流の技、こと肉体に至っては俺の影ぐらいには届
くやもしれん、だが……」

クスクスクス……と晒う勇次郎。
試してやるう、といわんばかりに豪腕を見せ付け、それを振りかぶる。

その拳はジャックの頬目掛けて放たれ、それをジャックは廻し受けて防ごうとするが。

ザクッ

足の小指を、踏まれた。

「……ッッ!!」

勇次郎の拳は囷で、そっちがある意味本命の一撃。

それで生じた隙を、振りかぶった拳で殴るわけでもなく、ピトッ、と拳は寸止め。

得意げに技を決め、己を倒そうとするジャックをちよつとからかう程度の挑発。

「貴様の技と、貴様の肉体、無理矢理得たソレ等は、随分と仲が悪
いようだ」

柔術家には柔術家の、空手家には空手家の、ボクサーにはボクサーの、レスラーにはレスラーの。

それぞれの技には、それぞれ見合った肉体……いわば技と力の相性というものがある。

仮に鞭打を撃つとして、そこに必要なのは脱力、タイミング、速さ。

筋肉は必要なく、その重量から本来のスピードよりも遅くなる。もちろん、その程度で遅くなるような鍛え方はしていなくとも、技と力の意思齟齬、僅かな誤差が生まれる。

そんな技が、地上最強の男に通じるだろうか。

「加えて技の全てが鍛錬を通じたものでなく偽り、どれもが映し出した借り物」

最強の空手屋、愚地の廻し受け。

あらゆる打撃技に対抗できるであろう達人の合気。

それらの技を見て、喰らって、タイミングを覚えたのは良い。

咄嗟の状況判断力、言わば0・5秒の無意識、この時に肉体が自然と繰り出してくれないのだ。

その一流の技、全てが考えてから放たれていた。

圧倒的経験不足。

ドーピングによる脳の加速、経過時間の減速と、鬼をも上回る反射神経。

今まで闘った達人達との闘いでは、その経験不足を埋めるに十分だったが。

こと、この鬼との戦いでソレが破綻し始めていた。

戦場を経験し、生き抜いてきたものならば誰しもが感じる、殺気に対する勘。

無意識の内の反応力、ジャックにはそれが無かった。

ここまで鍛えあげ、一流の技という高級の食材を揃えておいて、シエフは味を調和できなかった。

それが勇次郎の顔に、青筋を立てらせてしまった。

顔こそ笑ってはいるものの、その頬は歪んで見える。

静かな憤り。

「貴様は誰だ、空手家にも、柔術家にも見えん」

「お前自身の、情熱、時間、エネルギーをもっと知りたい」

闘いこそが 至上のコミュニケーション。

だからこそ、ジャック自身の技を使っていない肉体の反発。それをジャックよりも見抜いていた。

「俺を、ガツカリさせるな」

強者だけが持つ、一種のシンパシーが、その言葉に反応する。

それを肉体が感じ取った瞬間、ジャックの身体に変化が起きる。

空手や柔術とは違った、純粹に鍛え上げた肉体が、偽りという殻を突き破ってきた。

「ケツ、やっぱり隠してやがったか」

その変化を感じ取った勇次郎は、それを喜び。

「この俺相手に手を抜いていた事、後悔するがいいッッ!!」

今まで手を抜いていた相手に対して怒り、拳を振るう。
それに合わせるかのようにジャックは拳を撃ち合わせる。

ガアンッ

拳と拳がぶつかり、鬨いの火花が散る。

廻し受けや合気などを容易く貫く鬼の一撃。

ジャックの身体を打ち抜くかと思えたそれは、同様の拳をぶつけ相
殺。

それで拳が砕けると思っていた勇次郎は、相手の拳が健在であるの
を見て驚愕。

ソレはジャック自身も同様だった。

「ッッッ」

二人の間に一瞬の間が空き、場の空気が止まる。
そんな中、追撃を仕掛けずに背中を向けたジャック。

「闘争の最中、何処へ行くつもりだッ！」

その問いには一切答えず、ジャックは全身の筋肉を固める。

鍛えぬいた背中の異形を見て、勇次郎も相手がどのような状態だったか理解した。

鬼の貌と呼ばれるそれが、遊戯という中途半端なモノに耐え切れず出てくる。

範馬勇次郎という地上最強の男、それを体言するかのような打撃筋。それが、姿を顕した。

「貴様も、同じ気分だったか」

両方共にセーブした遊戯、それが先程までの殴り合いだった。

ジャックの背中も、同様に我慢し続けていたのだ。

相手の全てを見るまで、ずっと。

ジャックの脳が鳴らしていたシグナルは闘争中止の合図ではない。全力でなく、且つ未だ超成長していない勇次郎を倒すチャンスは、今しかないと伝えていたのだ。そんな脳の、最後の警告。

「ココからは、壊し合いだが」

クスクスクス、とジャックが晒う。

「負傷した親の姿を、子供に見せても良いのかい」
バキ

勇次郎がこの後、バキと横田基地で闘う、それを知ったの警告兼挑発。

やった、やってしまったのだ、この男に対しての挑発を。

そこまで言われてキレない男がいるだろうか。

全身の筋肉を強張らせ。

歯音が唸る程奥歯を噛み合わせ。

顔の血管が浮き出るほどに感情を怒らせて。

されど、挑発に乗ってしまうのも癪だから、それに動じず……。

「そういえば、バキの奴はどれくらい成長したかな」

動じず……

「楽しみだ」

……。

やっぱり無理だと言わんばかりの跳び蹴りを勇次郎はジャックの背中に撃ち込んだ。

当然、100キロ近い巨体が、大型トラックに激突したかのように吹っ飛ばされる。

背中タフネスの耐久力は、正面の約7倍。

くわえてジャックの背筋は鬼に並ぶかのような、悪鬼の形相。鬼の血が薄いならば、それに近づこうと無茶をするまで。

そんな精神を持つてのステロイド、加えてオーバーワーク。

それらが、鬼の背に匹敵する悪魔を作り出した。

「~~~~ツッ!!!!!!」

されど、鬼の怒りの一撃は背中タフネスの悪鬼で受けきれ程弱くも無く。そのまま公園の遊具へ激突し、子供の玩具を使い物にならないほど

に歪ませた。

（さ、流石に言い過ぎだが……コレで良いッ！）

倒れていた状態から、手を着き、身体を回転させて瞬時に体勢を整える。

ズキズキと背中が痛むが、戦闘に支障は無い。

遊具にぶつかって少々鼻血で呼吸がし難いが、やはり問題はない。

ただ、問題があるとすれば……

「バキと闘うのが、絶望的ってところか」

「俺をッ、前座扱いするか小僧オツッ!!」

鬼の猛攻。

反応こそ辛うじて可能だが、余りの速さに廻し受けも合気もする余裕がない。

廻し受けをしようとしても、指を正確に打ち抜かれるだけだろう。

勇次郎の言っていた、技と肉体の相性の悪さがここにきて更に浮き彫りになっていた。

独歩の場合、日に1000以上の基本動作を繰り返して、貫手で何度も骨折、脱臼を繰り返して得た指。

だからこそ勇次郎の攻撃を弾く事も可能だったかもしれないが、明らかにジャックのソレは防げないだろう。

渋川流ならばどうか。

超人的反射神経で強引に行ってきた合気は、同様に勇次郎の鬼の反射神経を破って発動させられない。

ジャックの合気は、かけようとする際に一瞬の空白……いわば筋肉の呼吸が必要だった。

だからこそ、避けようと思えば避けられる。

防御の手札を失ったジャックに、勇次郎の攻撃が襲い掛かる。

豪腕を豪腕で防ぐが、肉が抉り取られる。

肘鉄と膝撃ちで打撃を止めても吹き飛ばされてボディに打ち込まれる。

分厚い筋肉で一撃を止めたと思ったら、その一番外側の皮膚。それに近い数本の繊維を吹き飛ばして、二撃目で完全に崩す。

鼓膜を破壊するかのような両耳撃ちをガードできても、その後の蹴りをまともに受ける。

内臓を痛め、競りあがってきた血が口に溜まり始める。

「ブウッ！」

それを利用しての目潰し。

涙穴を突くかのように見えたソレも、しゃがんだからのアッパーでカウンターを貰う。

そして宙に浮いたジャックの頭を抉り取るかのような踵落しネリチャギが放たれた。

（ここだッッ！）

勇次郎が好んで使う、踵。

コレにカウンターを決めれば勝てる。

接触した瞬間、前転するかのような姿勢でそれを流して回転。

そのまま勢いをつけた踵のカウンターを勇次郎の頭部へと放つ。

かつてバキが見せたカウンターそのものであった。

当然、それが勇次郎に通じるわけもなく、カウンターのカウンター、空中前転踵落しがジャックへと命中した。

そのままジャックの肉体が地面へと叩きつけられるその瞬間。

ニイ、とジャックが晒った。

五点着地という技術がある。

パラシュートで落下する衝撃を分散する事で万が一の怪我を無くす技だ。

今回ジャックが使ったのは、身体を捻りながら行われるその発展系だった。

全身を無数の骨で構成されているかのようにイメージし衝撃箇所を無数に分散させ。

合気によって地面にぶつかった衝撃をそのままバウンドさせるかのよう流して起き上がり。

リアルシャドーによって自分の背中を勇次郎が蹴り飛ばしたかのような打撃を再現して更に加速。

（踵落しの後のカウンター、その可能性を事前に知っていなければやられていた）

ジャックにとっては忌々しい未来知識が、勇次郎に全力の一撃を撃つチャンスを与えた。

背中 of 悪魔が笑う。

リアルシャドーが背中を押し、自身の豪腕を瞬時に固める。
それが、勇次郎が空中を舞う間に攻撃するという奇跡を導いた。

「邪　ッ　ッ　ッ　！　！　」

沈み込むような振り下ろしを勇次郎の顔面に叩き込んだ。
ハンマー

先程自分が吹き飛ばされたように、勇次郎を殴り飛ばしたのだ。

なんと心地よい感触だろう、その一撃は。

地上最強の生物といえる男の顔面に、自身の全力を叩き込む。

先程までの殴り合いと、背中に喰らった一撃を考慮しても通じるであらう一撃。

勇次郎が、成長しきる前ならばこそできた一撃。

勇次郎の顔面を砕く事も可能であらう。

とうとう自分は、鬼に並んだのだ。

（いや、もう俺は貴方を超え……）

脳のシグナルが、最高潮に達する。
それは死亡フラグだ、と敗者達の魂がそれを必死に伝えようとしていた。

「成る程……」

ビクッ、と意識を取り戻し相手を見ると
吹き飛ばされて、倒れている筈の勇次郎が両手を前に掲げて立っていた。

砕けてあるべき骨や歯は全て健在。
顔面への衝撃から口端が切れ、鼻血こそ流れていたがほぼ無傷。
ジャックの全力の一撃は、血を流させたので範馬勇次郎に通じた、

といえるのだろうか。

「打点を全てずらし、衝撃を流す事で加速させ、それを利用して相手に攻撃を放つ」

感心か、納得か。

合点がいったかのような表情で範馬勇次郎がそこに立っていた。

「ちぐはぐな防御技は、この攻撃の為の技だったか」

愚地独歩の廻し受け。

円運動を描くそれは、遠心力を含んだ法則も加えて衝撃を流す。

渋川剛気の合気柔術。

相手の力に自分の力を加えて向きを逸らすそれは、相手を宙へ吹き飛ばす。

海皇の、骨のイメージ。

自身の腕を無数の骨とイメージし、全てを加速させる事によって驚異的な速度を得られる技。

攻撃に使えばその部位は破壊されるが、こと防御に使えば痛める事はあっても破壊はされない。

バキのリアルシャドー。

ただの思い込みがダメージを想像し、ジャックの身体を吹き飛ばした。

ここでイメージしたのは勇次郎がジャックの背中へと放ったとび蹴り。
喰らったばかりでイメージしやすく、自身が過去最大の一撃と感じた故の選択。

それら全てを乗せた、ジャックハンマーが、範馬勇次郎の格闘センスに凌駕された。

「さしずめ、流体術って所か」

「良い技だ、俺を技術に追い込む程に」

『こと、格闘技において彼は常に成長期にある』

「その言葉の意味が、ようやく判ったぜ……」

現在の鬼は、数分前闘っていた頃の鬼じゃなかった。

範馬勇次郎は後に消力と呼ばれるソレを、ジャックの流体の動きから読み取り、身に着けていた。

宇宙が圧倒的速度で膨張し続けるかのような、成長性。

仮に対峙したジャックの方が強かろうが、直に追い着き、追い越し、置き去りにするかのような。

圧倒的絶望。

歪む空気。

死の感覚。

それを感じ取ったジャックに対して、勇次郎が取った行動は。

「餓鬼の前に無様を曝す訳にもいかねエからな」

悠々とジャックに鬼の背中を向けた。

「お言葉に甘えさせて貰うぜ」

勇次郎は、この数日後バキと闘う。

その時ダメージを負っている姿は見せたくない。

それは、お前との闘争ファイトよりもずっと重要なのだ、そう言っているよ
うだった。

「……ッッ、ガアッッ！！！」

去ろうとする背中目掛けて全力の一撃を放つジャック。

先程の消力等を使わせないかのような、脱力できない箇所、背骨目掛けて放たれたそれは、確かに勇次郎を捕らえ。

「貴様が言い出したことだろうがアッ！！！」

振り向きざまの裏拳で頬を殴られ、ジャックの突進の軌道が変えられる。

いや、軌道が変えられるだけで済むならばまだ良い。

奥歯を吹き飛ばされ、顎の骨が外れ、首を痛める。

勇次郎の一撃で、それですむならばまだ良いといえるのだろうか。

「米軍横田基地、そこで俺のガキの闘ファイトいでも見てくといいい」

病院に行くまでも無い怪我で済んでるならな、と言って去る鬼。
夜の公園でハハハと豪快に笑うその姿は、まさしく傍若無人だった。
その言葉が聞こえているのかも怪しいジャックはというと。

「……新しい奥歯、入れないとな」

納得がいったような気分で、次はどうするか考え始めていた。
その表情は、険しい。

奥の牙（後書き）

奥の手、奥歯、親不知、そんなお題。

「誰に断って勇次郎に手だしてんだよッ」

「誰かと闘りあうのに、そんな権利がいるのかい」

トーナメント編ですが、素直に地下選手登録か、アナコンダの箱を突き破つての乱入かで思考中。

ガーレンさんの明日はどっちだ。

技のアイデアが残り少ない状態で、どこまで走れるのか怪しくなってきました。

当然ボツ技もあります。

鬼殺し火炎ハンマー

- ・ なんか火箸というか炎をイメージし、相手の顎にアップパー。
- ・ ボス級のHPを半分ぐらい削れます。

強大な敵に向かって（前書き）

鬼いさんがバキを鍛えに向かったようです

強大な敵に向かって

ウェルター級の世界チャンプにヤクザの間で知らぬ者のいない喧嘩師。

その強豪二人が、一人の少年相手にスパarring。

それを息切れも起こさずに相手取る少年は一体何者だろうか。

潜水用のウェイトをつけたまま、彼等の攻撃を避け、且つ圧倒する少年の名は刃牙。

範馬刃牙13歳、彼は最初の激動の年の終わりを迎え様としていた。

「正直言つて、アンタまで来てくれるとは思わなかったよ」

たった一度の殴り合い。

喧嘩とも闘争とも呼べないお粗末な闘いに負け、そして刃牙にとつては親父に次ぐ、宿敵ともいえる。

その敗北を味わってから、自分より強い存在というのが明確になった。

その状態でのトレーニングは、刃牙を本来の強さより一つも二つも上へと高めていた。

「見違えるようになったな」

鬼いさんとしての、正直な感想。

北沢とかいう不良が連れて来た喧嘩が飯より好きな連中と。
トレーニング相手にしては強すぎる二人をKOさせて尚。
刃牙はトレーニングを一人で黙々と続けていた。

（はて、こんなに遠慮ない性格だったか……？）

そう思っていると急に刃牙の舞踊……拳舞の動きが変わる。
先程までより速く、過去に見た動きよりずっと速くジャックの顔の
前で静止した。

「どうだい？」

「ウム……とりあえずは、アレだ、闘う時は重りを外しておけ」

そついいつつ、着ていたトレーナーを脱ぐジャック。

鍛え上げた筋肉は、勇次郎にも劣らないモノだと信じたい。

反射神経だけはステロイドの分勝っていると視て良いが、それ以外
はどうにも劣っている気がする。

天然の格闘グラップルの結晶と、積み上げてきた戦闘経験値、また咄嗟の状況
判断力での差が大きい。

理系数学なら勝っている自信はあるのだが。

そんな造った筋肉と、全身に刻まれた傷跡を見てストライダムが

「それと、コレだ」

そういつて懷から取り出したのは小さなアンプル。
パキッ、と小気味良い音を立てて割られた容器には緑色の液体が入
っており、その飛沫が僅かに漏れる。
鬼いさんの健康の秘訣、怪しい薬品だった。

「……いやア、そいつは使わないよ」

無理無理、と言わんばかりに手を振るバキ。
今まで培ってきたモノ、強敵達との闘いをふいにするような気がし
たのか断る。
後ろではストライダムが安堵していた。

「お前はそれでいい、もしYESと答えていたらこの場で殺してい
た」

「誰だか知らないが、バキにヘンなモノを進めるのは止めてくれ」

「同感だ」

その場でそれを飲み干し、容器を放り捨てる。
体感時間を引き伸ばすソレは、ジョン博士がジャックの進言にて、
苦肉の策で産み出した物。

『筋肉が鍛えられなければ感覚を鍛えれば良いじゃない』

筋肉だけが強さではない、という発想から急遽作られたそれは、結構美味かった。

もちろんいきなり切り替わったら脳への負荷がハンパ無いので、遅効性にしてある。

「時間が経つほど効果は強くなるから……お前の相手をするには丁度良いだろう」

今なら倒せるかもしれないぞ、と言って指の骨を鳴らす。

対してバキは首を横に振り、コレはスパーリングだぜ、と軽く返す。

「……結局忍者には会えたのかい？」

「代わりに鬼には会ったが……可愛くはなかった」

鬼といたら誰を最初に思い浮かべる、と聞いて。

百人全員が範馬勇次郎を想像するかと聞かれたら、そうでもない。正直言つて鬼の方が可愛く見えるのがジャックの自論だった。

「そっかい」

ドギヤツ、とバキの力強い跳び蹴りが顔面にぶつけられる。

鬼と聞いてこの後闘う親父を連想したのか、それとも夜叉岩で会った男から夜叉猿を想ったのか。

感情の昂ぶった蹴りは、ジャックに鼻血を流させる程に力強かった。顔をへこませる気概で放ったが、通じていない事に何処か安心していた。

「……やっぱ、親父の次の次ぐらいに強いな」

へへ、と笑うバキ。

ウォーミングアップには十分どころか強大な敵に、興奮し始める。

「随分と微妙な位置だな」

「親父、お袋、俺、アンタ、これでもかなり褒めているよ」

「確かに」

クス、と笑うジャック。

誰だって自分よりは自分の親が上だと思うものだ。

バキと違って自分は親をそこまで上位に見る事は出来ない分、何処か羨ましい気がした。

「今日は、上3つの順位を変えてやろうと思う」

「なら、俺程度は倒せなくチャナ」

「変えねエよッッ！！」

ドスッと水月に正拳。

その一撃は鉄球を喰らったかのような一撃で、これには思わずジャックも姿勢が崩れた。

生じた隙を見逃さないように、振りかぶりの肘を顔面に放つバキ。

「遅イ」

円月を描く掌がそれを弾き、バキの額にデコピンを放つ。

「ッ」

それに対して身体を大きく仰け反らせて回避し、サマーソルト。ジャックの顎を捉えていたそれは、蠅叩きの如く振られた手に落とされる。

「攻撃は中々、体格が出来上がればオーガにも勝てるだろう」

「……やっぱ、親父に会ったのか」

寧ろコレほどの男が親父と会っていないという方が在り得ない。そう納得がいき、再び攻撃を繰り返す。

「悪いな、強くさせちゃった」

「いや、その分俺が強くなれば良い」

「その意気だ、少し強めに撃つぞ」

拳に然程力を籠めずに、上腕の筋力だけでバキの胴体に撃ち込む。それだけでバキの小柄な体格は後方へと、地面に線を描いて流されていき。

「もっと強くやっても壊れないから安心しなよ」

パンパン、と殴られた場所を掃う。

あの時とは違うんだぜ、とばかりに平気さをアピールするバキ。

「O K E ……」

胴体のバネを用いた掌底。

夜叉猿を、バキを吹き飛ばした一撃。

拳じゃないから全力で押しても構わないか、と振り払いを胸骨に撃ち込む。

「……ッッ」

それはバキの肺に衝撃を与え、内部の空気を全て吐き出させる程強く。

花山の一撃にも耐え抜いた体を蹲らせた。

「防御位しろ、アレはそういうタイプの技だ」

内部への一撃。

筋組織の類を破壊するのではなく、内蔵に圧力を掛ける一撃。

勇次郎が使うとは思えないが、今後の事を考えると覚えさせて損は無いだろうと思った故の、指導。

ジャックは、バキの技に対する判断力を磨かせ、ありとあらゆる打撃技を克服させるつもりだった。

そうすれば鬼の貌ぐらいまでは持つていけるだろうと思ったからだ。

「ハッ、カハッ、ソッ、そうかいッ！」

「そして体勢が崩れた相手に、こっちの全力へと繋げる」

酸素を求める呼吸器、喉目掛けての、アッパー。

それは触れるか否かの、刹那のタイミングで止められる。

「通じるとは思えないが、手札は多いほうが良い。

俺は正確に選べる程経験がないから、その場で思いついた奴を主に使うようにしているがな」

「振り切ら、ないのかい？」

「まだオーガと闘うまで10時間近くある」

楽しみはこれからだろうに、とジャック。
対してバキは、その言葉に少々焦る。

「それしか、ないのか」

「その短時間で追い抜く位の気迫を持って」

成長性だけは、俺や親父以上なんだからな、お前は。
そう言いたい気持ちを抑えつつ、次の攻撃を仕掛けようと距離をとった。

「勇次郎が好んで使うのは、防御不可のパンチと、この……」

ヒュオン、と空気を切る音が聞こえたと思った瞬間、地面に穴が開けられる音が基地内に響く。

眼で追う事が出来なかったその一撃を視て、後ろで見ていたストライダムは既視感を覚える。

ネリチャギ
「踵落とし、か」

「喰らったからな、再現性は高いぞ」

「確かに、ユージローを連想させた」

一番間近で視てきたという自負がある、ストライダムという言葉にバキは驚く。

確かに眼で追う事が出来なかったし、その破壊力からも親父を連想できた。

(それに……)

一瞬だが、鬼の影がちらついたように見えたのだ。

「速度も十分だ、だが……」

「勇次郎は、未だに成長している……」

散々それを眼にさせられてきたストライダムだからこそ、その斜め上を行ってもおかしくはない、と力説。

ジャックも賛同し、コレより速いと見て良い、とお墨付き。

「つまり、ソレを防げれば……ッッ!」

「相手はして貰えるだろう」

そう言つと、再び指導に移つた。

大きく脚が上げられ、踵落しの予備動作を取る。

「構えろ、バキ」

それに対してバキは眼を閉じ、カウンターの状態に入る。

諸刃の刃、それでこそ勇次郎にダメージを与えられる刹那のタイミングが得られるというもの。

そうまでしなくては通じないと判断した、バキ最大の一撃の構えだった。

（それは、一般的には正しい、正しいんだが……）

それでは通じないし、その上を俺がやってしまったから通用する筈が無い。

踵落しが、バキの額を切り裂く。

瞬間空中前転し、踵落しのカウンターをバキは放った。

その足首を捉えようとジャックは手を伸ばす。

「それぐらいッ」

伸ばした脚を曲げ、踵落しを捉えようとする手を回避。

そして回転力の増したバキの頭突きがその手を砕こうと下ろされる。

「読んでいたぜッ!!」

人体で最も重い箇所、頭部。

当て方によってはボクサーのパンチよりも強く、相手の顔面を陥没させる程に強い。

そしてその頭突きはジャックの広げられた指を粉碎しようとして。

「まあ、こうなるだろうな」

踵落し回避からバキの頭突き回避は余裕でした、というように手を引っ込める。

それが当たるだろうと思ったバキの体は、頭突きの分加速して着地の失敗を導く。

ジャックの小指に、踵落しが決まってしまった。

「

」

大魔王でも予想外の攻撃にはダメージを受けるように。
流石のジャックもコレには予想外。

「あ、悪い」

危ない時こそ脱力、とはよく言うが流石にコレはダメだった。
しかし、あそこまで上から目線で啖呵を切って置いて、転げまわる
のも癪。

故に、ジャックが選んだ行動は、痩せ我慢だった。

全身の筋肉を強張らせ。

歯音が唸る程奥歯を噛み合……以下略。

バキの顔面に、拳の振りがぶりが沈みこむまで3秒。

「と、いうわけで勇次郎戦は体の末端を、不意打ちで狙うのが上策、
という事でどうだ？」

「悪くは無いが……」

横になったバキを机に、座り込むストライダムとジャック。

バキの予定外な休憩中に、せめてもの対勇次郎の策を練っていた。そうして出したジャックの結論は、同じ目に遭わせてはどうか、というものだった。

「男の闘いじゃねえッ」

それに反発するストライダム。

地上最強の男が、そんなものに当たるはずは無いという気持ちが少し。

残りは、ありえないがそんなのでもし勝負が決まってしまったらどうする、という気持ち。

日本人ならセップク物だ、と言って否定する。

そして、それに対してジャックは。

「そりゃそうだ、これはただの親子喧嘩だからな」

親子喧嘩。

言ってしまうばそうだが、確かにただの親子喧嘩だった。

その言葉を聞いてバキの気持ちが少し軽くなる。

（地上最強とかじゃない、ただの、親子喧嘩だ）

どの家庭にもある、よくある事。

それだけで、どこか嬉しい気持ちがある自分を不思議に思う。

「勝つたら……母さんと家族旅行にでも行かせるかなあ」

親を殴るという不孝な子供が、誰よりも親孝行。なんと奇妙な気分だった。

「大義名分が出来たな、遠慮せず攻撃できるぞ」

「しかしバキよッ、オマエそれでいいのかッ?!」

「大男相手には末端を狙う、と親父も言ってたし問題ないと思うよ、ストライダムさん」

ならばこそ親の教えを全て使っても、勝つ。

親の、誰かの、自分の知恵全て振り絞っても料理し、親父に喰らわせる。

親父の強さからして、それぐらいやってやらないと満足もさせられない。

これもまた、一種の親孝行。

「しかし……足の小指、か」

ストライダムの脳裏に蘇るのは、日本に来て間もない頃。

勇次郎の友人の家が、武家屋敷という事で靴を脱いで上がったのは新鮮な記憶だった。

椅子ではなく座布団、音をたてるパスタ、極めつけはお湯を張った風呂。

軍人だったからこそ、新しい規則は容易く馴染めず、しかし郷に従うのも軍人。

ならば堪能しようと、思い切って行動し始めたのが運のツキだった。何から何まで新鮮尽くしではしゃいでいたのだろう、彼を襲ったのは新鮮故の衝撃。

箆筥に、小指をぶつけるという、日本人なら一度はやるアレだ。

靴を履くのが常、と考えていた自分にとってアレは予想外で、年甲斐も無く涙目に。

その事を勇次郎に知られ、爆笑されてからは武家屋敷内は警戒するようになった。

「ユージローも、箆筥にやられたのだろうか……」

「……」

「……」

「さて、続きをやるか」

「休憩し過ぎたかな」

よいしょっ、と立ち上がり、少し冷えた筋肉を解す双方。

冷えてしまった筋肉は惜しいが、その分精神的に余裕ができた。

心のコンディションは、万全。

「超回復でも起こって、筋力が上がっているかも知れないぞ」

「へえ……あつたら良いな、そんな奇跡」

「起こせるさ、グラップラーなら」

そういつて気の抜けたコーラを手渡すジャック。
変なイメージが出来る前に、特訓の続きをする格闘士達だつた。
グラップラー

強大な敵に向かって（後書き）

結局炭酸の抜けたコーラというのは、何処から知ったのか未だ不明。親父がそれをする図が思いつかないので、ジャックさんに渡してもらった。

この時点で既に、バキも鎬兄弟を倒せるレベルに成長。

あと、ジャックに殴られてから戦闘時には結構容赦ない性格に。

二次小説における主人公のフラグ率は異常である。
それは、ジャックも例外ではない

・肉親キャラだが、バキも親父も死にそうにない分全部ジャックに廻ってくる

・ドーピングをしても勝つという、ズルとまでいかないが邪道
・他のキャラより戦闘力が飛びぬけているが、経験があっていないという弱点

・ジャックの影響で未来の願望をバキが語った分、瀕死の兵隊が甘ったれフラグ

・未だに範馬と明かしていない

・ジャックには特に恋愛要素がないので、嫌なフラグしかたたない
・色を知って覚醒……も無く、成長する要素が無い

・毒手を喰らえばステロイドと化学反応起こすという、一か八かの逆転フラグ

・怪我している所に独歩や渋川に襲われかねない

・そもそも既に親父に目をつけられている時点で、アウト

こゝこの小説は本当に来月を迎える事ができるのか……ッッ!?!?

力の麻薬（前書き）

バキネタは多いのに、二次SSの少なさに全戦士が泣いた。

力の麻薬

あと5時間。

空前絶後の親子喧嘩を前に、出し惜しみはできない。

数年後自分で身につけるであろう技術を、今の内に覚えさせる事でその喧嘩を成り立たせようとしていた。

「リアルシャドー？」

「ウム……こいつをやれば戦闘キャリアを無理矢理増やすことが出来る」

両腕を構えて防御する態勢をとり、何も無い前方を警戒する。それを視てバキは、いきなり何をやっているんだと訝しげだった。

それは、その場にいた他の者達も例外ではない。

「……シャドーボクシングに似ている」

「ユリー？」

ボクサーのユリーが、その構えを見て何かに気がつく。

鏡を前に敵を仮定し、その攻撃をかわしながら決して倒せない敵を延々と殴るものだった。

ジャックのしてい事は、それとどこことなく……

ドゴツ、と大きな幻聴を鳴らして、ジャックが後方へと吹き飛ばされる。

その両腕からは、内出血が起きているのか、痣が浮き出ていた。

「……ッッ！」

目の前にいる影は、そのままジャックへと追撃。

拳が蹴りかは判らないが、闘気ともいえる不定形な影は連撃を放った。

そしてそれが何であろうと打撃は打撃といわんばかりに、全て叩き落とすジャック。

「シャドーボクシングってのは、あんな事ができるのか」

「いやッ、あれはもっと別の何かだッッ！」

喧嘩師の呟きに、目の前の奇想天外な光景に再び気絶しかけるユリィ。

そう、こんなシャドーボクシングなどあってはならない。

「プラセボ……か？」

「知ってるのかッ、ストライダムさんッッ!!」

「あの動きではなく、似たような事象だ」

プラセボ、またの名称をプラシーボという。

空のカプセルに色々成分が入っているとわれ、ありもしない効果を想像してあらゆる病から回復するという。

とある戦場では、米軍でも存在だけは薄々知っていた特殊部隊『狐』その一兵士がその効果を戦場で発揮してしまった。

『ヒカリダケを食べば、生体電池バッテリーを回復できないか?』

実際はありえないのだが、本人がそれを本気で思い込んだのかバッテリーの回復速度は急上昇。

潜入任務の際に結構お世話になり、見事任務を真つ当したと聞く。その男は想像力が非常に豊かであり、サルとの会話もできるとの事。また架空の存在である吸血鬼相手に大剣を振り回す夢を見て大暴れした事もあったらしい。

「他にも実例が何件が存在している」

「じゃあ……」

「ああ、あれは極限の思いこみだ」

攻撃を叩き落とし、一呼吸の間が空いたと思った瞬間水月にパンチ。

それでダメージを与えたのか、シャドーは消えていった。

「今のは勇次郎がもつと若かったら、という勝手なイメージだ。防御力が半分、鬼の背は無しの状態だが」

「親父があんなに弱いとも思えないんだけど」

「13歳でそんぐらいならば十分だ」

あれでも学生やってたんだろうな、と呟くジャック。
いやいやあそこまで弱くは……アレは強い、のか、とよく判らなくなるバキ。

「実際知っているのは、先日の勇次郎の動きだからな」

「はあ……」

「だから、自然と弱くなっちまう、そこで」

再びジャックが構え、今度はより明白なイメージができあがる。
身長は190、体重は120前後で、型に縛られないフリースタイルな格闘家のビジョンが生まれる。

「戦いながら調整していけば良い」

「えー……」

いきなりそう言われてもなんだかなあ……と思うバキに、影のパンチが襲い掛かる。

それに対して、コレはシャドーなんだから当たる訳が無い、そう思ったときだった。

ニイ、とジャックが笑う。

スパッ、と風が頬を切り裂く。

幻影、そう思っていたそれは確かにバキの頬を切り裂いていた。

「んなッ！」

「バキイツ、早く構えろオオッ！」

ストライダム の叱咤。

対戦相手のバキではなく、それを見ているストライダムの方がその現象を警戒していた。

先程から感じていた、理不尽なまでの理屈通し、それにずっと既視感を覚えていたのだ。

（ユージローだッ、奴はユージローをその身に思い込んでいるッッ）

若かりし頃のオーガ、ややオリジナルが混ざってはいるものの、正

にそう表現するのが正しかった。

「面白れエッツー!!」

バキが、吼える。

遅い来る攻撃を全て迎え撃つかのような拳の撃ち合い。

視えない火花が散り、拳の感覚がなくなりかける。

だが相手は回復を待つ訳も無く、再び攻撃。

(痛エツ、がッ、この程度なら叩き落せるッッ!)

リアルシャドーの次の段階、それは理想のシャドーと自分の動きを重ねようとする。

そうする事で自分の理想の動きに、現実の肉体を無理に合わせようと自身を錯覚。

肉体疲労こそ大きいが、実力が及ばなくとも短時間でその動きに慣らす事が出来る。

代償は、筋肉痛が断裂か、当然それ以上のリスクもあって然るべき。

だが、それだけである。

「それを行うことで肉体を無理矢理鍛える」

アッパーがバキの両腕のガードに直撃する。

確かに受け止めたその衝撃たるや、バキが過去に受けた掌底以上。そして、拳がそのまますり抜けて鼻を掠め、血が流れる。

興奮したからではなく、純粹に拳を受けたように鼻頭が赤くなっていた。

そしてそれに驚く時間を与えるような事を、格闘士は許さない。

「理想の敵を相手に理想の動作を描く、そして肉体はそれに適応しようとし……」

バシッ、と左ジャブが反射的に添えられた左手に逸らされる。

先程反応できなかったスピードに、バキの脳が急速に適応しようとしていた。

皮膚が破け血が流れ出していたが、反応は、確かに出来ていた。それを視たジャックは、更にラッシュのスピードを上げる。

「ヒュウツッ！」

なんとか反応しようとし、脳から出される指令に間に合わせるように肉体が動く。

これは逸らす、これはフェイント、これは避けられない……防衛ッ！次はどこからだ、下段ッ、重心が変わったから次に出せるのはココ、かッ！！

相手の拳が伸びた時に、間接を打撃して防御。

その防御は続けていくうちに攻撃へと替わり、バキの攻撃をジャッ

クが防ぎ始める。

回数こそ圧倒的差があつたが、呼吸の合間にソレは一回、二回と増えていた。

もっと速く、もっと早く、もっと迅く動けという指示に、今度は肉体が適応。

安価な砂糖水をすぐに消費してしまうかのような、そんな運動を肉体にさせるように。

（なアゝんか…）

それは成長というよりも、進化。

劇的な変化が、バキの肉体に起きようとしていた。

それはバキに反撃する余裕すら与える程に、肉体を造り替えていく。

（思い通りに動く、それだけのことが　　）

やがて肉体と脳の歯車が噛み合い、より高みを目指すのが当然であるかのように廻り始めた。

（　　　　　）

肉体と脳の歓喜。
想う通りに動き、動かせ、

自分をもっと早く動けるといふ欲求、理想、感情に対して。
その程度ならば動かせるという努力、動作、脈動が叶えていく。

それはバキだけでなくジャックも同様だった。

完全にセーブしていた拳を徐々に解放していき、ギリギリのラインを常に維持。

そのラインをバキが大幅に上回った瞬間に解放、再びバキよりも上のラインを維持。

そしてまたフラストレーションを高めていき、解放させるというのを繰り返す。

それは脳が限界のラインが判らなくなるまで続けられた。

「み、見えねエ……ッッ」

第三者のストライダムからすれば、どっちが速く、どっちが強いのかは判らない。

ただ一つだけ判っているのは、戦局は常に硬直状態を維持しているように見えた。

「まるでミックスアップだ……」

「なんだソレはッ？」

「ボクシングで互いの実力が近い時に、起こる現象だ」

ミックスアップとは、対戦相手同士が刺激し合いながら互いの才能を引き出し、レベルアップしていく事。

相手より上回ろうと拳を重くし、それを受けた相手も同様に反撃。これを延々と繰り返す事で拳は最初に見た時よりも圧倒的に速く、重く撃てる様に適応していく。

「もちろん限度というものはある」

互いの実力が均衡しており、レベルアップしていくとして。

その成長の度合いも同じという事は無く、僅かずつ、僅かずつだが実力に差が出始める。

互いの強さわ掛けた天秤が破綻する時に、その現象は終わる。

それが俗にいう、才能の限界という奴だった。

均衡している二人の成長性も、まったく同じという訳ではない。成長性だけみれば、圧倒的にバキが有利だが未だに破綻の予兆は顯れない。

ここまで強くなった少年、その成長を見知っているユリーからすれ

ば、それは異様な光景だった。

（バキもバキだが、あの男も異常）

確かに初期の実力差は、圧倒的だった。

認めたくは無いが、バキが下、男は上、それは戦士としての目利きが教えてくれた確かな事実。

あの男が手加減をしてこの硬直状態へと持ち込み、そのまま撃ち合いのテンポが上がっていったとして。

（何故まだ撃ち続けられるのだッ）

ここまで、均衡とした相手は世界に二人と居ない。

綻びが生まれず、技術も糞もないただの殴り合いだが、それを起こせる人物を他に知らない。

（何故、あの場に私が居ないのだ）

気絶していた間にやってきた謎の男。

その男との戦いこそあの少年を最も育て、最も生き活きとさせている。

それが無性に悔しかった。

「私にもッ、あんな相手がいればッ――！」

あの領域に立つ事が、できるのに。
そうつな垂れるユリーの肩に、手が乗せられる。

「喧嘩友達つてのは、永くも短い人生で数人しかできない。
バキにとって、たまたまそれがあの男だった、それだけだ」

喧嘩師、花山。

誰よりも喧嘩を知る男だからこそ、その悔しさも知っていた。
その拳が思わず握られてしまう程に。

「強く、なりてエ」

生き方は違えど漢達の望みは、同じ。
そんな漢達を尻目に、ストライダム的心境も複雑だった。

（ユージロー、君の言っていた友人の意味、ようやく判った気がするぞ）

一年に一度闘え。
それは余りに無謀といえる難題で、成り立つのかすら判らない賭け。
ユージローもそれがかなう筈が無いというのが判っているのに、続く賭け、その意義が、少しだけ。

（こんな年になって、ソレに気が付くとは）

その勝ち負けに関わらずそれをやめてしまった時、自分はユージロ
ーの友人でいられるのだろうか。

自分がオーガと関わるのを辞めた時、ユージローという男を理解し
てやれる人物がでてくるのだろうか。

（……久しぶりに、オレも鍛えるか）

とりあえずは、パワードスーツを着ても俊敏に動けるぐらいには。
目の前の闘争を見て、無性に走りたくなったストライダム。

その眼は、一種の青春を映している。

「とりあえずは、軽く最大出力マックスしておくか」

「勇次郎に、親父に挑むなら限界突破オーバーリミットまでいかないかね」

「……ああ」

時刻は、23時。

オーガを乗せたヘリが来るまで、1時間前後。

力の麻薬（後書き）

幼年編という第一部の幕を降ろしたいんだが、スランプなのかペー
スが遅い。

投稿するまでに、眠っちまうトコロだった

やっぱり文章修正とかも、しなくちゃなア……

ランキングの 残酷な描写あり の多さに泣いた。

愛が足りない、そう想ってたらなんか「腑抜けがッ」って声と同時に
手刀が肩に

バキの差異

・夜叉岩でジャックと遭遇し、掌底喰らってKO、これを切欠にし
て鍛える。

・鍛えてから夜叉猿に挑むが殺されかけ、安藤さんが食われかける
時に覚醒

・助けるためにジャックのドーピング掌底を模倣し、拳でそれを放
った

・夜叉猿ウーッッ

鬼いさんが、鍛えすぎたようです（前書き）

環境利用闘法師範

ガイア 見参！！！！

「ガッ……ガイアッッ！」

「なんとということだ……ッッ」

空港にヘリが止められ、その人物はついに基地へと降り立った。

数多の戦場を越えて、数多の命を奪い、数多の兵に脅えられた、その強さに範馬刃牙も命を奪われかけた。

そんなビッグネームを軽くないなし、颯爽とヘリから降り立つのは宿命の相手。

鬼いさんが、鍛えすぎたようです

「こ、これがオーガッツツツ！」

『地上最強の生物』『鬼』『巨凶』数多の称号を持つ最強の男であり、バキの父。

範馬勇次郎が米軍基地に降り立っただけで、彼を中心に乱気流が生じたかのような感覚を、誰しもが覚えた。

（闘気が……こんなにもツツ）

その場にいた者達が、この男が持つ形容し難い強さを感じ取り、表情を変える。

それは畏怖だろうか、はたまた夢と現の区別をつけようとしたのか、或いは言葉では表現できない、何かを。

そんな中、それを真っ向から受け止めつつも動じない者もいる。

（対した自信、いや、アレだけやれば闘えると思っていてもおかしくは無い）

勇次郎の相手をするバキと、それを観察するジャック。
そして、乱気流の中心にいる、もう一人。

（母さん……）

判りきっているだろう結果を、わざわざ見に来ている。

絶対覆らないだろうと思う結果なのに、この場に居る。

（見て、くれるのか）

一種の予感染みた何かか、あるいは期待か。

それらが、この場に親子を引き合わせたのか。

「間合いだぜ」

母の、向けているかどうかとも判らない愛に浸っているバキを呼び起こすのは、父。

ゴングは既に、鳴り終わっているのだと勇次郎の声を聞き、我に返るバキ。

「親父」

間合いとはいえ両者の制空圏は別々。

バキにとって、この闘いはまだ開始っていなかった。

「……負けたら、家族サービスだぜ」

「跳ねっ返りが」

バキの挑発を無視し、仁王立ちする勇次郎。

一切の構えをとらず、いつでも撃ち込んで来いとばかりに歩んできたバキを見据える。

もし、バキが攻撃を仕掛けたとしたら、間違いなく先制を許すような距離まで、近づく。
それで動じないのは、絶対的な自信からだろうか。

「カアツッ！」

態勢を低くし、全身のバネを利用した加速が、自信の培ってきた全てがバキの背中を押す。
あの鬼に、あの男に、あの父に届かせる為の全霊の一撃の為に。
瞬間、バキの姿が消えた。

「つつかけ……ッッ」

地面を蹴る音、地面が爆ぜて土が舞い上がり、それが地に着く前に。
既に勇次郎の懷に、バキは潜り込んでいた。

「速いッ」

その動きを捉えることができたのは、範馬の血のみ。
バキのもっとも得意とするハイキックが、勇次郎へと放たれる。
相手が岩や木、動かぬものならばバキの攻撃は確実に相手を粉碎していただろう。
仮に大地が揺れようと、その一切を無視する一撃は、何かに触れるような感覚をバキに与えた。

「しィッッ!」

その瞬間、勇次郎の拳がバキの腹部に沈み込む。

「ガァッッ!」

腹部が圧迫され、血反吐がこみ上げるがそれを表情には出さず、牽制の掌底。

地面に着く前に打点をずらし、逃れようとする。

（ッ、動かないッッ!）

一切の加減を捨て、そのまま地面を殴りつける。

バキは次に襲い掛かるだろうダメージを和らげようと手を隙間に入れ、クッションにしようとするが、そんな隙間が生じるパンチでもなく。

当然、そのまま地面へと叩きつけられ、地面に人を象った穴が出来上がった。

スウェイで和らげる事も拳でガードするのも許さない、鬼の一撃。内臓を飛ばして背中まで突き抜けると思われた一撃を、耐えたのはバキの腹筋。

命こそ燃え尽きてはいないが、その一撃は重い。

「あの蹴りを避けたッ!？」

一瞬の交差を見ていた者達は、驚愕の攻撃と迎撃に、動揺を隠せなかった。

近代オリンピックなど目じゃないバキが、そこから何段階もレベルアップしたバキが。

その努力の結晶が、通じない。

「あれが、ユージローだ」

バキの猛特訓こそ見ていたものの、ストライダムはこの結果にある意味納得していた。

相手が如何に努力しようがそれを圧倒的能力で粉碎する、それが範馬勇次郎。

ジャックもその例外ではなく、その交差した一撃を見て表情を歪めていた。

ギリ、と歯車の噛み合う音が、口内に響く。

「油断、したな」

青筋を立て、拳が震える程に憤るが、それをぶつける相手は今気絶している。

その気絶もコンマ0秒で解ける程度だが、たったの一撃でそうなた事に怒りを隠せない。

気絶した瞬間に意識を取り戻した点は流石で、幾千幾万と闘ってきただけの事はあるが、それでもこの光景は何処か悔しい。

「なア江珠」

拳を引き抜き、二撃目が降ろされるかと思った時、オーガが朱沢江珠に、バキの母親に話し掛ける。

地面に倒れ、痙攣するバキが、まだ動けないと判断しての余裕。

「こつまでおいしいとよオ」

ピクリ、とバキの痙攣が止まる。

「摘み食いか、完成してから喰うべきか非常に悩む」

その躊躇いとも言える言葉に、オーガを知る者は困惑した。

人としてそれが正しいのだが、この男が、闘争というジャンルで迷う事を想像できないからだ。

常に自身が最初に正しいと決めた事を正しいと判断し、それを腕力で正しくしてきた男だからだ。

そんな男が悩む程、先の二択は素晴らしいモノだった。

ただのハナタレ小僧が、数日で近代格闘技一流の水準を凌駕できるでは、数年経てばどこまで上り詰めて来て、自分をより満足させるようになるのだろうか。

「そこで俺は」

「邪アツツ!!」

勇次郎の意識が外れた瞬間、バキの奇襲。

起き上がりざまのナックル、その速度は勇次郎の衣服に切れ目を入れるほどに速い。

速いのだが、そこまで。

勇次郎の背中を傷つけるには、決定的な打撃力が足りなかった。

握力×体重×スピード＝破壊力

この方程式の通り、バキの握力とスピードは十二分に足りていた。だが、いかなキャリア、特訓を積もうと数日で体重を増やす事はできない。

仮にその分のウェイトを搭載したとして、体の動きがその重量に適応しない。

鬼の背を壊すような破壊を、産み出す事はできない。

背中に心地よい打撃を受けながら、勇次郎が笑う。

その表情を敢て形容するならば、そう、そそられていたのだ。

両方、選ぶことにした。

瞬きするか否かの刹那、バキに拳が撃ち込まれる。

人中だとか、間接だとかを一切考慮しない無差別爆撃。

当たれば肉片が吹き飛び、同じ箇所を当てられれば骨が切断される
だろう一撃は、正に爆撃だった。

ベトナムの戦場が連想されるほどの熾烈な暴力、それをバキ一人に
浴びせられるのだ。

（防げないッ、ならば避けるまでッッ！）

リーチ、瞬発力を考慮してなのか。

バキの選んだ逃げる方向、それは前。

視界と距離を狭め、勇次郎の繰り出せる攻撃を限りなく減らし、そ
れを先読みしての回避。

（親父なら、ここはチョップで肩を……次は、蹴り）

「チイッ」

（そしてそろそろ焦れっなくなつて、掴みが……ッッ）

手首を掴み捕られ、宙へと舞わされる。

フツ、と重力から解放される感覚を、感じるバキ。

投げ特有の浮遊感、水面に叩きつけられ、バウンドした時の感覚を思い出す。

加速した視界の端に、勇次郎が既に拳を構えているのが映った。

そんな一瞬の空白の中、バキが選んだ行動は。

「ハハッ」

何もしない。

何もしないで、ただ笑っていた。

宙に浮き、動きを止めてからの、全力の一撃が来る。

さきほどまで回避していた一撃も、宙では必中。

「お、終わった……」

誰かの呟きに反論したいが、それも出来ない。

それは、余裕が無いという意味か、それとも回避できないと納得したという意味だろうか。

確かに襲い来るだろう死の気配に、バキの脳は過去を振り返っていた。

（確か、あの時はガイアさんに投げられたんだっけか）

一番弱いと思っていた男が、親父とタメを貼る奴で。

エンドルフィンがどうのこうのと言っていた。

オリンピックの歴史を虚仮にしていた。

時速80キロで地面に叩きつけられた。

時速80キロで水面に……

……。

環境、利用闘法……

「これだアツツ！」

宙に浮いた状態での、バキの廻し蹴りが放たれる。

当然それが当たるはずも無く、仮に当たったとしても致命傷にはならない。

勇次郎はその蹴りを無視し、そのまま刃牙の胴体に拳を放つ。

「ッ、オオラアッ！」

まともにぶち当たれば、即死は免れない。
ならば、まともに当たらなければ良い。

「なッ」

バキが選んだのは、背面受け。

廻し蹴りの反動で身体を横に回転させ、背中で拳を受ける。

（背中 of 耐久力 is、正面と比べて確かに強い、強いがッ）

勇次郎相手にそれは悪手。

背面は、内臓を打撃されて隙が生じる心配が無い。

こと戦闘においては打撃に対して背で受け止めるのは、誇りとかは
ともかく正しいと言えるよう。

「勇次郎の攻撃は、筋肉で守られていない部分を切断するんだぞッ
！！」

背骨が粉碎されれば、内臓がどうのというレベルではない、戦闘不

可だ。

むしろ、内臓をクッションと考えればまだ正面で受けた方が軽傷といえよう。

痛みを考慮すれば、人によっては背面の方がマシなのかもしれないが。

「甘いわ……」

一撃必殺の勇次郎の拳を、バキは背中であ……

「んなワケ無エだろうがッ！」

さらに回転を加え、受け流す。

勿論それで無傷という訳もいかず、いくらかは決られ、その破片が地面にへばりつく。

骨が持つてかれそつな一撃を喰らってもなお、バキの勢いが緩むこ

となく、そのまま攻撃の態勢を整える。

「避け……いや、当たッ、何故動け……」

あれを受ける。

それがどういう意味か、一番判っていたストライダムが、言葉を詰まらせる。

（無事なハズがッ……）

だが、実際にバキは態勢を整え懐に入り込んでいた。

「ま、まさかッ、在り得るのかッ、そんな事がッ！」

ソレを見て戦慄したのは、何かに気がついたガイアと。理論的には可能なことだと知っていた、ジャック。

「あれがバキだ、物語の主人公のように、奇跡の閃きを掴み取る男だ」

来ると解っている攻撃に対しての、スリップダウン。
勇次郎の攻撃を防げる筈も無い、ただの技。

だがバキは、それをとことん応用していた。

皮膚も脂肪も筋肉も骨も構わず吹き飛ばす打撃に対し、バキは代わりの物を差し出していた。

「あ……アレは土かッッ！」

最初に背中から落ちた時に付着した土が。

拳と背中の間で、クッションとしての機能を果たしていた。

床と足の間に石鹼を置けば滑るように、間に物を挟めば滑らせれるのは必然。

砂という、細かく見れば限りなく球体に近いともいえるそれらは、水分を含んだ土は、潤滑油という役割を果たしていた。

また、土と言う面積が小さいものを挟んだのが、幸運だった。

「面積が小さいほど圧力が強くなり皮膚を傷つけ易いが、ソレが幸運だった」

「血、か」

「拳という本体が当たる前に回避できた、ヒリヒリするがな」

直接拳が当たるよりも、土を挟んだほうが弱くなるのは、必然。そんな常識を無視するかのような一撃を、同様の能力でもって封殺し、ここに健在させていた。

「まさに環境利用闘法……」

「だりやアアツッ！」

ズドン、と正拳が勇次郎に撃ち込まれる。

全身の間接を固め、打撃時の全衝撃を一点に集中した、全霊の正拳。一撃必殺を狙う正拳を勇次郎に放った。

（っし、これで無事ハズが……あるだろうなッ）

すかさず二撃目を撃ちこみ、勇次郎を吹き飛ばす。

13の子供が、大の大人を吹っ飛ばすという幻想的な光景を可能にしてみせたのは、剛体術。

（今の俺で、少しでもダメージを与えられるのは、コレぐらい……ッッ）

だが、ソレで倒れるオーガではない。

少々内臓を痛めたのか、それとも衝撃で唇を噛んだのか。
口に溜まった血を、ブツと吐き出す。

「見事だが……何故仕掛けぬ」

だが、四肢は健在で眼光も正常、それどころか前より鋭さを増して、
バキを睨みつける。

そのまま戦場の中心に行ったとして、生き延びるところか全員を殺
害して戦争を終らせられるほどに、健康。

言ってしまうえば、無傷なのだ。

そんな強大な敵に、攻撃するチャンスがあるのに手を止めるとは、
何事か。

「アンタ……最初俺が言った言葉、覚えてるよな。」

『負けたら、家族サービスだぜ』

だから、俺にとっての勝利にアンタの死を絶対含まない」

もう、やめようや。

そう言うバキに、勇次郎の額に青筋が浮く。

「……バキ」

「悔しいけど、母さんを喜ばせられるのは俺じゃないから」

「バキよ」

「もう、勝負はついた」

「足が震えてるぜ」

「最初の蹴りで気絶するような奴がッ、俺の親父なワケがねエッつってんだよオッッ！！！」

「手加減にも気が付かぬ青二オッ、貴様程度が俺のガキを名乗るなど10年早いわアッ！！！」

ビリィッ、と背中が爆ぜる音が響き渡る。
バンッ、と背中に付着した土が吹き飛ぶ。

両者の背中に浮かぶのは

鬼いさんが、鍛えすぎたようです（後書き）

暗くなった空き地で、童達の喧騒が聞こえる。

童は相手の傷を考えず、ただ我武者羅に殴りつけ、殴られる。

それを避けようと、相手の拳を、蹴りを読み取ろうと、命を賭ける。

闘いは、最高のコミュニケーション。

それを本能で理解している、二人の雄の闘い。

貶し、傷つけながらも理解し始め、拳に触れなくなったら、フェイントを。

それすら読み取り、ただひたすらに打撃戦が続く。

「あんなにも……嬉しそうに」

あの間に、自分が立つ事は出来ても喜ばせる事はできないのだろう。女としても、母としても、あの二人を振り向かせる事はできないのだろう。

勇次郎を喜ばせるのは、バキ。

私を喜ばせるのが、勇次郎。

バキを喜ばせるのは、私。

誰もが相手を喜ばせようとせず、別の相手に任せ合う、自覚の無い奇妙な関係。

「家族、かア」

いつまで殴りあうのか判らないが、私にはアレを止められない。
いや、止めたくない、というのが正しい。

（微笑わなきや）

どっちに、笑顔を向ける？

最愛の夫？

最愛の子？

「二人とも、好きなだけやりなさいッ」

欲張って、欲しい物全て選んでしまっ辺り、自分も似てしまったの
だろうか。

「栗谷川、朝食の手配を」

「お……奥様？」

「お腹のすいたガキ二人の為にッ、用意しておくのがそんなに変！？」

「か……畏まりましたッ！」

「夜が明ける前に、帰ってくるのよ二人ともッ！！」

親子、水入らず。

鬼いさんが、バキを鍛えすぎたようです

完

う、打ち切りイッ！？

何人がジャックを主人公だと思ったのでしょうか。俺一人か。

というかぶつちゃけ、タイトルの時点でオチが見え見えに。文章も丁寧でないし、修正する気力も……あつたりするが。

バキの恐ろしい所は、

改めて読んでも台詞だけで場面が想像できるから文章で描写するだけ無駄。

読み手の眼にまで、イメージを見せてしまう。

だから、批評が無いと何処の表現が悪いかさッパリ解らんッッ

このSSの二次が少ない理由、少し分かった気がするぜ……。

この小説は、至って平和的な家族愛をテーマにしています。
殴りあったり、肩を叩いたり、高い高いしたり、泥遊びしたり。

こんなの格闘じゃないと思った方、原作を読んだ方が楽しめます。

次回からは、

地下格闘士外伝 グランプラー すごいよ!! 鬼いさん

をお送りします。

乞う御期待ッッ

鍛え終わり（前書き）

誰かの命が散るのを許せず、改変しようとするのが二次で良くある原作改変と言う奴である。

本来こうあるべきでないキャラクターを乗っ取り、好き放題動かすのが憑依物である。

自分ったら超強エ、と満足しつつ、強者を蹴ろうとするのがチートオリ主というやつである。

「もう、十分だろう」

転生だの、憑依だの、オリ主だの。

自分に知識を与えてきたナニカに、十分恩は返した。

じゃあ、好き放題闘うか。

そういえば憑依ものだった事を、作者もすっかり忘れていた。

鍛え終わり

範馬の家庭はバイオレンスだが、偶に家族会議をしたりする程度に仲は良くなった。

授業参観に乗り込んで、さんすうを解けぬバキを晒い、屋上でケンカする程度に親子仲は良いらしい。

飛び降り事件に発展し、流石にバキも骨折したりしたが、そこは母親の財力で治療。

『ガキ二人の後始末をしてあげる、これも愛なのかしら』

バキの母も開き直ったらしい。

ちなみに、ガキ二人とは勇次郎と刃牙の二人の事で、女に見向きもせずケンカする二人を見てそう感じたらしい。

人が求める欲が、色欲だけではないというのが実感させられる言葉だった。

閑話休題。

結局、本質は変わらないまま闘争を楽しんでいるのが、皆の現状だった。

「親父が世界最弱なら、俺はその少し上で……やっぱり駄目だ、世界最強なら、その一歩上で良いや」

ちよつと強い奴を探してくる、と言って世界各地の強豪を巡ってブラリ旅を始めたバキ。

「賤用に、技でも見につけてみるかあ？」

ちよつと武道家襲ってくる、と言って各地の看板を破りに出かけた勇次郎。

「どいつもこいつも……日本で十分だろうに」

ここには地下闘技場が在るだろう、と言って、徳川邸の門を力いっぱい殴りつけた。

……おっと、チャイムがあつたようだ。

Side ボディーガード

轟音と共に、屋敷の門が吹き飛んだ。

こんな深夜に、ロケットランチャーを放つ馬鹿がノコノコとッ！

徳川様の睡眠時間を奪う、襲撃犯、許しておけん。

「各員、他の攻撃方法の警戒と、兵器の奪取を優先ッ」

「警護はッ?!」

「我々是对素手のプロ中のプロ、ならば遠距離を奪うのが先決……
警護は4人でいいッ、各自流れ弾に注意ッ!」

「了解ッ」

土ぼこりが舞っている中、迅速且つ最小限の作戦が立てられる。各々が一流の猛者、それぞれが最良の判断をするだろうと判断しての作戦。

動揺する時間も限りなく短く、相手がつけている時間を与えない、戦闘者としての心構えを、皆が持っている。

そんな我々を出し抜き、徳川様に傷をつける事など不可の……

「お、出迎え感謝する」

土煙を破って現れたのは巨漢だった。

トレーナーの上からでも判る、筋肉のシルエット。

地下で闘ってきた時に何度も経験した、闘争の感覚。

いや、そんなものよりもっと強い、死の気配、というものが実在するならば、きっとコレは……

「あ、アポは……」

アポは、取っていますか。

客人を迎える、受付嬢のような台詞を言おうとし、飲み込む。違うつ、私が言いたいのはそんな言葉じゃないッ！

私達は、ボディーガード、いわば戦う者だろうがッ！！

「地獄へのアポは、取っておりますか？」

「逝き飽きたからここにいるんだぜ、給仕^{ボーイ}」

「……ご法度にならない程度に、痛めつけてあげよう」

「じゃあ、俺は優しく相手をしよう」

そういつて男は、片腕を前に差し出し、親指と中指を合わせるような仕草を取る。

合わせて私も同じように片腕を差し出すが、これは実に奇妙な構え。

頭骨か顔面か、一種の貫手の様なものの、構えだろうか。

いや、格闘技だけと勘違いするなよ、加納秀明。

暗くて見え難いようだが、指弾の類もありうる。

だが、判っていればどうという事はない。

石だろうと針だろうと暗器だろうと、私に当てられると思ったたら大間違いだぞ。

ピン、と弾く音と同時に、横へスウェイし、その横つ面を殴ろうと近づき拳を放つ。

それにあわせて飛び道具をぶつけようとするが、それごと粉碎してやるッ！

バシッ！

瞬間、拳に衝撃が走った。

拳、違う、ビンタ、違う、額、違う、命中した、違う、何が、当てられた？

「ッ、まさか」

私の知らない武器か何かが、私の拳を弾いたのか？

だとしたら他の連中に警戒するように言わないと……。

「た、隊長……」

全員が、私の方を向いていた。

他の襲撃犯は倒し……いや、この男しか、いない、のか？

では、コイツは、一体。

改めて見てみた男の指には、何も仕込んでおらず。

重火器の類を持っているようでもなく。

まるで指パッチンを、私の額に決めようと……

……。

S i d e O U T

「ふむ、一度やってみたかったが……中々良い」

気絶させる為だけの指パッチン。

実力者には効かないかもしれないが、彼のように考えるファイターには良く効く。

予想できない攻撃に対して非常に弱く、攻撃も三流と言える。

「さて……」

後は、周囲の雑魚共か。

巨漢が見渡してやると、ビク、とその場に居た者達が強張る。コレが普通の反応だという事を、スツカリ忘れていた。そんな新鮮な反応に、思わずクスツと笑ってしまう。

それが、周囲の恐怖を更に煽っていたが。

「夜も遅いし、お眠の時間だろう?」

パチン

「お、雄オオオツ!!」

指パッチンが滞った空気を破り、ソレを合図に集団で襲い掛かる。いや、正確には襲い掛かられるのを防ごうとしていたのだ。

「その選択は正しい」

実力とか関係なく、職務に忠実な者には好感を覚える。さっさと、楽にしてやろう。

絶望を待つ時間こそ、絶望するってガイアもいつてた。

殴りかかろうとする男に対して、指パッチンを決める。

少ない関節を駆使した、一種のマツハデコピン。

間接を増やしすぎると爪が割れてしまうような威力になるので威力

調節は難しいが、それを難なくこなす。

それに、大の男達が吹き飛ばされていくのだ。

ソレを目撃し、硬直していた者の顎を打ち抜く。

間合い内の四人の意識を飛ばし、その外側に居た人間の眼には何も映らなかった。

状況、雰囲気から指パツチンで気絶させたのだろうと予想はしたものの、それを認識する暇が無かった。

その四人が崩れ落ちる前に、その小さな包囲をすり抜けて後続の連中の顎を正確に打ち抜いていく。

さながら、それは舞踊。

血も悲鳴も出ない、綺麗な舞踊であった。

「実に愉快」

その言葉と同時に、全員が崩れ落ちたのはある意味必然と言えた。それほどまでに、ジャックの實力は桁違いなのだ。

S i d e ? ? ?

100人は入れそうな部屋で、二人の男が会話をしていた。

その巨大な部屋をそれだけの為に使うのだから、屋敷の持ち主の器量が窺えるだろう。

片方は小柄な老人で、煙筒を片手にのんびりと一服。

片方は大柄、というよりも巨人で、その老人とは対称に周囲を警戒。

「のう、アントン」

「ええ、判っています」

「「静か過ぎる」」

最初の爆音から、数分。

僅かな喧騒が聞こえたと思ったら、急に静かになり。

蟋蟀の無く音が障子の隙間から聞こえてくるだけで、いつもと変わらない程の、静寂。

「一々報告しにこないとは、随分と信頼しておられるのですな、御老公」

「ワシを誰だと思っておる」

パン、と両掌で膝を叩き、前へと乗り出す小柄な老人。
名を徳川光成とあって、勇次郎とは違った意味で闘いに執着している。

地上最強わ引き合いに出すほどに、闘いを愛している男だった。

「信頼しておる、そして倒されているとも」

「え」

ニカツ、と笑う光成に対して、アントンと呼ばれた巨人は固まる。
猪狩完全、アントニオ猪狩といえば、皆も判るであろう、伝説のレスラーである。

「最初の爆音、アレは多分素手じゃろう」

「いや、その」

「音から察するに、独歩クラス……面白くなってきたわい」

「ご、御老公、身の危険とかは、感じないのですかッ」

報告しないのではなく、出来ない状態だろう、と。
つまり、警護の人間が襲撃された事を承知で、笑っていらっしゃるのだ、この人は。

今の状況を理解しているのだろうか、という質問に対して、光成は。

「これほどまでの人物が、他でもないワシの所に来たんじゃ」

素手で、先程の音を出すとして、どれほどの実力者だろうか。
そして、仮に今から逃げたとして、無事で済む訳がない。
そう判断しての、落ち着き。

一種の、開き直りである。

一度冷静になれば、襲撃犯の目的を考える余裕ができる。

命や金……ならばこうまでして騒ぐ必要も無いだろう、枕元に立つて脅せば済む話だ。

「なら、目的は一つじやろう」

徳川光成は地下闘技場を運営している。

そこは各地の猛者達が集い、最強の座を得ようと戦いあう場所。
そこは各国の強豪達が集い、競う相手を得ようと求め着く場所。

ならば、この襲撃犯の目的を察するのも容易い。

「地下闘技場の、参加権、ですか」

猪狩が、意を得たように緊張を解く。

招かれざる者だが、こうなれば御老公にとっては予期せぬ客。

むしろ、心の何処かでこういう面白い客を求めていたのだろうか。

「話が早くて助かる」

「オワッ！」

安堵した猪狩へと、不意に声かけられる。

背後に居たのは、自分同等の巨漢だった。

節々から窺える傷跡が、闘う者としての勲章に見えるほどに、屈強。闘おうとしたら、奇襲は必須として、殴り合いは駄目、組技のみならば、いけるか……？

「ホホーッ、傷一つ無いとはッ！」

ホッホッホ、と堪えていた笑いを吐き出す光成。

悪戯が成功した子供のように笑い、その様子から猪狩は大分前からいたのか、と判断していた。

何時の間にこの部屋に入ってきたのか、それも、俺に気付かせずに奇襲が通じるどころか逆に仕掛けられそうだと肩を竦める。

「全員オネンネしているだけで、俺は歩いてきたただけだぜ」

傷を負う理由が無い、と笑う巨漢。

返り血も浴びずに、警備全員を鎮圧できる、それが最低限の実力ライン。

そんな人物に、気付かぬまま背後を取られていたというのだ、心臓に悪い。

「御老公も、人が悪い」

「スマンのツ、じゃが大の男が眼を輝かせているのを見ては、の！」

こう、シートと静かにしておくジェスチャーをじゃな、と笑う老人。それを見て猪狩は、ここもまだまだ安泰だな、と微笑。

「ウム、それで地下闘技場へのエントリーは可能だろうか」

「もちろんっ、と言いたところじゃが……アントンよ」

「いつちょやってみるか？」

その問いに、猪狩は何も答えることが出来なかった。

ジャックと名乗ったその男をエントリーした翌日。

さっそく彼の男が闘技場で闘うと聞き、猪狩と光成は闘技場へと向かった。

特等席に移動する合間に、ジャックが闘技場の中央に立っているのが僅かに見えた。

「さっそく、勝ちおったか…試合を見逃したのは残念じゃのう」

「ご、御老公、あれは違います」

「ん？」

残念残念、と溜息を吐く光成に対して、傍付の男が躊躇いがちに話し掛ける。

目上の間違いを訂正するのに躊躇してか、いや、予想できなかった事を、言おうとしていたからだった。

「まだ、ジャック選手の試合は始まっていないんです」

その両隣には、倒れ臥す二名の男の姿が。

一人は、ブラックベルト、一人は、ムエタイのチャンプ。

両方ともに、腹部に掌の痕を残したまま気絶。

「まさか……」

「Mr・トクガワ」

実況のマイクを引つ手繰ったジャックの視線が、この場で一番偉い男を睨む。

いかにも自分は不満ですよ、と唇をやや尖らせながら、その鋭い眼光は光成を射抜いていた。

「4対1の試合、無理ならば全選手との勝ち抜き戦を許可して欲しい」

この場にいた全格闘技者を虚仮にするかのような言葉が、会場に響き渡った。

ある者はふざけるなど憤り、ある者は闘いたく無エと慄き、ある者はいいぞもつとヤレと囃し立てる。

会場が、一人の男によって大歓声に包まれた。

光成もその一つで、あらんばかりの声で怒鳴りつける。

「……はサシで闘う場所じゃアツ!」

鍛え終わり（後書き）

今までは鍛えていた間の話……

鬼鍛の本編はここからだゼッ

範馬流訪問礼儀作法（前書き）

このSSに登場するのは鬼ばかりです。

真似をするとすぐ借金を抱えることになります。

貯金をするか、財閥の知り合いを作るか、腕力家になってからにしましょう。

前科はつきますが。

範馬流訪問礼儀作法

S i d e ボディーガード

轟音と共に、屋敷の門が吹き飛んだ。

またかッ、糞ッ

「た……元隊長ッ」

「元をつけるぐらいならば呼ぶなッ」

前回の失態。

御老公様からは相手が悪いと言われたものの、納得がいかに暇を貰った。

あの時、デコピンを新兵器と勘違いし、あまつさえそれでKOされ
るという失態に、全員が赤面。

だが私は仮にもあの闘技場で戦ってきた者、他の面々とは屈辱の度
合いがまったく違う。

自主的に隊長の座を降り、しばらく猛特訓したのも良い思い出だ。

「まかせておけ……」

だが今度は何時ぞやのようにはいかない。

あれから数ヶ月、恥を忍んでとある柔術家に頼み込み、ありとあらゆる打撃を研究してきた。

KOされる攻撃を確実に防ぐ為に、何度意識を奪われたか。

再び地下闘技場で適当な奴と闘い、自身の成果を正しく確認した。

「屋敷も、お前たちも全員守る」

完全な防御術さえ身につけるなら、攻撃など単純な一撃で事足りるのだ。

前回は予測だになかった故の深くをとったが、今日はそうはいかん。

貴様にデコピンを辞めさせ、全力を出した一撃も全て完封してみせよう。

今の私なら、武神にも勝てるッ！

パチン

「バキよ、ココは一つコレで優しく制圧というのはどうだ？」

「いや、せっかくだから俺はこの自愛に満ちた攻撃でやるよ」

「つくづく嫌味な奴だぜ、誰に似たのやら」

「他にいるかい？」

「違うない」

クスクスクス、と大人の笑い声が聞こえる。

土煙のシルエットと声から、巨漢と青年のようだ。

フ、人数が増えたところでどうという事はないんだぞ、ジャックとかいう輩よ。

あの時の屈辱、今こそ晴らして

決
着！

S i d e O U T

爆音と、静寂。

既視感を覚えつつも、慌てるふためく女中にのんびりと馳走の用意を指示。

招かざる、そして天が招いた客に、お持て成しをせねば。

さて、今回はどんな奴かな、と期待する徳川光成だったが、その相手を見てその期待は崩れ去った。

「邪魔しているぜ、ご老公よ」

「お、オーガ……」

もはや試合も糞も無い、血だらけの戦場の予感が、脳裏を過ぎる。
オーガ。話だけ聞けばどれもが眉唾と思う実績が、本人を前にするとソレすらが前哨。

記録に残せないことが多すぎる、という逆の意味で偽りの実績が多く残されている。

実際は、もっと酷いだろう。

「地下闘技場選手、それに登録するのが一番手っ取り早いと聞いてな」

「ヒッ」

終った。長年の夢が、ガラガラと音を立てて崩れ去るのを幻視した。独歩が、独歩さえ居てくれればこの男に対抗出来るものの……

二階から転げ落ちたと聞いた時に、

『流石の独歩も年には勝てんようじゃの、ワシと同類じゃッ』

年齢の事をからかったのが気に障ったのか。

山に閉じ籠って修行に明け暮れるようになってしまった。

そんなに躓いて転び、壁をブチ破って落ちたのが癪だったんだろうか。

実際は神心会の長がド突き合いに負け、それを誤魔化そうとした門下生の所為。

気絶していた独歩はソレを知らず、単純に修行し始めたのだが悲しい勘違いが発生していた。

息子の愚地克己も、とうとう自分の時代か、と長としての振る舞いを身に着け始めていた。

そして独歩が帰宅して、長の椅子がいつのまにか取られていて騒動になったのは、また別の話。

ともかく、今はそんな独歩に無性に謝りたかった。

独歩よ、オヌシの武神としての胆力よ、今一度、この瞬間だけワシに……

「不肖の倅を、ここに登録してやりたい」

「……へ？」

オーガが大暴れするかと思っただが、事はそうでもなく。

その倅の為にわざわざここまで足を運んできたらしい。
なんじゃ、伝え聞いた話より紳士的ではないか、家族にはやさしい
のかのう。

「俺が雑魚共を皆殺しにしても良いんだぜ」

「そ、それだけは勘弁してくれ」

独歩よ……何処行つたんじゃ……

獅子が10頭以上居る折の中で、一人だけ閉じ込められる兎。
自分の絶望とした現状を切り開いてくれたのは、他でもない、もう
一人の襲撃者だった。

「お、ここかな」

数十分後、良い汗掻いたと言わんばかりの好青年が障子を開けて入
ってくる。

成る程パツと見でも十分強いというのが判る。

鍛え上げた肉体、全身についた古傷、物動じない態度。

さしづめ、大人しいオーガ、といった所か。

「遅いぞ、バキ」

「迷っちゃって……この人が？」

「徳川のご老公だ、一応礼儀は弁えろ」

「い、一応って……本人の前で言うかのオ……」

光成の正面に正座して、畏まる青年。

自分の屋敷であるかの様に寛ぐ勇次郎と違い、こういった場合は初めてなのか、視線がとどまらない。

随分と、頼りなげな青年だった。

「あー、範馬刃牙って言います」

「そんなに畏まらなんでいい……各国で騒ぎを起こしているそうじゃない」

そんな青年を見なくなかった光成は、敬語をやめるように言い、話題を変える。

強い者こそ偉い、を心情とする光成にとって、強者のこういった姿を好まない。

「いやあ、アレは言葉が通じない故の、勘違いってやつでして」

「勘違い？」

「格闘家なら拳を構えるだけで判ってくれると思ったんだけど、ね」

一流が、見つからなかったんだよ、と眼を伏せる。

色々、試合の結果で警察沙汰にされた事が結構あったらしく、深く追求しない事にした。

そして大陸、北米、南米と徒歩で旅をし、格闘家を叩きのめして日本に帰国。

途中、ハワイに寄ってそのまま泳いできたのだとか。

「沖の鳥って、本当に小さいんだな」

「そ、そうか……」

「嵐で方向がわからなくなった時は、ヤバかったよ……鳥取砂丘もエジプトも変わらないんだから」

死んだ魚のような目で回想し始める青年を見て、光成に冷や汗が流れる。

彼なりのジョーク、にしてはちょっと笑えないし、ジョークにも聞こえない。

「まあおかげで、スタミナは着いたんだけど……ずっと浸かっていたからさ」

そう言うときバキは脚を指で押し、第一関節が見えなくなる程度まで沈める。

「ふやけちゃったみたいで」

「そこで、コイツのリハビリに協力してやりたくてな」

「リハビリ？」

「戦闘と手加減の練習です。ざっと3年振りになるかな……」

流石に絶句した。

格闘家とかじゃなく、人間として3年も泳いでいたというのはちょっとおかしい。

おかしいのだが、格闘の話題になった時の眼光の鋭さは、一流の戦士もたじろぐ程。

成る程、確かに強い。

「じゃが今のチャンプは、ワシの代で多分一番強いぞ？」

全試合一撃KO。

柔術、空手、拳闘、ありとあらゆる格闘術相手に。

重量、サイズ、人種全て問わず、フェイントの類を使わずに、一発。攻撃をさせるだけさせて、全て見せ終わったらと判断した瞬間、アップ！。

実力者によって威力は抑えているらしく、強い者程上へと跳ぶらしい。

観客も、はやく破る奴が現れないかという期待より、次はどのくらい跳ぶのか、そっちを期待する程の強さだ。

回避も防御も許さず、攻撃で怯まず、そんな闘いの為に産まれた機械が、現在のチャンプだった。

経歴は未だに不明で、調べても一向に判らない。

本人曰く、いつか話らしいがそのいつかが来る前兆も無い。

「ジャック、だな」

「知っておるのか」

「ちよつと、ね。まともに戦った事はないけど」

まともに、というのを聞いて、ますます二人の実力がわからなくなる。

あの一撃KOも手加減しているというのは、光成にも判っていた。

実力者によって強く撃つ、という事はまだまだ強く放てるという証拠だからだ。

至って未知数のチャンプ、それがジャック・ハンマーという男だった。

「俺よりは少し弱いが、今のバキと比べれば確実に上、それぐらいの奴だ」

ここで勇次郎がある意味具体的な数値を出す。
現状全国二位ぐらいの実力らしい。一位は言わずもがな。

「なんだいその例え、母さんより強いのか」

「少なくとも迷子のハナタレよりは上だ。国の名前と位置ぐらい覚えておけ」

でなきゃ今頃万全の状態で殴り合っていたものを、と叱る勇次郎。
それは心外だぜ、とバキは肩を竦める。

「親父だつて紛争地帯に関わる場所しか知らな……ごめんなさい」

「フン」

家族といえど、言いすぎだ。

正座したバキの足裏に指を突き刺す、その素振りを見て、飛び上がってからの土下座は余裕でしたとバキ。

正しい事は殴つてでも通すが、間違っている事は素直に謝る、これが現在のバキの、勇次郎に対する態度だった。

（さすがに一日中痛みと痺れが続くのは勘弁だしな）

迷子になりながら太平洋横断をした日に、フラフラの状態で両親からの説教。

不法入国を誤魔化す身にもなれッ、とか、中国拳法とやっていないのか馬鹿がッ、とか、

臭いから洗って来いッ、だとか、この程度で衰えるとは腑抜けがッ、とか、

学校の手続きが面倒なのよッ、だとか、貴様に本当の水泳を教えてやるッ、だとか。

さんざん言われて殴りかかったら軟弱者オッ、と放り投げられ、健康マツトの上での正座。

なんだかんだ言って心配されていると感極まった瞬間に、足裏を指されて悶絶。

一日中、地べたを転がる破目になった。

（そんな一撃をここでやられたら、眼もあてられねエ）

人様の家では、勘弁してください。

そんな断腸の想いを表現しつつも、土下座するバキを見て勇次郎は少し考えつつ、途中で考えるのが面倒になって、いつも通りの行動。

「見苦しい」

ドスッ、と指を突き刺される。

バキに対しての勇次郎の態度は以前変わらず。

唯我独尊というか、自分が正しい事を通す、文字通りの腕力家。

ジャンケンでの負けも無し、遅出しされても無理矢理勝ってしまう、そんな親父だった。

まあ、これでも優しいほうなのだが。

「……ッッ!!」

「もう用は済んだ、帰るぞ」

「……アアッッ!!」

なんとか堪えようと、返事だけでもしようとしたが言葉にもならず。人の家なので、転げるのだけは堪えているが、それが更にキツく。結局バキは、鬼のような形相をしながら勇次郎の背中を睨むことしかできなかった。

ある意味、鬼の子である。

「その……勇次郎や」

「なんだ、爺イ」

あ、畏まるなといった傍からコレだよ。

なんかワシの事全然敬っていないわ、と突っ込みたくなるが、そうしろと言ったのは自分。

だが、これこそが本来在るべき形なのだろう、そう光成は思った。

「客になんの持て成しもせず帰らせるのも、徳川の恥。

この老いぼれに夕飯ぐらい、馳走させてくれい」

コツチも動けないようじゃし……と言う光成に対して、勇次郎は少々不満気。

息子の体たらくを他人に見られるのが気に入らなかったらしい、原因はともかく。

帰ろうと障子に手を掛けた辺りで、急に踵を返し、嬉々とした表情で光成の前に座り込む。

「折角の持て成し、残して帰るのも行儀が悪い」

この時勇次郎、意外に素直ッ。

それは、闘うことに特化しすぎたこの男が、気付いたときには身についていた、特殊能力。

漂ってくる匂いから、内容、距離、を全て把握。

戦場で培ってきた、風向き問わずに硝煙の匂いを嗅ぎ取るという察知能力。

そんな経歴を持つ男の経歴が、一級調理師の、美食倶楽部の、味皇の嗅覚を遥かに凌駕^{こえ}る嗅覚を。男の身に纏わせた。

「めふんは好物だ」

ただ単に、食べたかっただけなのかもしれないが。

バキがまともに活動できるようになるまで、23時間と59分……

範馬流訪問礼儀作法（後書き）

タイトルでもうオチている件。

本文を読まなくても予想出来たならシャドー検定二級。

第二部ラストタイトルが予想出来たらシャドー検定一級。

漫画みたいに絵が見えてきたらリアルシャドー検定二級。

アニメみたいに声も聞こえてきたら、多分病気です。

素直に紅葉先生に見てもらいましょう、作者は健康になりました。

慈愛の攻撃

- ・ ガイア戦での技。 頸動脈を両指で圧迫し、脳に血を送らせない。
- ・ 加減失敗すると、後遺症がのこりますので、まねしちゃだめよ。

勇次郎さんの特殊能力

- ・ 毒効かない
- ・ 雷効かない
- ・ 病効かない
- ・ 癌効かない
- ・ 地震効かない
- ・ 爆風で飛ばされない
- ・ 高所から落ちても死なない
- ・ どんな弱点をも見抜ける眼
- ・ 周囲に何があるか把握する鼻
- ・ 成分とか分量を分析できる舌
- ・ 100m先の針の音をも取る耳
- ・ 半径3m内の熱源を感じる肌
- ・ 力

虚仮（前書き）

まあ、落ち着け。話を読み返そうとするんじゃない。

それをしてしまえば自分の過去が、黒歴史が、ややこしい設定がうわあああ

虚仮

酷く見覚えがある光景。

ウム……確か本ではそれなりに強いというか、初期のライバル的キヤラだった気がする。

あの物語では勝負がついたらもう闘わないようだから、その他の皆さん扱いになっちゃったが。

お約束、というものがあの物語にあるなら、ライバルとして劇的に成長できただろうに。

「筋力を頼りにした破壊、か……」

手を正面に、陰陽の如く円を描いて構える。

生憎、その型の名前が何なのか自分には判らないが、空手に似ているような構え。

余程指に自信があるのか、獣が爪を振るうのを連想させるかのような指の空き具合……これも一種の空手といえよう。

「どうやら紐^{「コード」}を斬らねば、安心できないようだなッ……！」

初登場したキヤラは主人公より強そうに見える、これはお約束だ。その補正が入れば、或いは

黙々と終えられる作業に飽きていたが、久しぶりに非現実が観たくなり男は東京ドームへと足を向けた。

新しいチャンプが顕れていないだろうか、そんな期待を僅かに持ちながらも地下へと降りるエレベータに乗る。

案内人からその日のカードが告げられた時は思わず溜息を吐き、それでも対戦相手がどんな人物か見たかったのか足は進む。

そしてその勝敗予想に眉を潜めている間にエレベータの門が開き、男を迎えたものは

「こゝ、之は一体……」

廊下の人気の無さと、熱波。

男が着用していた着流しがはためき、飛ばされるかのような幻視。

「もし……」

案内人に何事が尋ねようと思い、振り返るがそれは間違いであったと男は知った。

黙して語らず。

ただ、微笑みつつも口元に指を寄せる案内人に無意識の内に頭を下こぶげる。

すぐに起こし、男はそのまま廊下を走り抜けた。

もしかすると、蘇ったのだろうか。

血沸き、肉踊る闘いが。

あの日の、望んで止まなかった後樂園が。

最もシンプルな、命の駆け引きが。

その日の東京ドームの入場者数は常時の倍。
奇しくも、強者ではなく渴望する者達の間で、シンクロニシティが
起きていた。

『あの男がッ、機械の戦士が自らカードを申し込んできたッ！！』

怖いもの見たさの者達が場内で感じたのは、困惑と違和感。

黙々と相手に撃たせ、頃合を見て一撃を放つだけの男に、何かを望むという感情があつたという事に動揺を隠せなかった。

『青竜の方角ッ、不敗にして不動のチャンプッ、その他不明の男、ジャック・ハンマーッ！！』

物静かに現れる筈の男が、開始前から既にその場所を陣取っていた。腕を組み、さながら恋人を待つかのように焦がれている様子に、場内の皆は彼も戦士ファイターだったという事を知る。

『対するは白虎の方角ッ、鎬流空手、『紐切り』の鎬昂昇だアーッ！！』

同時にそれは、その相手がかつてない程の実力の持ち主という証明だった。

白虎の木柵を乗り越え、会場に降り立った空手家に何人かが驚嘆を隠せない。

数多の格闘技を、或いは戦士達を観てきた実況もマイク片手に唾を飛ばしている。この実況者に限っては常時通常運転ともいえるが。

「武器の使用以外、全てを認めますッ」

パキ、ポキと手の甲を押し、骨を鳴らすジャックに対し。指先に力を入れてカキン、と音を鳴らす鎬昂昇。

語らずとも、相手を威嚇する猛禽類の如く、対峙していた。

「闘いがしたいそうじゃないか………？」

先に口を開いたのは昂昇だった。

その問いかけは、この闘技場に集ってきた者全ての根本であると同時に、自身の願望でもあった。

「酷く……そう、酷く待ち草臥れた」

ギラリと牙を見せ、押さえつけられない分の喜びが貌に現れる。

試合開始の合図だけを出す仮の審判も、こんな人物だったか？ と疑問を隠せない。

「ようやく闘いが、格闘グラップラーが始まると思うと、嬉しくて堪らない」

その言葉に観客が、拳を振り上げる。

この男が黙々と人を殴るだけだったのは、自分達の武が格闘では無かったからだ、と。

つまらない闘いを今まで見せていた理由が、他でもない自分達にあったのだ、と。

「我々武道家を愚弄するかッ」

「鎬イツ、その外人に伝統の力を、ニッポンの空手っちゅうモンを見せてやれエッ」

「死ぬまでやれ」

「切り刻んでやれッッ！」

自分達の積み上げてきた武が否定された事と、今までのつまらない闘い振りに怒りを隠せず、爆発する。

対して対峙する二人はそれに耳を貸す様子は無い。

一方はくだらない戯言を、と鼻で笑う。

自分の力を見せる事もできぬ臆病者では、この男には届く筈も無い

というのを薄々感じ取りながら。

「双方元の位置へ」

もう一方は、耳にすら入っていない。

彼の脳内では、『名前^{キャラ}』の相手しか必要ないからだ。

それ以外の相手は、総じて弱いというのがここ数年で身に染みていた。

だからこそ、決して自分より強いとは言えない『鎬』という相手との闘いを渴望していた。

「例えそれが蚊トンボであろうと、俺は容赦はせん」

「ただの力自慢では、わたしには勝て……ッ」

「どうした、双方元の位置……へ……」

審判の説明が終り、戻るよう指示を出そうとした時には、既に空気が変わっていた。

彼等二人にとって必要なのは合図ではなく相手。

それ以外の全てが不純物で、一切必要としないのだ。

「……………」

審判の声も必要とせず、両者共に自然と構えていた。

一方は空手を得た獣の牙を、もう一方は獅子の如く飛び掛らんとするような前傾を示す。

（なんだこの感覚は……？）

一切の雑音を許さぬ無音の中、昂昇は過去に得た事の無い気分を感じていた。

兄と喧嘩した時にも無かった、延々と突きを、貫手を練習してきた時も無かった、諸外国で強者を探していた時も無かった。

過去を振り返ってみれば、相手しか目に映らないような経験は、無かった。

（始まってもないのに何故わたしは構えている？）

それはまるで、美女と一夜を共にする前の純情な少年のような心境。

（いや……これはッッー！）

「早く来い
H u r r y U p
」

指を人体の中心　心臓を示し言い放った。

命を奪わねば、勝てないぞ。

「破アツツ!!」

『試合、はじ開始めエツ!!』

貫手の連打。

貫通力に特化した必殺の貫手を誰よりも続けてきた男が。
一切の驕りを捨てての奇襲を仕掛けていた。

双方承知済みの奇襲だが、その連打はどれも戦闘に響くものだった。

上腕。健康な神経を引き抜けば試合中に使用はできなくなる。

その周囲をガードする事も出来ず、ここを封じれば首を狙う事も可能だ。

脇腹。以後の打撃に対する防御力を削ぎ落とし、且つ腰という打撃の要を痛めるだろう。

腰を入れる、と言葉にあるように、打撃のさいにこの部位は攻撃の加速に必ず必要としている。

長期戦に持ち込んだ際に、相手に違和感を覚えさせるだけでも効果は高い。

大腿。放てばフットワークを封じることができ、一つ潰せば蹴りという選択肢を奪える。

軸足一つで蹴りは放てず、また軸足を蹴りに使えば体勢が崩れ、攻防共に隙だらけになるのは明白。

また動脈にも繋がり、時間制限というプレッシャーを相手に植えつけることが出来る。

本命の首。狙いがつけ難いというのを除けば、相手の視界の半分を奪うことが出来る。

こうなれば、勝負はついたも同然の状態、いわば一方的に相手を攻撃することが出来る。

これこそ鎬が、鎬昂昇が『紐切り』と呼ばれ、畏れられる所以だ。

昂昇の一撃はどれもが致命傷、あるいは急所であると考えてもおかしくは無い。

「そんな鎬流空手だが、新会長さんはどう見るつもりで？」

「他はてんでなっちゃいない、が、あの貫手だけは恐ろしいものがありますね」

「どれか一つでも極める、とはそういうことだ」

「……」

不精髭を生やした中年の問いに、若々しい青年が眼を細めながら応える。

貫手の一発も見逃さず、自分の物にしようと夢中になる青年に溜息を吐く男。

虎視眈々と、闘いを眺める者達。

「確かに鎬の技は恐ろしい……それはあの男も例外ではない、が……」

「ただの筋肉だけの男じゃあなさそうだ」

日本武道を連想させる衣に身を包んだ者。

誰が聴くわけでもないその呟きに、誰かが呟きを返す。

この時、見る者が見ていれば解ったであろう、奇妙な連帯感が生まれつつあった。

武術評論家達の影。

「闘争の愉悦を知ったようだな」

「ん。んー……いや、アイツは前から知っていた筈だよ」

「ほう」

客席の最上段。

部外者でありながらも己がその場の頂点にあらんとする態度は、その周囲に空白を生み出していた。

舞台の中央だけでなくそれを眺める猛者達をも品評するその眼光は、既に目星をつけていた。

それでも尚、視線は中央に向けられている。

「まだ、少し遠慮してる」

「相手が、弱いか」

誰よりも遠くに並び立つ両雄は貫手の連打が全て迎撃されているのを捉えていた。

「な、に……ッッ！？」

中指を親指で押さえ込み、衝突の瞬間に解放。
僅かながら上腕と手首を動かし、更なる加速を得て放たれたソレは
常人の眼には映らず。

『こ、これはどうしたことでしょうかアッッ!!』

運動エネルギーは上部から末端へと流れてゆき。
馬鹿力を最も小さな動作で最も道理に沿ったやり方で発揮した結果。

『『紐切り』がッ、斬られている　ーッッ!!』

空気と音の壁を斬り裂く、『マッハデコピン』は。
鎧の攻撃を迎撃した上で、指を切り裂いていた。

虚仮（後書き）

ダイジョウブ、爪ノ白イ所ガチヨット無クナッタダケサ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7224u/>

鬼いさんが鍛えすぎたそうです

2011年12月21日20時37分発行